
戦闘狂の存在理由 《レゾンデトール》

天海澄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦闘狂の存在理由
レシントンテール

【Nコード】

N4884Y

【作者名】

天海澄

【あらすじ】

戦場戦人は、命をかけた尋常の勝負……戦いを求めていた。しかしそれは、法整備され「人を殺してはいけない」道德や倫理の染みついた現代社会では到底叶わない願い。そんな世界と、まともな道德観の欠落した自分自身に辟易し、どこか諦めに近い空虚感に苛まれていた。そんなある日、戦人は街で噂になっていた都市伝説「骸骨侍」と、法で定義できない存在に対処するための非公式組織「公安零課」に出会う。その出会いをきっかけに、戦人は公安零課に所属する少女、芹沢梢と共に、都市伝説と呼ばれる不思議な事件に関

わることになるのだった。

第18回電撃大賞、一次選考通過作。二次選考基準の評価B（A、B+、Cの五段階評価）。エピソードプロローグまで全8章構成。順次投稿していきます。

0・戦闘狂の独白

生まれてくる時代を間違えたのだと、俺はずっとそう思っていた。

別に、社会が悪いと訴えるつもりはない。生活には困っていないし、身体は至って健康体。友達と呼べる人間は決して多くはないが、それ自体は苦痛を感じることもない。不満が全くないと言えばそれは正確ではないが、少なくとも生まれてくる時代に不満を覚えるほどのものではない。

だからこれはどちらかと言えば、俺がおかしいのだ。

だって、そうだろう？

着々とSFの技術が現実になりつつある現代日本で、命を賭けた真剣勝負を望む、なんて。

そんな願望を持つ人間の方が、イカれている。誰だってそう思うだろうし、他でもない俺自身もそう思っている。今の日本……いや、この世界中で、命を賭けた戦い。それも、ただの闘争や戦争ではなく、一対一の真剣勝負を実行できる場所なんて、おそらくどこにも存在しないし、そんなことを望む人間もいないだろう。そもそも、そうまでして戦う理由というものが存在しない。

武勇のある人間が重用される時代はとうの昔に終わっている。

現代社会では、個人が戦うということ自体が必要とされていないのだ。

そう、分かっていたところで、俺の心が満たされることはない。付きまとうのは、心にぽっかりと穴が開いたような空虚感。その隙間が永遠に埋められることはないと分かっている、苛立ちを覚える。果たして、初めてこの虚しさを自覚したのはいつの頃だったのか。その心の隙間を埋めようと身体を鍛えて、鍛えて、鍛え抜いて鍛えた分だけ余計に虚しさが増していると気付いたのは、割と最近の話だ。

平和ではなく、闘争を渴望する。

それは、人間としての欠落なのだと思う。

生まれてくる過程のどこかで、まともな道徳、あるいは価値観というものをどこかに置き忘れたのだろうか。義務教育中に幾度となく繰り返し説かれてきた、命の大切さに関するこの時代の思想にはどうしても馴染めなかった。世界でも有数の平和な国である日本で義務教育を受けながら、俺は普通と呼ばれる道徳観を身につけることができなかったのだ。

そこまで俺の心には大切なものが欠落していて、だけどそれ以上は狂えなかった。

俺が望むのは暴力ではない。人を殺したいのでも、痛めつけたいわけでもない。

一見矛盾しているようで、戦うことと人を傷つけることの本質は全く異なるものだ、俺は考えている。だから、ただ人を襲うことでは、俺の望む戦いは始まらない。

俺のすべてをぶつけられる相手と出会い、そいつと全身全霊を賭

けて戦うことを、俺は心の底から望んでいる。魂と魂をぶつける、全力全開の真剣勝負がしたいだけなのだ。

……そんなことは起こり得ないと、分かっているのにな。

手に入りもしないものを欲しがって、手に入らないから癪癪を起こして、苛立つて。

そんな自分自身に苛立ちながら——俺は、目の前の男を殴り飛ばしていた。

ほとんどルーチンワークと化していた拳に苛立ちを乗せると、その男はいつもよりも三割増くらいの勢いで吹っ飛んだ。積まれていたゴミの山に背中からダイブし、そのまま動く気配はない。殴った右手に残る鈍い衝撃は、いつも感じるそれとは少し異なっていた。余計な感情が入ったから、余計な力がこもってしまったのか。

そんな風に考えてから、俺は他の男達に改めて向き直った。達、と言っても、俺の前にいるリーダー格の男以外は気を失った男が二人と、股間を押さえて蹲っているのが一人。その更に後ろ側には数人の男達が倒れている。

「て、テメエ、よくも！」

視線があった途端に男が怒鳴る。大きく開かれた口から覗く前歯は三本ほど欠けていて……まあ、少し前に俺が折ったんだが。本人は威嚇してるつもりなんだろうが、全然怖くない。少なくとも俺に對しては、脅威にはなり得ない。

こいつと相對することなど、ただの面倒でしかないのだ。

「いい加減にしてもらえませんかね、近藤……秀さん？」

そのしつこさに、いい加減イライラしているのだ。

苛立ちをぶつけるように、俺はそいつに文句を言った。

「斎藤修二だ！ 名前くらい、いい加減覚えやがれ！」

また怒鳴られたが、知ったことが。

毎日毎日、数人がかりで襲ってくるような人間に、どうして良い意味で興味を持たなければならぬのか。理解に苦しむ。

「俺にかまけてる暇があったら、ちゃんと学校に通ってください。今年も留年したら、三留でしょうに」

「黙れ！ 後輩に舐められたままでいられるか！」

街灯の光に煌めくほどの金髪リーゼントと、内側に刺繍の施された短ランと裾が汚れたボンタン。西暦二〇二〇年の現代日本で驚くほどのオールドファッションヤンキーを貫く、今年で二〇歳になるらしい高校三年生。

高校の入学式の日はその浮いた姿を初めて見て、まるで昭和のドラマみたいだと思った。今になって思えば、そのときの俺の視線が気に入らなかったのかもしれないが、そう思った時にはもう後の祭り。下校途中に声をかけられ、定番の体育館裏に連れていかれたあ

の日からもう三週間になる。それから毎日のように因縁を付けられ、数人がかりで襲われ——その悉くを、俺は返り討ちにしている。

典型的な昭和の不良の行動。だが、俺は、こいつのことを馬鹿にすることはできない。

それが性分なのだ。どう足掻いても変えることのできない、変えてしまえば自分が自分でなくなるほどの、ひどく下らないプライドのようなもの。現代を生きる人間としての欠陥と言い換えてもいいのかもしれない。

要は、こいつも俺と同じ。時代遅れの遺物なのだ。

人間は不完全な生き物だ。単体で自己完結することができない。誰しもが欠点を、欠陥を抱えていて。だが、この欠陥はあんまりじゃないか。

そんな人間達と喧嘩を続ける毎日。

違う、と思う。

俺が望んでいるのは、こんなことじゃない。

俺が渴望しているのは、戦いなんだ。

命を落としても構わない。そう思えるだけの、尋常の勝負。

その、俺が望む日のために、鍛錬は怠らなかった。明け方から起き始めての基礎トレーニング、時間が空けば素振りや型稽古、暇があれば師匠に扱かれて。身体や技能を鍛えるだけでなく、先人の意

志や知恵を得るために戦術書や各種指南書、歴史小説の類まで徹底的に読み漁った。

だが、今の俺がしているのは、下らない喧嘩だけ。俺の想いが解消されるどころか、不満は溜まる一方で。

戦いを求めて、噂を頼りに決闘を申し込みに行った時期もあった。噂の対象はインターハイの優勝者から古武術流派の師範まで。だけど、どの戦いでも、俺は満足できなかった。

現代格闘術……剣道や空手といった競技は定められたルールによって攻撃できる場所は限られている。例えばどれだけその道を極めていようと、それはルールという決まり事の上でのこと。ルールから僅かでもはみ出た瞬間、彼らは途端に、少し鍛えただけの素人になり下がった。

いや、それでも、戦うことができただけマシだった。

ほとんどの場合、俺は戦うという土俵の上にすら立つことはできなかった。

師範と呼ばれる彼らは皆、口を揃えてこう言った。

『本気の決闘は、現代では犯罪だ』と。

結局、俺と勝負をしてくれる人間は一人もいなかった。

ごく僅かに戦ってくれた人達も、実のところ本気で勝負などしてくれなかった。

誰も俺を、満足させてはくれなかった。

それでも「次こそは、次こそは」と願い、戦って、戦って、戦い続けて、結局、満足のいく戦いは一度も無し。『なんだ、戦ってくれないのか』そんな呟きを幾度も重ねたが、一〇回目以上は数えていないから、正確な数は分からない。

ルールに従う現代格闘術の人間も、ルールなど存在しない古流武術の人間も、結局のところ現代の法律、あるいは道徳というルールに縛られているのだ。それを悟ったと同時に、俺は落胆した。

そして、今。俺は、苛立ちのままに拳を振るい続ける。

いつも通りの軌道を描いて顔にめり込む拳。四本目の歯が折れる感触が伝わる。そこにあるのは、確かに戦い。だが、そんな戦いを、俺は望んでいるんじゃない。

この、息がつまりそうな、閉塞な日々をぶち壊したいが、その方法は分からず。

空虚感に苛まれるだけの陰鬱な日々が、続いていた。

だから後に、俺——戦場戦人いくさせんじんは心の底から感謝することになる。

おおよそ二〇回目の襲撃を迎撃した、そのあくる日に会った存在。

都市伝説と呼ばれるもの達と、それを追いかける零課の人達と、そして、俺と同じように想いを持った、一人の骸骨侍に。

1・骸骨侍

ところ構わず襲ってくる馬鹿共も、朝はなりをひそめてくれるのは不幸中の幸いだ。夜行性だから、朝は苦手なのだろうか。

今朝もそんな下らないことをぼんやりと考えながら、通勤や通学のラッシュで相変わらず満員御礼営業中のバスに乗り登校する。天井からぶら下がる吊革を持ったまま、バスの窓から見えるのは朝日に煌めく東京湾。その向こう側では、日本に存在するアメリカ産の夢の国が今日も疲れた日本人に夢を振りまくための準備をしている。夢の国の裏側も、案外楽じゃなさそうだ。

その夢の国の裏側を覗くことができるここ、いざなぎ市は、東京湾に浮かぶ一辺十二キロメートル、世界最大の六角形型人工浮島群メガフロートの上に建造された新興都市だ。

俺は生まれたときからこの市に住んでいるから新興都市という呼称はいまいちしっくりこないし、そもそも今年で建造二〇周年を迎える街を新興都市と呼んでもいいのか、俺には判断がつかないけどな。

国創りの神様を名前の由来とする新興都市。

第一区画、俺の住む場所は戸建中心の中密度居住区、第二区画は高層マンション中心の高密度居住区……そんな感じに、いざなぎ市は中央部を構成する〇区から、居住区や商業区、学園都市など、それぞれ明確な用途分けが為された計七台の人工浮島で構成された、メガフロート世界唯一の人工浮島群都市なのだ。

その、いざなぎ市の第六区画、通称『ミチザネ学園都市』に、俺

が通う高校がある。

街そのものが機械と最先端技術の塊で出来ているだけのことはあって、バス、地下鉄、モノレールといった各種移動手段も完璧に揃えられているし、街中の何気ないものにも、ここでしかお目にかかれないような最新技術が活用されていて生活に不便することはほとんどない。商業区も店の種類や品揃えも充実しているし、オフィス街や先端産業中心の工業区もあるから、就職先にも困らない。

そういう意味でも、この街は割と住みやすいと思う。

現に、今乗っているバスひとつ取っても、俺が通う高校から最寄のバス停の時刻表はすでに電子化されていて、パネルにタッチすれば最適な乗換案内を表示させることもできるし、学園都市内で宙に浮かんで走るバスを見たこともある。

食べるものだって、一部の趣向品以外はこの街の地下にある最新の食料プラントで製造されている。なんでも土を使わずに、人工の光と栄養液だけで野菜が育ち、その廃棄分などで食肉を賄っているらしい。噂では、それでも足りない食肉は人工合成されているらしいが……それはさすがに都市伝説だろう。

『ゆりかごから墓場まで。宇宙でも住める近未来都市』……この都市単体で産業や経済を自己完結する、という途方もないことをモットーにしただけのことはある。惜しげもなく最新技術がぎぎ込まれるから、日本で一番SF体験ができる街、と紹介されることもあるくらいに……俺とは対照的に、とにかく新しく、欠陥というものが存在しないんだ、この街は。

まあ、いくら新しくても、通勤・通学のラッシュは解消できない

みたいだけだな。解消できないのか、敢えて解消しないのかは知らないが。

やがて、いつもと同じ時間に決められた停留所に止まったバスから押し出されるように降り、周りにいる人達と同じように学校に向かう。そうして歩いていくうちに、モノレールや地下鉄で通う奴らも合流して、俺の周りにいる人間は段々と増えていく。学園都市名物の、朝の登校風景。様々な制服に身を包んだ百万を超える学生達が一斉に登校する様子は中々壮観に見える。

けど、俺はこの光景があまり好きじゃない。

俺の周りを歩く奴らは、どいつもこいつも、急ぎ足で学校に向かっている。

時代の最先端をひた走るこの街で、周りの連中は急ぎ足で前に、前に進んで……そして、俺は一人取り残されていくような気がして誰もが前に進めるのに、俺だけがここに取り残されているような気がして。取り残されるような人間は必要ないと、暗にそう告げられているような気がして。

最も新しいものが手に入るこの街で、俺の望むものは手に入れない。

だが、それはこの街が悪いわけではない。

性分だから、どうしようもない。そう分かっているても、な。

「どうすれば、いいんだろう……」

ああ、朝から嫌な気分だ。

どうしようもないと分かっているけど、空虚感と苛立ちは消えることはない。

これからずっとこんな気持ちを抱えて生きないといけないかと思うと、気が滅入る。

「はあ……」

ため息をつきつつ、俺は一年三組、自分の教室の扉を静かに開けた。

「あ……」

誰かが上げた、戸惑いの混じる声。それだけじゃない。俺が教室に入った途端に、教室の空気が微妙に凍ったのが分かる。

まあ、仕方がないんだけどな。

入学式に、斎藤……だったか？……とにかく、俺に三週間、あの意味驚異的な粘着力を見せつけているあのリーゼント野郎は、それだけ有名な人だったらしい。至極まっとうな人生を送っている高校生達にとっては、関わりと碌なことにならない特大の地雷という意味で。おかげで、そんな奴に目を付けられている俺も、同様に地雷扱いだ。

クラスメート達はみんな物怖じして俺に話しかけてくれない。こちらから話しかけても、地雷地帯に放り込まれたチワワのような反応しか返ってこない。元々友達が多い方じゃないが、それでも中学

校の頃までは比較的まともな学生生活を送っていた。それが高校進学と共に離れ離れになり、同じ高校に進学した奴らも、目を付けられた日から段々と疎遠になってしまった。

おかげで、俺にはほとんど友達がいらない。

まったく、本当に、とんだとばっちりだよ。それまで友達だと思っていた奴らにある日急に態度を変えられるのは、思っていたよりも辛い体験だったぞ。

四面楚歌。悪い意味で注目されている、居心地の悪い視線を無視し、俺は自分の席に座る。

だが、このクラスには一人だけ、俺に物怖じせずに話しかけてくる奴がいる。

「やあ、戦人。朝からため息なんてつくと、幸運が逃げてしまうよ？」

「余計なお世話だ、^{まつり}祀」

濃い栗色で少し長めの髪に、新月の夜空のごとく黒い瞳と長い睫毛。中性的な顔立ちで、服装次第で男にも女にも化けることができるだろう。その整った容姿で、椅子に座ったまま視線を身体ごとこちらに向けるこいつが、俺がこの学校で唯一の友達と呼べる人物。

名前は、^{やいの}夜刀祀。

こいつとの付き合いは小学生のときから続いているが、他の離れていった奴らと違いこれまでと変わらない態度であり続けるこいつ

に、俺は正直、救われている。

「その様子だと、また絡まれたみたいだね？」

「まあな。まったく、いい加減にして欲しい」

「ボクも、君の力になればいいんだけど……」

「ありがとうよ。だけど、その気持ちだけで十分だ」

言い、俺は祀の頭に手を置いて、ワシワシと、努めて無造作に撫で回した。

いつの頃からか、俺は事あるごとに祀の頭を撫でるようになっていた。癖、なのだろう。実際、こいつは昔から、頭を撫でるのに丁度いい身長をしているのだ。高校生にもなって頭を撫でるのはどうかとも思うのだが、止める理由もないし、こいつも嫌がらないので、なんとなくそのままになっている。

……それにしても、相変わらず良い撫で心地だな。

なんとかサラサラしていて、質の良い布を触っているような気分になる。

「わ。もう、戦人。最近、乱暴じゃないかい？」

「ああ、すまん」

パツと手を話すと、僅かに涙目になって、恨めしげな視線を向けていた。

「戦人。最近君はボクのことを、愛玩動物かなにかだと思ってない？」

「そんなことはないぞ。イイ奴だと思ってるよ」

「……やり直しを要求する」

「はいはい」

あと、こいつも撫でられるのが好きなのだ。本人から直接聞いたわけじゃないが、昔から事あるごとに要求されてきたし。おそらく間違いない。

高校生にもなって、まったくしょうがない奴だ。

わざとらしく聞こえるようにため息をついてから、今度はなるべく優しく、祀の頭を撫でる。

周りから見られるのは多少気恥かしいが……満足げに微笑む祀の顔を見ると、まあ、イイかと思えるから不思議だ。それに、長年続けてきただけのことはあって、俺もこいつの頭を撫でると、なんとなく落ち着く。

ま、どうせクラスメート達からは避けられてるんだし、今更多少のことで変わりゃしないさ。

祀は祀で、男女分け隔てない性格が幸いして、こんなことをしていても友達はちゃんというみたいだしな。問題ないだろう。その辺の社交術は、俺には真似できそうにない。

「君も大概お人好しと言うか、優しいよね」

藪から棒になんだ、その感想は。

なにをどう考えれば、そんな言葉が出てくるんだ？

「言葉のままの意味だよ。まったく。ボクのことと言い、斎藤さんのことと言い」

意味が分からない。が、祀は頭が良いからな。俺が知っていることは大体知っているし、俺が知らないことを沢山知っている。

だから、祀がそう言うからには、そうなのだろう。俺には理解できないが。

「ふふ。まあ、だからこそ、ボクは君のことを好ましく思っているんだよ」

「そりゃ、どうも」

満足したらしい祀の頭から手を離す。

それを切っ掛けにしたように、祀が話し始めた。

「……ああ、そうだ。戦人。君は、都市伝説に興味はあるかい？」

「ない」

そう言えば、祀は昔からそういう話が好きだったな。

都市伝説とか、怪談とか、土着の神話だとか、そういう得体の知れないモノの話。

「……即答だね」

苦笑を浮かべる祀。

「まあ、そういう反応が返ってくるのが君らしいけど。周囲に惑わされないそういうところも、君の魅力だとボクは思うよ」

褒められて悪い気はしないが、生憎俺自身はそういう類の話に興味がないんでな。

そして、そういった話題を振って来た祀に対して、俺が素っ気ない反応を返すのも、昔からのパターンで。祀はその苦笑を微笑みに変えてから、話を続けた。

「最近、このいざなぎ市……特に学園都市近辺で、都市伝説が流行っているんだ。戦人も、話くらいは聞いたことがないかい？」

「……ないな」

都市伝説と言えば、こっくりさんとか、口裂け女とか、そういうのだよな。

そのくらいの有名なのなら、俺も聞いたことがある。

「それで、だ。この辺りにも、とうとう骸骨侍が出たらしいよ」

「骸骨侍？」

だが、祀が言った都市伝説は、俺の聞いたことのないものだ。

なんだ、そのB級ホラー映画に出てくる妖怪みたい名前は。

「知らないかい？ 去年の暮れくらいから話題になりだした都市伝説で……なんでも、鎧を着た骸骨が日本刀を持って、街を夜な夜な彷徨ってるらしいよ」

「……本当に、B級ホラー映画じみてきたな」

ため息混じりに俺がそう言つと、祀は何故か、心底愉快そうな表情を浮かべた。

まるで、俺がそう言つのを待っていました、と言わんばかりに。

「面白いと思わないかい？ この最先端技術の結晶であるいざなぎ市で、都市伝説なんて言う古びた話が流行り……しかも、新しい都市伝説が生まれるなんて」

祀の話を聞いていて、ふと、気付いた。

持論を語りだした祀の瞳が、いつもとは違う輝きを放っていることに。

しまった、と思ったときにはもう襲い。

これは、スイッチが入ってしまったな。

「同時にいざなぎ市、特に学園都市に通う女学生達の間では、こっ

くりさんが流行っているんだ。それも従来の占いの延長線上にある
ちやちなそれではなく、新種とも言えるべきこっくりさんがね。同
様にこっくりさんが流行り、次々と新しい都市伝説が流行したのは
一九七〇年代、高度経済成長期の真っ直中だ。そして、いざなみ市
は連日進化を続ける都市。規模こそ違えども、刻々と社会状況が変
化しているという共通点があるんだ。この共通点、中々面白いと思
わないかい？ ボクが思うに社会環境の劇的な変化というのは人々
の心に希望を生むと同時に変化による不安……移り変わり、忘れ去
られることに対する根源的な恐怖が混じっていると――」

「あー、わかった、わかった」

こうなると、祀は独自の世界に突入する。

祀は普段から人当たりが良く、話をするのも聞くのもとても巧い
のだが、昔からこういう考察が好きで、ときたまスイッチが入った
ように持論を次々と語りだす。そうになると、もう止まらない。そし
て、その被害を受けるのは大抵俺なのだが、悲しいかな、俺は祀ほ
どに賢くないし、そういったことに興味もない。

そういうことは俺じゃなくて、もっと頭の良い奴と話せばいいの
にな。

だが、祀の意見ももっともだと思う。

この街は人工浮島群上の最先端都市だ。骸骨とか幽霊とか都市伝
説とか、そういう古びたオカルトからは日本で最も程遠い街だ。

彷徨うならこんな場所じゃなくて、もっと相応しい場所があるだ
ろくに。

「……なんでまた、こんな海の上の街を彷徨ってるんだ？」

なんの気なしに、そう呟いていた。

——それが、不味かった。

「これは、ボクの私見だけだ。未練、じゃないかな。なにに対して未練があるのかは分からないけど、骸むくろとはいえ侍。戦う相手を求めて……もしかしたら、死に場所を求めているのかもね。侍らしく」

未練。死に場所。

その言葉に、全身の筋肉が硬直したのが分かった。それだけじゃない。酷く、嫌な気分になる。内臓が内側から押し上げられるような、心臓を鷲掴みにされたような、そんな感じ。

自分でも、自分の表情が変わったのが、分かった。

「……戦人？」

「……すまん。なんでもない。気にするな」

「でも——」

「はい。朝のホームルームを始めるわよ」

言葉を続けようとした祀の言葉は、しかしいつの間にか教壇に立っていた担任の明るい声に遮られた。ほれ、前を向け、と微妙に視線を逸らしたまま祀に催促すると、祀はしぶしぶとだが素直に前を

向いた。

正直、今の表情を、祀には見られたくない。

「……………クソ」

誰にも聞こえないように、小さな声で悪態をつく。

ムカムカしたものが、再び胸の中に生まれる。

聞くんじゃなかった。

まるで呪いのように、俺の心を苛むこの思い。

戦うことに未練を残して、現代を彷徨うなんて。

まるで、俺みたいじゃないか。

結局、その日最後の授業が終わっても、俺の気持ち晴れることはなかった。

元々スッキリした気分ですらられる時間の方が短いけど、今回はかなり長引いた。

俺の心の中にある、戦いに対する異常な妄執。すべての価値観が戦いに支配され、平和な日本で命を賭けることも厭わない、狂った趣向。人間として大切なものの欠落。異常だと自分で理解している

が、どうしようもないということも分かっている。

「じゃあ……ね。戦人」

「ああ。また、明日な」

……そろそろ、俺が降りるバス停が見えてきたな。

祀の家は、俺の家のある第一区画——戸建中心の中密度居住区ではなく、第二区画——高層マンションやアパートが中心の高密度居住区にある。乗り込み人数の関係で朝は同じバスに乗ることはないが、帰りとなると話は別だ。第一区画を通り第二区画に向かうバス俺も祀も部活はしてないから、授業が終われば自然と二人で同じバスに乗り、俺が先にバスから降りて別れるのが、昔から繰り返されてきた習慣だ。

今日もいつも通りバスが止まる前に言葉を交わし、開いたドアに向かって祀に背を向けたところで、ふと思った。

俺の根源を構成するこの狂った思いに、人間としての欠落に、こいつは……夜刀祀は、気付いているのだろうか。

「……………戦人！」

バスから地面に足を降ろした瞬間に突然、呼びかけられた。それも、普段の祀からは考えられないくらいに、大きな声で。

おいおい。お前の声に驚いて、バスの中の他の連中までお前に注目してるぞ。

一体どうしたんだ？

「あの……上手く言えないんだけど……なにか辛いことがあるなら、ボクに話して欲しい。戦人は強い人だから、ボクじゃ助けにならないかもしれないけど……話せば楽になるかもしれないし、もしかしたら、ボクにもなにか出来るかもしれない。だから……」

珍しいこともあるものだ。

祀が言葉を詰まらせるなんて。

祀は、頭が良いからな。全知全能……と言ったら、言いすぎなのだろうが。知識もあるし、それ以上にその知識を行使する頭の回転がすごい。

だからきつと、俺の妄執にも気付いているだろう。俺の中にある、薄汚くて仄暗い感情にも気付いているのだろう。戦いを厭わないということは、誰かを傷つけることを躊躇わないということだ。人として唾棄すべき、俺の在り方。生まれ持ってしまった、変えることのできない、俺の本性。

その上で、祀はこう言ってくれるのだ。

……本当に、祀には助けられてばかりだ。

「……ありがとよ、祀」

胸が一杯になる、ってのは、こういうのを言っただろうな。

さっきまでの嫌な気分が、嘘みたいだ。

「大丈夫だ。今は話せないが……いつか、解決するさ」

惜しむらくは、この感情の整理がつくかどうかは、俺自身にも分からないということだ。

いや、望みは薄いだろう。気付けば心の中にあつたこの血に塗れた妄執が、そう簡単になくなるとは思えない。俺が人間としてなにかが欠落しているからこうなのだ。時間が解決する？ そんなに悠長な感情なら、俺は苦労なんてしていない。

それに、いくら祀でも、こればかりは解決できない。

祀には武術経験はないし……なにより、女の細腕では、俺には絶対に敵わない。

その気持ちは、ありがたいんだけどな。

だからさ、祀。そんな悲しい顔をしないでくれよ。

俺の執心にお前を付き合わせるのは、俺の本意じゃない。

俺の欠落のためにお前が苦しむのは、俺が望む解決ではない。

だけど、どうすればいいのか分からなくて。

祀の、今にも泣き出しそうな顔を見ていられなくて。

次のバス停に向かって走り出したバスに、俺は逃げるように背を向けた。

……情けないよな、ちくしょう。

自分のイカれた願いにイラついて、祀まで巻き込みそうになって。

——生まれてくる時代を間違えた。

もつと昔、戦うことに疑問のない時代に生まれていれば、こんなに苦しまなくても良かったのだろうか。欠落があっても、それでもまともに生きていくことができたのだろうか。

なんとなく立ち止まって、空を見上げてみる。

第一区画。機械の塊で出来たこの人工浮島群の中で、唯一土が存在する場所。他の場所の植物はゲル状の特殊な培養素材に植えられているからな。そのおかげで、この辺りでは雨上がりのときなんかは土の臭いを実感することができる。街並みも、昭和の日本をイメージして構成されているから、他の区画と比べて街灯も少なく、その光も弱い。機械で出来た、眠らない街の中で、唯一眠りを必要とする場所。

そんな街だからなのか、ここには他の区画に比べて穏やかな空気が流れている。

日本どころか世界の先頭を走り、立ち止まることなく最新を求める機械の街に流れる煌びやかで、でもどこか焦っているような、息が詰まってしまいそうな、そんな空気とは対照的で。

……苦手なんだ。

この街にいと、自分の異質さが際立つよううで。

誰もが前に進み続けるこの街の中に、俺だけ取り残されていくよううで。

お前のような存在はこの世界にいてはいけないと、そう言われているよううで。

いつしか、ここは俺の居場所のない街だと、そう思っようになっていた。

そんな街の中で、俺の家のあるこの区画だけは、比較的遅く歩いてくれる。

こんな俺でも、ここにいてもいいんじゃないかと、淡い希望を抱かせてくれる。

この街で一番ゆっくりな場所。

時代遅れな俺には相応しい街で、

後から思えば、だからこそ俺は、この場所で、そいつに出会ったのかもしれない。

カッン、カッンと、アスファルトを叩く硬質な音。

その音が聞こえる範囲に、どういっわけか俺以外の人間はいない。夕方の住宅街だと言っのに、不気味なほどに静まり返っている。

思わず、息を呑む。

一步、また一步と俺に近づいてくるのは、紅い鎧を着た骸骨。所々が欠け、年月を感じさせる古びた鎧とは対照的に、その右腕に握られた刀には曇り一つなく、夕陽の光を反射して黄金色に輝いている。

顔を覆う面具からのぞく眼窩は落ち窪み、眼球が無いことは一目瞭然なのに。

その骸骨と、目があった、気がした。

「――」

その瞬間、全身が総毛立った。

その瞬間、すべてを理解した。

すでに物言わぬ骸となったそいつの、すでになくなった眸が、語っていた。

「そうか、お前も――」

ここにいちやいけない存在なんだな。

その無言の視線が、全身から滲み出る殺気が、錆一つない得物が、訴えている。

だから、こそ。

俺は、構えた。左足は前、右足は後ろ。相手に対して半身を切り、重心を若干前に寄せる。顎の高さまで持ち上げた左手は軽く指を伸ばし、腰の高さにある右手は軽く握る。腰は落とし、視線は真っ直ぐと真正面を見据える。

戦うことを渴望し、その乾きが満たされなくてもひたすらに磨き続けた御薙流古武術の構え。

この日を願って、一心に鍛え続けた、俺の出せる全力。

それに呼応するように、目の前の骸骨もまた、刀を構えた。

『御薙流、戦場戦人』

『――』

自然と、名乗り上げていた。

面具に遮られたのか、声こそ聞こえないが、眼前の骸骨も名乗り上げたのだと思う。

戦う意志を、『この戦いに己の誇りと魂を賭ける』という意志をお互いに確認し、睨みあい硬直する。

……背筋がゾクゾクする。

今までにないくらい心臓が高鳴っているのが分かる。身体の芯が熱くなり、なにかが湧き上がるような感覚。全身の血液が歓喜に沸き上がり、沸騰しそうなくらいに興奮していて、そのくせ頭は妙に

スツキリしている。肌を焼くようなピリピリした感覚は、相手が向ける殺気と闘気があまりにも強烈だから。身体中が燃えるように熱く、それでも薄ら寒さを感じるのは……おそらく、俺が怖れているから。

どうやら俺の中にも、少しだけ、真つ当な感覚が残っていたようだ。

戦うことを、傷付くことを、死ぬことを怖れる、人間として当たり前の感情。

だからといって、退くことは有り得ないんだけどな。

土壇場になって、改めて自覚する。

俺はこんなにも狂っている。人間として大切な何かが欠けている。武器もないのに、戦えるからという理由だけで、戦おうとしている。戦うということを心底愉しいと思うっている。もし相手が人間であつても、それは変わらない。誰を傷つけることを厭わない、人間として唾棄すべき、穢れた思想。

だが、上等だ。

例えどれだけ不利な状況でも、尋常の勝負ができると言うのなら。

——俺はここで、死んでもいい。

そう思ったのと、俺達が踏み込んだのが、ほぼ同時で。

「——止まりなさい！」

そして、突然聞こえた凜々しい声に思わず動きを止めてしまったのは、それから塵のように僅かな時間の後だった。

凜と響く、まるで心に直接訴えかけてくるかのような、とてもきれいな声。思わずその声に意識を取られてしまい……俺がそれを自覚したのは、全身が完全に硬直してから一秒以上過ぎた頃だった。

マズイ。

敵前で動きを止めるなんて、殺してくれと宣言しているに等しいじゃないか！

だが、絶好のチャンスだったというのに、骸骨侍は俺に斬りかかるどころか、姿勢を戻し、踏み込む前の構えの体勢に戻っていた。しかも、その視線は俺ではなく、どこか別の方向に向けられていた。

……手加減、されているのか？

舐めやがって。

よそ見をしている骸骨侍に不意打ちでもしてやろうかと一瞬考えたが、それはいくらなんでもフェアじゃない。相手の意識が別の方向を向いてしまっているのだから、俺もそれに習わなければならぬ。

それが、俺が望む戦いというものなのだ。

だから仕方なく、水を差されたことに苛立ちを覚えつつも、俺もその声の方を向いた。

そこにいたのは、女の子。

年の瀬は俺と同じか少し下くらい。目測で身長は一五〇センチ弱、軽く天然パーマの入った鳶色の髪をサイドアップにまとめている。身に纏うのはミチザネ学園都市でも評判のお嬢様学校の制服だが、気品と言うよりは小動物のような人懐っこさを感じる。顔立ちもそうだが全身のバランスが良く、美少女アイドルとしてテレビに出ても見劣りしそうにない。

だが、なによりも俺の目に止まったのは、その瞳だった。

日本人離れた、まるで上質な紫水晶のように濃い深紫。さきほどの声が嘘みたいないな顔つきをしているのに、瞳に宿るのは信じられないくらいに強い輝きを灯した光。

ああ、正直に告白しよう。

戦いの最中だと言うのに、殺意も敵意も苛立ちも忘れ、俺はその瞳に目を奪われた。

紫水晶の瞳の中にある神秘的な輝きと、そのさらに奥になる何かに、俺は完全に意識を持っていかれていた。

「私は警視庁公安捜査部公安第零課第一公安捜査所属、芹沢梢です！ この場所での戦闘は許可されていません！ ただちに武器を引き、両手を上げなさい！」

そう宣言しながら、右手で手帳を開き中の顔写真付きの証明書をこちらに示している。そこには警察のデカイ紋章と、なんだか小難しいことが書いてあった。

なにが起こっているのかイマイチ理解できないが、芹沢梢と名乗った子の言うことを信じるなら、この子は警察で、人氣が無いとはいえこんな街中で一戦おっぱじめようという俺達を静止しようとしているのだろう。その声色からも、明確な警告の意志が滲んでいる。

その声に吞まれかけ、その少女と視線が合う。

「――」

吸い込まれそうだと反射的に思った。

まるで本物の宝石のような魅了。

俺を見つめる深い紫色の瞳は、不思議な吸引力を持っていた。

その瞳に意識まで吸い込まれそうになり……地面を鳴らす硬質な音に、俺の意識は引き戻される。

その音は、目の前の骸骨侍がアスファルトを刀の先で軽く叩いた音で。その音を聞いた瞬間、身体の内側から再び、闘争心が湧き上がってきた。思わず喉を掻き篦りたくなるほどに俺のことをずっと苛んできた渴きと、煮えたぎるような殺意。ずっとずっと抑圧してきた、相手を滅茶苦茶に破壊したいという願い。例えば自分と刺し違えてでも相手を殺そうとする執念。

ああ、そうだったな。

俺の心はいつも悲鳴を上げていたんだ。

いつそ狂ってしまった方が楽になれそうなほどの、乾いた叫び声。

だから、悪いな。

ようやく俺は、俺の本懐を果たせる相手に出会えたんだ。

こんなところで、たかだが警察の制止を受け入れて、たまるかよ。

「……そうだよな？ 骸骨侍さんよ！」

言っが早いか、その少女の制止を振り切って俺は踏み込んだ。

骸骨侍が持つ刀の間合いの更に内側。いわゆる直接打撃制空手や
フルコンタクト
なんかで打ち合う距離。不意打ち気味の動作に骸骨侍が刀を振り上げるが、それを振り下ろされる前に、俺はその距離で打撃を放つ。

ハッキリ言って、この戦いは俺の方が不利だ。相手はどう見ても達人級の実力の持ち主。それに素手で相對するんだ。刀と拳の間合いの長さ以前に根本的な実力差が俺達の間には存在していて、だからこそ俺は、ギリギリの勝負を挑む。

実力差のある相手に無傷無策で勝とうなんて、有り得ないのだから。

全身の筋肉だけでなく歩法から呼吸法まで人間の運動に関わるありとあらゆる要素を連動させ、人間の身体に眠る潜在能力を極限まで使用することを基本理念とする御薙流の基本の一撃。中国武術では

崩拳と呼ばれる中段正拳に、更に独特の捩りを加えた《掬木》。狙うのは古びた甲冑のど真ん中。掛け声と、身体の内側から湧き上がる激情と共に打ちこんだ拳は予想以上の威力で、骸骨侍はたたらを踏み、二歩後退する。

「……はは」

一度開いた距離をすぐに縮めるだけでなく、そこから更に一步詰める。

それだけの動きに、思わず笑い声が生まれる。

身体の内側から何かが湧き上がる、その感覚が心地良い。

今しがた打ちこんだ右手が悲鳴を上げる。自分の拳が他ならぬ自分自身の攻撃によってダメージを受けているのが分かる。だが、他にどうしようもない。

俺は、不完全な人間だから。

こうでもしないと、戦えない。

俺自身の血に濡れ壊れかけた右手を引き、その腕に添うようにして左の拳を突き出す。右手は砲身、左手は砲弾を模したアッパーカット。《撃水》。これまでに何千万と繰り返してきた動作が、これ以上ないというくらいに……むしろこれまでの人生で最高の一撃だと言えるくらいに淀みなく発露され、骸骨侍の顎を撃ち抜く。普通の人間が食らえば脳を揺らされ、平衡感覚が狂う一撃。骸骨には脳みそはないが、手ごたえはあった。

面具を破壊され、後退する骸骨侍。

面具の壊れた兜から覗く顔面は、その名前の示す通り、薄汚れた頭蓋骨。

その落ち窪んだ眼窩が、俺のことを睨みつけた、気がした。

——いつの間にか骸骨侍が後退して、刀の間合いになっている——

「っ！」

咄嗟に間合いから離れようとして後方に飛ぶ。

だが、僅かに間に合わない。

ほとんど前振りもなく振り下ろされた刀の切っ先が俺の身体を捉え、左肩に鋭い痛みが走るが、思っていたほどには痛くない。きちんと動く。なにも問題はない。

そのまま後方にステップを踏み、間合いをあけて互いに睨みあう。

刀の間合いからは完全に離れた距離。

俺と骸骨侍、どちらが先に動いたにしても相応の距離を詰めねばならない。その瞬間にはどうしても生じ、攻撃を受ける側が有利になる。つまりこれは、先に動いた方が負ける状況。

攻めあぐね、膠着する。

互いに睨みあい、相手の隙を窺う。呼吸や意識の方向を探り、相手の意識の隙間に潜り込むタイミングを察知するために、つぶさに

相手を観察する。

その間にも俺の身体の芯から湧き上がってくるのは、言いようない感覚。

全身の血液を一旦身体の中心に集めてから別のものに創り変えているような、今までに味わったことのない不思議な感覚。しかも、それは相手に一撃を加える毎に強くなっていた。膠着状態に陥った今でも収まることはない。そしてその感覚が強まることに身体が戦いに順応し、歓喜の悲鳴を上げているのが分かる。もつと熱を寄せと喚いている。身体が燃えてしまいそうな、内から無限にエネルギーが湧き上がるような、このまま身を委ねれば蕩けそうになるくらい、莫大な熱量。

——ああ、なんて愉しいんだ——

その感覚に溺れてしまいそうになる心を、ぐつと堪える。心の奥底からふつつと湧き上がってくるような、暗くドロドロとした負の感情。相手を破壊したい。戦いたい。毀したい。斃したい。心を塗り尽くす、タールのような漆黒の想い。

我慢しろ、俺。ようやく巡ってきた、本物の闘争の場なんだ。

こんな快感に任せて、ぶち壊してくれな。

このまま何も考えずに打ちこみたい衝動と、自身の魂と誇りを掛ける真つ当な決闘をしたいという願いが俺の中で交錯し、それを堪え続け、相手の隙を窺う。そうして骸骨侍と睨みあっていた時間は、体感でおよそ一〇秒弱。

結論から言えば、先に動いたのは骸骨侍の方だった。

ただ、一体いつ、俺の前に接近したのか。

それを俺は、察知することができなかった。

「は——」

気付けば、俺は刀の間合いに入っていた。

気付けば、骸骨侍は刀を振り上げていた。

全身を寒気が襲った。全身の筋肉が全力で警鐘を鳴らしていた。

骸骨侍が全身から発する裂帛の気合い。それは、先程までのそれとは完全に別次元のものだった。

俺は完全に読み誤っていた。

相手は最初から本気だったのだと、そう勝手に思い込んでいた。

実際には、これまでの動きはただの様子見のもので——

「おおっ！」

振り下ろされた刀の腹を、咄嗟に左手の裏拳で右から左へ横殴りに薙ぎ払う。拳の硬いところと鉄の塊が激しく打ちつけられ、鈍い音がする。

もし、今の拳の動きが、ほんの僅かでも遅ければ。

もし、今の太刀筋が、ほんの僅かでも迅ければ。あるいは、遅ければ。

ソワリと、背筋が泡立った。

その仮定が導き出すもしもの結果に――命懸けの実戦であるということに、心が震えた。俺と骸骨侍の間には圧倒的な実力差があり、僅かでも気を抜けば一瞬で鱈にされてしまうというのに、自然と笑みがこぼれた。

今にも殺されそうだと言うのに、気付けば俺は笑っていた。

ああ、なんて愉しいんだ！ 堪らない！

一歩間違えれば死んでいたというのに、身体の内側からは更なる熱が生み出された。その熱がエネルギーとなり、全身の筋肉を更に活性化させる。普段ならできないことができると、根拠のない自信が漲ってくる。

俺はまだ、戦える。戦える。戦いたい。戦いたい。

俺と、戦え。

「――らあっ！」

足に力を込め、骸骨侍を蹴り飛ばす。足がビリビリと震え、振動が足の裏から直に伝わってくる。まるでコンクリートの壁を蹴ったかのように、信じられないほどに重い。それが、嬉しい。その足目にかけて、骸骨侍は刀を逆袈裟に斬り上げた。

それを回避するため、一気に骸骨侍から距離を離す。その飛距離は、間違いなく普段のそれに倍するものだったのだが。

その動きを、骸骨侍は完全にトレースしていた。

「あ……」

一気に距離を稼ごうと跳躍したのが拙かった。地に足がついていない状態では運動の方向を制御することはできない。あわよくば着地したところで、そこから方向転換するには更に僅かではあるが絶対的な隙が生まれる。それだけの時間があれば十分、目の前の骸骨侍は、俺のことを両断することができるだろう。

腕を犠牲にして防ごうとしても、きっと腕ごと断ち切られる。

どう足掻いても、俺は死ぬ。

脳裏に瞬間的に浮かんだ、俺が頭から両断される瞬間の、いやにリアルな情景。

だけど、それでいいと思った。

俺のような、人間として大切なものの欠落した人間の末路なんてある程度想像がついている。まともな最後は望めないだろう。最後にこうして尋常の勝負ができただけでも、幸運なんだ。それにどうせ俺に、居場所なんてないんだから。俺はこの世界にいては、いけない人間なのだから。

だから俺は、これでいい。

そう思い、全身の力が抜けた瞬間。

乾いた音が二発、耳に届く。

その音が銃声なのだと俺が認識するよりも早く、骸骨侍は俺から離れていた。

「――な」

驚愕の声はかたちにならなかった。

反射的に、銃声が聞こえた方へ視線を向ける。

そこには、一体どこに隠し持っていたのか。二丁の拳銃を構えた、先程の少女がいた。

「警告を無視するとは、いい度胸してるの。……あと一度だけ待つてあげるの。止まりなさい。さもないと、私はあなた達を――」

そう、言い切るが早いのか。

骸骨侍は刀を古びた鞘に収めると、俺達に背を向け走り出した。

「え？」

これは流石に予想外だったのか、その少女も口をポカンと開け、対応が遅れる。

「ちょ……ま、待つの！」

慌てて拳銃を構え直すも、時すでに遅く。

骸骨侍は、忽然とその姿を消していた。

「……………」

「……………」

後に残された俺達に言葉はなく。

肩透かし。拍子抜け。そんな言葉が脳裏に浮かぶほどに…………幕引きは呆気ないものだった。

おい、これ、俺はどうすればいいんだ？

「んー…………とりあえず、頭を切り替えるの」

俺とは対照的に、少女はもう頭の切り替えができたようだ。

どうするつもりなのだろう、と俺は無意識のうちに少女の動きを視線で追いかけていた。

その視線の先で、少女はトテトテと歩き、俺の正面で足を止める。身長差があるため、自然と少女が俺を見上げるかたちになる。

それから、なにをするつもりなのだろうか、と少女を見つめる俺に向かって。

「…………とりあえず、あなたに話を聞かせてもらおう。抵抗すれば…………今度こそ、容赦しないの」

未だほんのりと熱の残る銃口を俺の顎にこりつと押し付けてから、ニツコリと微笑み。

その予想外の動きに、俺はただ為されるがままになってしまったのだった。

……おいおい、マジかよ。

有り得んだろ、こんなのよ。

後になって振り返ってみれば。

これが芹沢梢という、俺の人生に多大な影響を与えた少女との、酷い出会いだったのだ。

2・公安零課

なんとなく、右手に巻かれた包帯を眺めてみる。

冷静になつて考えてみると、古びているとはいえ鋼で編まれた鎧を素手で殴るという行為はあまりにも愚かであり、その代償は右手の怪我というかたちでキツチリと支払われていた。

その結果に後悔はない。

あときはああするしかなかったし……それに、初めての尋常の勝負の興奮はまだ俺の中に残っている。身体中の血液が沸騰していると思えるほどの熱。その熱を受けて活性化する筋肉。身体の芯から何かが湧き上がってくるかのような感覚。殺意を向けられて焼けそうな肌。心臓の鼓動は今にも爆発してしまいそうなほどに激しく、最高に気分が良かった。

殺されかけたというのに、俺はあるときに向けられた殺意を、殺意を向ける相手にどす黒い殺意を返すことを、快感だと思ったのだ。負けたからこそ良かったものの、初めての戦いでもしも骸骨侍に勝利していたら……俺は、快感のあまり絶頂に達し、そのまま帰ってこれなくなっていたかもしれない。

抗いがたい心地良さ。ただただ純粋な殺意と敵意。理性や道德、そういったものがドロドロと融け、黒い感情に心が埋め尽くされる。思うのは、願うのはただひとつ。相手を壊し尽くしたいという願望。そういう感情を向け、向けられるという享樂。

戦いの中に身を置くということは、俺が期待していた以上に気分

の良いものだった。

それまでの戦い、ルールに従った競技上での決闘を、ままごとだと感じてしまうほどに。

「……………」

包帯に巻かれた右手を握る。それだけで痛みが走り、反射的に手を開いてしまう。その痛みですらも心地いいと感じる。試しに左肩も軽く動かしてみる。こっちはまだ麻酔が残っているのか、動かしても痛くはない。だが、縫合に使われた糸が引っ掛かるのか、動かすと肉を引っ張られるような違和感が残る。

右手に残る痛みと、痛みを感じない左肩。それは俺が戦いの中に身を置いたという証。一度知ってしまった戦いの味はあまりにも甘美で、到底忘れられそうもなかった。

願わくば、再びあの闘争を。命を賭けた尋常の勝負を。血を血で洗う、漆黒の殺し合いを。心の底からそう思ってしまう。

まるで呪いの如く俺のすべてを苛む、イかれた願望。

狂っている。

だけど、止められない。

やっぱり、俺は人間として大切ななにかが欠けているんだな。

あまりの快感に、最後のタガが外れて狂ってしまうかと思った。心を覆う負の感情の暗闇に、いつそ取り込まれてしまいたいとすら

思った。あれだけの快感の後に自分を保っていたのは、戦いの後で、それを上回る感情に苛まれているからに過ぎない。

「はぁ……」

右手から視線を外し、ため息をつきながら背もたれに身体を預ける。俺が今座っているソファーはかなり質が良いらしく、寝転べば気持ちよく眠れそうなくらいに快適な座り心地だった。

このままソファーに身体を鎮め、戦いの余韻に浸ることができるのなら、ある意味で楽になれるのかもしれない。

だが、戦いの快感を思いだそうとするたびに頭の隅を過るのは、あの少女の姿だった。

人懐っこそうな愛らしい顔で微笑みながら、俺に銃口を向ける姿。

その表情と行動があまりにもアンバランスすぎて、却って現実感がない。

それに加えて、少女の深紫の瞳に灯った輝きと、その更に奥に感じた違和感。その瞳を見つめるだけで、吸い込まれそうな感覚に襲われた。俺がこれまでにあった達人達とも違う、吸引力を伴う視線に感じる、明らかに異質な感覚。

その少女に拳銃を突きつけられたというのに、俺は殺意を増すどころかすっかりと毒気を抜かれ、事情を洗いざらい話した。

そのときには、なにも感じなかったのに。

でも、それで良かったんだ。

あのまま戦い続けていれば、俺は漆黒の殺意に吞まれて、俺ではなくなっていただろうから。

嫌になるよ、本当に。

どうして俺は、こんなんだろうな。

現代の価値観には到底許容されない悪癖。戦いを求めて、戦わないと生きていけず、戦いに溺れることを是とする人間性。

俺は確かに、戦いを求めている。

だが、それと同じくらい、俺はそんな自分が堪らなく嫌いなんだ。

俺には戦いしかない。戦いを求めるたびに、嫌でもそれを思い知らされてしまうから。

自分だけでは止められない、悪意を伴わない殺意。

それを止めた少女は、ただ一人だけ。

その少女が呼んだ救急車で、俺は六区の学園都市にある大学病院ではなく、五区のオフィス街にある警察署に運ばれた。戸惑う俺に対し、あれよと言う間に傷の手当てをされ、今俺がいる応接室で待つようにと指示され、今に至る。

その間中ずっと、彼女の深紫の瞳と、微笑みが、忘れられなかった。

「ごめんなさい、待たせてしまつて」

扉を開く音と共に聞こえた静かな声に、俺は反射的に視線を向けた。

部屋に入つて来たのは二人の女性。声の主はそのうちの片方、二〇代後半くらいの女性だった。長い黒髪を毛先でひとつに束ねていて、おっとりとした穏やかな瞳をしている。大和撫子、というのは彼女のような女性のことを言うのだろう。その後ろに追従しているのは――深紫の瞳をした、先程の少女だった。

「まずは、初めまして……かしらね。戦場戦人君」

二人は俺の前にあるソファに座り、それから自己紹介が始まった。

「私の名前は、八百万八雲。警視庁公安零課の課長を務めています。そしてこちらは芹沢梢さん。この子も私と同じように、零課に所属しています」

「……………」

芹沢梢。

それは確かに先程、その少女が名乗っていた名前で。

その声を聞いて、思わず立ち上がりそうになる。

「聞きたいことはたくさんあるでしょうね。だからそれを、これか

ら説明させていただきます」

だが、俺のその反応を予想していたのか。

片手を上げることで制され、俺は仕方なく言葉を呑みこんだ。

それから、八雲という女性は俺の瞳をじっと見つめたまま、改めて口を開く。

「戦人君は、公安零課という部署名を聞いたことがありますか？」

その瞳の色は、先程の少女とは違う深い色をしていた。例えるなら、先程の少女を紫水晶とするなら、目の前の女性のそれは深海。すべてを受け入れ、すべてを見通しているような、深い海を思い起こさせる色。

その瞳に見据えられ、まるで眼球を通して心の内側を探られているような、そんな気がした。

「……………」

言いたいことはあるが、まずは話を聞かないと始まりそうにもないな。

八雲と名乗った女性の問いかけに答えようとして、気付いた。

公安零課、だと？

「はい。公安零課。あなたが思う通り、本来存在していないハズの部署です」

疑問を先読みして答えられる。

もしかして、顔に出ていたのか？

まあ、それはいい。

俺が知っている限り……テレビの特番で得た知識なんだが、警視庁公安本部は総務、一〇四課、外事一〇三課、そして機動警備隊の計九部署で構成されている。だから、零課なんて頓狂な名前の部署なんて聞いたことがない……存在していないハズなのだ。

「公安零課は、正式には存在していない部署であり……その名前の通り、正式には存在していない存在に対処するための部署です」

「存在、しないもの……」

「心当たりが、ありますよね？」

少し前までの俺だったならば、ないと答えていたのだろう。

だが、俺は知っている。忘れるわけがない。

巷では骸骨侍と呼ばれている、明らかに異質な存在を。それに追随する、どす黒い感情を。

それに纏わる顛末を……忘れられる、わけがないんだ。

「有体に言えば妖怪とか、幽霊とか。珍しいところだと、都市伝説とか怪異とか、かな。とにかくそういう風な、科学で存在が証明で

きない……つまり、法律で裁けない相手が起こす犯罪を解決するのが、公安零課のお仕事なの」

噛み砕いた言葉で梢というらしい先程の少女が捕捉する、作り話のような内容。

ありがちな少年向けアクション漫画の設定のようで、しかし俺はそれを認めざるを得ない。

突拍子もないと否定するのは簡単だが、俺はそれを否定する材料を持ちあわせていなかった。

「あの……八百万さん？」

「……ああ、私のことは八雲、と呼んでください。八百万、って言いにくいですし」

「なら、私のことは梢ちゃんって呼んでほしいの。呼び捨ても可だけど、できれば名前で、ちゃん付けがいいの」

「ちゃ……」

あんだ、俺と同じくらいの年齢なんだよな？

学園都市でも評判の、お嬢様学校の生徒なんだよな？

と言うか、さっきの声と全然違うけど、こっちがお前の素なのか？

「ちなみに、私は今十七歳の高校三年生だけど、戦人君は何歳なの？」

「……………え？」

おいおい、冗談だろ？

制服から同年代だとは思っていたが、まさか年上だとは。見た目が小柄で童顔、声から受ける印象が大分幼いから、制服を着ていなければ中学生、下手したら小学生でも通じるぞ。

なんだか、人体の神秘を見た気分だ。

「その反応を見ると、年下だね。だったら、お姉さんの言うことはちゃんと聞くものなの。ほら、『梢ちゃん』。りぴーと、あふたみー？」

勘弁してくれ。

この年で一応とはいえ年上の女子をちゃん付けで呼ぶのは、罰ゲームよりもタチが悪い。

せめて、呼び捨てで勘弁してください。

いや、割と本気で。

「梢さん。戦人君を困らせては駄目ですよ？」

「もう。女の子の名前をちゃん付けで呼ぶことに躊躇いを覚えるなんて、戦人君はとんだ童貞野郎なの」

「……………」

なあ、俺の聞き間違いじゃなければ、今俺が知っているお嬢様学校の生徒の口から絶対に漏れてはいけない類の単語が聞こえた気がするんだが。

……とりあえず、気にしたら負けな気がするから、聞かなかつたことにしよう。

と言うか、年上がどうこう言う以前に、梢は未成年だよな？

内容が胡散臭いというのはともかく、未成年が所属してて、本当にまともな組織なのか？

「あー……その、八雲さん。ひとつ、聞いていいですか？」

「どうして、梢さんのような未成年が公安部に所属しているのか、ということですか？」

「は、はい」

質問の内容をまた先回りされたことに戸惑いつつ、俺は頷いた。

どうなってるんだ？

もしかして、人の心でも読めるのか？ それとも俺の疑問がそんなに分かりやすいくらいに顔に出てるのか、あるいはテンプレート的な質問なのだろうか。

「私達が相手にすることになる幽霊、妖怪、異能力者……そういうつたモノへの対処が可能な能力を持つ人となると、本当に数が少なく

て……不本意ではありますが、公安零課は未成年の方々に頼らざるを得ないほどに、万年人手不足なんです。でも、公式には存在しない部署だからこそ、梢さんのような未成年でも零課に所属できるのです」

「方向性は色々あるけど、実力がある人なら訓練次第でそういう存在に対処できるようになるの。でも、そうなるためにはそれなりの年月と訓練と才能が必要だから、私みたいな見込みのある若い署員がいるだけなの。別に女子高生ばかりが働いてる部署ってわけじゃないの。それとも、そういうのを期待してたの？　もう、戦人君のむつつりすけべ」

「……………」

気にしたら負けだぞ、俺。

「対処できる人間ってのは……いわゆる、霊能力者みたいな人が所属してるってことですか？」

「もちろん、一般的に言う霊能力者も所属していますが、どちらかと言えば特殊能力や特殊技能持ちの方が多くですね。公式には存在していないモノ達とは、なにも幽霊や妖怪の類ばかりではありませんし。……梢さんも、霊能力者と言うよりは特殊能力者ですよ」

「私の能力は大したことはないの。もっとすごい子は他にたくさんいるの」

「梢さん。あまり卑下するものではありませんよ。梢さんは梢さんにしかない強さがあるから、私も頼りにしているのですから」

しかし、なんなんだ、この二人は。

話の内容もアレだが、それ以上になにかがおかしい。そのなにか、
がなんなのかまでは分からないのだが。

予定調和、とでも言うのだろうか。

こちらの考えを見透かされている……と言うよりは、まるで演劇
の世界に参加しているような、そんな感覚を覚える。

誰かと話していて、ここまで違和感を覚えるのは初めてだぞ。

「ここまでのお話で、他に質問はありますか？」

「いえ……今のところは、特には」

突っ込み所が多くて心労が溜まるけどな。

「では、……ここからが、本題です」

コホン、と咳払いひとつ。

それから改めて、八雲さんが口を開いた

。

「戦人さん。あなたは骸骨侍と戦いました。その勝敗は別として……
あなたにはどうやら、彼らのような存在に対抗できる才能がある
ようです」

それまでのどこか砕けた雰囲気ではない。

神妙な面持ちで語る八雲さんが言葉を紡ぐたびに、空気が張り詰めていくような気がする。

その言葉を聞くごとに、心臓の鼓動が高鳴っていくのが分かる。

戦いのに感じた、黒い感情が湧き上がるのも、分かる。

「先程も言いました通り、公安零課は万年人手不足です。ですので、才能のある方はもちろんですが、将来有望な方のスカウトや育成も積極的に行っています。そこで――」

俺は、致命的な欠陥を抱えた人間だ。

戦闘戦闘と呼ばれる存在。戦うために戦うことを望む狂人。

殺されかけたというのに、戦いに快楽を見出した。戦いで相手に無理矢理に打ちつけ、壊れかけた拳の痛み心地良さを感じた。一歩間違えれば死んでいたというのに、それでもまだ、俺の心は戦いを求めている。それは本当に狂いそうなくらいの快感で、首の皮一枚のところまで正気を保っていられるというのに。

どうしようもない戦闘狂。

戦いを求めて、求めて、求めて、目の前の二人とも戦いたいと思い初めている。

現代を生きる人間としての歪み、生物としての欠陥。その欠陥を埋めることができず、戦う機会を求めて彷徨っていた。

だから俺は、八百万八雲が告げるその言葉を、心のどこかで期待していたのかもしれない。

「戦場戦人さん。あなたを、公安零課にスカウトします」

骸骨侍のような存在を知り、公安零課の説明を聞いた瞬間に、真っ先に閃いた。

ここにいれば、戦う機会が生まれるんじゃないか？

俺の予想は、間違っていなかった。

ただ、問題があるとすれば。

「いいんですか？ 俺みたいなの、どこの馬の骨とも知れないような人間をスカウトして」

それは、聞いておかなければならないことだ。

公安零課は非公式組織であるとはいえ、間違いなく秩序を守る側の存在だ。

人々を守るといふ崇高な使命のもと設立された組織。所属している人間が全員聖人君子というわけではないだろうが、基本的には『守ること』を目的としているのだろう。俺のような人間として大切なものの欠落した人間が、『戦うこと』を目的に戦いを求める人間が、秩序側にいてもいいのだろうか。こんな、真っ黒な感情を抱く、敵を斃し毀すことを望むような人間を、本当に戦わせてもいいのか。

だが、そんな心配をする俺に対して、八雲さんはため息をひとつ。

それから微かな苦笑を浮かべ、まるで小さな子供に言い聞かせる

ような穏やかな言葉で。

「戦人さん。人間とは、必ず何かしらの欠陥を抱えているものです。それを補うために、仲間がいるのですよ」

その穏やかな言葉に、俺は戦慄した。

どうして、それが分かるんだ。

いや、今だけじゃない。

八雲さんは初めから、俺が聞きたいこと尋ねたいことに先回りして答えている。

俺がなにを考え感じているのか、すべて理解しているかのように。

まるで眼球を通して心の内側を探られているようだ。最初に感じたその感覚は、決して気のせいなどではなかった。彼女は本当に、俺の心を覗いているのか？ 心を見透かされたかのような感覚に、気持ち悪さすら覚える。

八百万八雲。あんたは一体……何者なんだ？

「安心するの、戦人君。私達は戦人君が心配しているような、正義の組織じゃないの」

呆然とする俺に対して、梢が語りだす。

「例えば、私達には人命保護は義務付けられていないの。公式には存在していないモノ達が基本的に人間以上の力を持っていて、人命

を優先すると私達の方が危なくなるからんだけど……それって捉え方によっては、ものすごく残酷なことなの」

言葉を紡ぐ梢から、先程までの人懐っこさを感じない。いや、喋り口調も声質も、本当に変化していないのだ。変わったのは、本質。声を発し、聞く条件は同じなのに、そのなにもかもが異質なものにした。思えた。

「だから、安心して欲しいの。ここにいる人間に、戦人君が考えているような真つ当な人なんていないの。みんなみんな、人としてどこか欠けた人達ばかりなの。戦人君と、同じだよ？」

あくまで笑顔で、梢は語る。

その笑顔が、酷く悪魔的なものに見える。

それだけじゃない。

言葉を交わすたびに、芹沢梢という存在が分からなくなる。その言葉を聞いたたびに、得体の知れないなにかを感じる。

俺が会話している、お嬢様学校の制服に身を包んだ小柄な少女は……本当に、人間なのか？

それを自覚してしまった今、目の前の二人から、骸骨侍という存在以上に、異質なものを感じる。

だが。

それ以上に——戦えるということは、俺にとって抗いがたい魅力

を有していた。

光に吸い寄せられる蛾のように。

あるいは、薬物依存患者のように。

俺は、戦うという行為から、逃れられそうもない。

「……分かりました。俺を、公安零課の一員にしてください」

「ありがとうございます、戦人君」

「良かったね、戦人君。あなたの願いが叶えられて。私も嬉しいの」

頭を下げる八雲さんと、子供のような邪気のない笑顔を浮かべる梢。

その行為を、笑顔を、俺は額面通りに捉えることができない。

だけど、それで構わない。

戦いの場を提供してくれる。今はそれで十分だ。

「では、早速で申し訳ないのですが、明日から仕事を初めてもらいます。と言っても、しばらくは研修期間ということで、梢さんの下で指示に従ってもらうことになりますけど」

「個人的には、戦人君にはとっても期待してるの。戦人君が望むなら英雄にだってなれると思うてるの。だけど手を抜くつもりはないから、しっかりついてきてね、戦人君」

二人の説明を聞きながら、俺は思う。

戦いの場が与えられることに対する歓喜。思い出されるのは、戦いに感じた快感。あの感覚をまた味わうことができる。殺意を向け、向けられることができる。そのことに血肉が反応し、喜びに打ち震える。

暗く、黒い、願い。

そんな自分自身が、俺は大嫌いなんだ。

それはこれからも、変わりそうにない。

3・ごっくりさん 前編

「祀。新種の都市伝説について、お前が知っていることをなるべく詳しく教えてくれ」

放課後、俺は祀を学園都市内にある喫茶店に呼び出した。

どうしたんだい、と声に出さずとも表情で尋ねる祀に対して開口一番、そう頼んだ俺に対して、祀はただ驚いたまま、しばらく動かなかった。

「……ボクは夢でも見ているのか？ まさか君の方から、そんなことを聞いてくるなんて」

十秒近い間を置いてようやく反応を見せたが、よほど俺の言葉が予想外だったようだ。

自分でも、意外だとは思っただけだな。今まで、祀がそういう話をして話半分で聞き流していたし。

しかし、いつまでも驚かれても話が進まないの、俺は半ば強引に話を進めた。

「で、どうなんだ？」

「それは、構わないけど……一体、どういう風の吹きまわしなんだい？」

「まあ、事情があつてな」

公安零課に所属してから、一週間が経過した。

その一週間で特に変わった事件もなく、俺は芹沢梢の下で研修を続けていた。最初はレクリエーション、施設の使い方や身分証明の方法など。その間に、お嬢様学校に対するイメージが一八〇度変化したのは、どう考えても梢が悪いが、それは余談だろう。

公安零課の人間で真っ先に相對した八百萬八雲、芹沢梢という異質な存在のせいで植えつけられた先入観から、公安零課とはどんな組織なのかと警戒していたが……実際のところ、研修内容や運営理念、所属している職員達の人間性も含めて、予想以上にまともな組織だった。無駄な警戒をしていた俺としては拍子抜け、肩透かしを食らった気分だった。

しかし、その裏側に確かに見え隠れするのは、言葉にしがたい異質さ。

公安零課の部署にいと、他の署員達に出会うことは多々ある。その年齢、性別はバラバラで、中には俺と同じか……下手したら年下かもしれない人間が同じように研修をしていたり、逆に明らかに年上の人間を指導していたり。

それだけでも十分に奇妙な光景なのだが、それも一週間もすれば慣れた。

だから、俺が感じた異質さの正体はおそらく、そこではない。

挨拶を交わしたり、少し話した感じでは署員は若年層が多少大人びていると感じるくらいで、ほとんどが年相応、おかしいところの

ない人間のように見えた。けど、それをごく普通の人間と呼ぶのは、少し違う気がするんだよな。

もつとも、出会って一週間程度で全員の人となりを掴もうとすることが間違いなのかもしれないけどな。

第一、俺は公安零課の中で最も付き合いのある芹沢梢という少女について、詳細どころかその能力の正体すら知らないのだから。

公安零課という組織について分からないこと、知らないことだらけなんだよ。

「……で、戦人は一体どんな都市伝説について知りたいのかな？ それとも、ボクの知識を片っ端から披露すればいいのかい？ ちなみに、ボクが人に語ることができるほどに知っている新種の都市伝説と言えば、こつくりさん、骸骨侍、踊る爆弾妖精、蜘蛛女、不老不死女……辺りかな」

「いや……そうだな。前に祀が言ってた、新種のこつくりさんについて教えてくれ」

祀の知識を全部披露されると、多分一晩かかっても終わらないだろう。祀は話すのが巧いから、そういう知識の披露会でも、結構楽しく聞くことができるのだが……それでは、梢に課された宿題の期限を超えてしまう。

だから俺は、こつくりさんについて祀に尋ねることにした。

と言うか、新種の都市伝説ってそんなにあるのかよ。

「ふむ。こつくりさんか。分かった。話を整理するから、少し……一分でいい。時間をくれ。注文はニルギリ茶で頼むよ」

「相変わらず、渋い趣味だな」

「あの独特の香りが堪らなくてね」

ニヤリと笑った後、曲げた指を軽く噛むように啜えてから、祀は思索の世界に突入した。祀がなにかを深く考えたり、情報を整理する際にみせる独特の仕草。俺はその間に、注文を聞きに来たウェイトレスに注文を伝える。ニルギリ茶を二人分。

注文と祀の言葉を待ちながら思い返すのは、研修期間ということ、梢が俺に出した課題。

『今このいざなみ市で流行っている都市伝説、怪異、怪談などについて、いくつか調べてくるの。期限は次の土曜まで、ノルマは最低一つ。もし達成できなかった場合、戦人君には地獄を見てもらうことになるの』

そう言い、ニヒヒと奇妙な笑みを浮かべながら両手の指をわきわきと動かす梢の姿自体はまったく怖くないのだが、地獄を見てもらう、と言うからには結構なペナルティなのだろう。

だが、生憎様、俺にはこの手の話題に関しては滅法強い知り合いがいるんでな。

実際の×切は明日なのだが、ひとつくらいならそれに余裕で間に合うぞ。

「……よし。待たせたね。戦人、君はそもそも、こっくりさんについてどれくらいの知識があるんだい？」

思索の世界に突入してから丁度一分が過ぎた頃、祀は口を開いた。

「ん……昔流行った、一〇円玉を使う占いみたいなものだろ？ 社会問題になるくらい流行ったんだっただけか？」

「うん。そうだね。だけど、その理解では甘いし、こっくりさんの本質をなにも掴めていない。いいかい、まずこっくりさんは——」

そうして祀によって懇切丁寧に語られたこっくりさんの基礎知識をまとめると、こうなる。

こっくりさん……漢字で書くと狐狗狸さんとは、西洋のターニングテーブルを起源とする降霊術の一種らしい。

その方法は至ってシンプル。はい、いいえ、鳥居、男、女、五十音表を記入した紙を用意し、その紙の上に一〇円玉を置いて参加者全員の人差し指を添えていく。全員が力を抜いて「コックリさん、コックリさん、おいでください」と呼びかけると、指を添えた一〇円玉が勝手に動き、「はい」を示す。そうなると降霊は成功で、それから参加者がこっくりさんに尋ねると一〇円玉が勝手に動き、文字を示すことで質問に答えてくれる、のだそうだ。

「コインが勝手に動き、文字や記号を示すことで意味のある単語を示す、というのがミソだね。霊の仕業か、筋肉疲労による現象なのか、それとも参加者の誰かが意図的に指を動かしているのか。こっくりさんという現象が起こる原因について説はいくつかあるけど……問題は、こっくりさんが流行した七〇年代、こっくりさんを実行

した少年少女達の中に集団ヒステリーのような現象が多発した、ということだろうね」

「ああ、その辺の話は俺も聞いたことがあるな。社会問題になったらしいし」

「当人達はただ占いをしているつもりだったんだろうけど、結果としてそういう異常行動を取ってしまったわけだ。その辺について、いくつか説や考察はあるんだが……今回は昔のこっくりさんではなくて、今流行しているこっくりさんについて聞きたいんだったね」

祀の問いかけに俺は頷く。

祀は確かに持論を語るのが好きだが、嫌がる相手に無理に話を聞かせようとはしない。頭が良いからといって、その知識を得意げに披露するということがない。祀がこの手の話をしたがるのは、自慢や高慢ちきな趣味ではなく、ただ単純に話すのが好きだからだ。

ほんの少しも自身の知識を驕らないのは、きっと祀が本当に頭が良いつてことなんだろうな。

祀は謙遜して否定するが、そういうところはやはり凄いやな。

「一応、こっくりさんという名前と、起源から来た根底は同じ。だけど、主眼が今と昔では異なっているんだ。昔のこっくりさんは占いが目的だった。誰が好きだとか嫌いだとか、年頃の女学生が好むような、ね。だけど、今流行している新種のこっくりさんは、どういわけかおまじない……それも、願い事を叶えることが目的なんだ」

そこで祀は一息ついて、ウエイトレスによって運ばれてきたニルギリ茶を口に運ぶ。

俺もそれにならってニルギリ茶を一口飲むが……口の中に広がる草のような香りが、どうも受け付けない。今なら飲めるかと思つて注文してみたが、……微妙だ。これは失敗だった。素直にコーヒーか緑茶でも注文しておけばよかった。

「ふむ。ニルギリ茶はどちらかと言えば、個性の弱いお茶なんだけどね？」

「紅茶系は苦手なんだよ。味が無い割に、妙に気取つたような匂いが鼻について受け付けない」

「確かに、戦人が紅茶の産地や品種を論じる姿は、ボクには思い浮かばないかな」

「ほつとけ」

余計なお世話だ。

そんな俺の反応がおかしかったのか、少しばかり笑ってから、祀は再びカップに口を付ける。

その薄い唇がニルギリ茶で満たされたカップから離れるのを待つてから、俺は続きを促した。

「で、願い事つてのは？」

「ああ。昔のこっくりさんにそういう性質がまったくなかつたわけ

ではないんだけど、今はことさらその性質が強化されていてね。方法もほとんど同じなんだが、なんでも定期的にこつくりさんを行い、特定の言葉を唱え続けることで、願いが叶うんだそうだ」

その祀の説明を聞いて俺の頭に思い浮かんだのは、黒いローブに身を包んだ怪しい男達が、暗い部屋で蠟燭やら骸骨やらの乗った魔法陣を囲んで呪文を唱える姿だった。

俺の想像力が乏しいだけなのかもしれないが、あまり碌な情景が思い浮かばないぞ。

「……新興宗教みたいだな」

「戦人のその意見は真理を突いていると思うよ。事実、この新しいこつくりさんはすでに一部の女学生達の間で市民権を得ていてね。おまじないも年頃の女学生が好むモノだから、流行するのは頷ける。本当に願い事が叶うのかどうか、真実はさておき、それを願って一心不乱に儀式を続ける姿は……まあ、一種の信仰に近いものはあるだろう」

祀の話ぶりをから察するに、この新種のこつくりさんとは、意外と流行っているらしい。

ただ、まじないで願いを叶えようというのは、俺には理解できないな。

それは努力の放棄であり、否定だと俺は思う。どれだけ頑張っても、血反吐を吐くような努力をしても、そのまじないがある限り、願いが叶ったのはそのまじないがあったからだということになり、そこまで積み重ねてきたものが意味のないものだとされてしまうで

はないか。

あるいは、そうやってなにかに継^{すが}らなければならぬほどにやっ
かいな願い事なのだろうか。

ちょうど、俺が悩んでいるように。

「しかし、ボクはこのこつくりさんは案外早いうちに廃れるんじゃないか、と思っっているんだ」

「何故だ？ 宗教みたいになってるんだろ？」

「だからこそ、だよ。戦人は科学技術が発展し、神や靈魂の類が否定される現代……特にその最先鋒であるこの街で、信仰なんてものが根付くと思うかい？」

「……………いや、無理だろうな。どうしてって聞かれると、説明できないけどな」

少し考え、俺は結論を出した。

そう判断した根拠は漠然としたもので、それを言葉にすることはできないけどな。

ただ、思うのだ。

信仰と言^{いふ}理を望む人間が、果たしてこの街に存在するのか、とな。

「戦人。ボクはこう思うんだ。人は、根拠を求める生物だと」

「……と、言つと？」

「科学技術の発展と共に、人は神や靈魂など、超常現象的なものの存在を否定するようになった。何故なら、それが何故そうなるという根拠がないからだ。人は正体のわからないもの、未知の存在を怖れる。これはあくまでも一因に過ぎないが、だからこそ科学技術が発展し、様々な現象について、それが引き起こされる根拠が説明された。そうして根拠の説明が推し進められた今、人は根拠のないものを信用しなくなった。存在する根拠のないものは、存在していないに等しいからね。対して信仰とは、乱暴な言い方をすれば縋る対象だ。心の拠り所と言つてもいい。だが、そこに『どうして心の拠り所となり得るのか』という根拠はない。漠然としたかたちのないものに対する信頼が信仰の正体であり、そんなものに縋るなんてそれこそ、根拠というものが求められる現代に取り残された、時代遅れの思想のひとつだとボクは思うよ」

「なるほど」

「だからこそ、ボクはこの街ではこっくりさんの流行は一時的なものだと思うんだ。人が信仰するに値する根拠がないし、根拠のないものを求めているからこそ、人々はこの街に住んでいるのだから」

教会の神父とかが聞いたら激怒しそうな意見を、祀はさらりと語る。

理路整然と論理立てて考えられたそれは、一見すると都市伝説のような超常現象の話を好む祀の趣向と矛盾しているように感じられる。だが、これが祀なのだと言は思う。存在する根拠のないものを、ただただ理路整然と考え、その存在を論じる。

頭が良いからこそ、理論的に物事を考えられるからこそ、そういったものを好むのだろうか。

「ただ……このこつくりさんんだけど、個人的に気にかかることがあるんだ」

「新興宗教にそつくりだ、という時点で碌なものじゃないと思うんだが」

「それもそうんだけどね」

俺の言葉に祀は苦笑した。

「さつき、こつくりさんをするときに特定の言葉を唱えることで願いが叶うって言ったよね？ 別に、そういうおまじないに呪文は付き物なんだけど……どういうわけかその呪文で、願い事を叶えて欲しいってお願いする対象が、こつくりじゃなくて土と雲なんだ。確かに、自然を祈祷の対象にすることはよくあるけどだよ。でもそれなら、土はともかく、雲を対象にするのはすごく中途半端というか、不自然なんだ。土と並べるなら、空か海が妥当なところで、そっちならまだ分かるんだけど」

俺にはその辺の細かい違いは分からないが、祀がおかしいと言うからにはそうなのだろう。

俺だつたら、土と雲にお願いするものなんだって言われてしまえば、そういうものなんだと納得して、それを変だとは思わないだろう。

もつとも、俺がそういうおまじないの類に頼ることは、まずないだろうけどな。

そんな下らないことで願いが叶うなら、俺はとっくに願ってるさ。

「多分今この瞬間にも、学園都市のどこかで誰かがこっくりさんを試してると思うよ。そのくらい、こっくりさんは流行っているからね」

「祀はしないのか？ こっくりさん」

「んー……なんて言うのかな。願い事がないわけじゃないんだけど、ボクの願いはこっくりさんをするものでは叶わない類のものだと思うんだ。だから、知識として方法は知っていても、自分ですることはない、かな」

齒切れの悪い答え。

その答えに何故か、既視感を覚える。

どこかで同じような体験をしたことがあるような、けどどこで体験したのか覚えていない、そんな感覚。

祀とは毎日のように会話しているハズなのに。

「……なあ、祀。お前の願い事って——」

その既視感の正体を探ろうとした俺の声はしかし、俺自身の携帯の着信音によって遮られる。

嫌なタイミングだな。

祀に視線で断りをいれ、制服のポケットから携帯を取り出す。そのサブディスプレイに映し出される着信の主は——芹沢梢。

液晶に映し出されたその名前を見た途端、ドクンと、心臓が大きく鼓動した。

なんとなく、予感はしていた。……いや、違う。

俺は、この日が来ることを期待していた。

まるでそういう呪いを掛けられたかのような強制力。

興奮が声や表情に出ないように注意しながら、携帯電話の通話ボタンを押したのだった。

先に現場に到着していた特殊車両の中で俺用にカスタマイズされた新品の装備に着替え、最後の確認として、自分の姿を改めて見回してみる。

防弾繊維で編まれたベストと両腕及び関節部を保護するプロテクター。俺のスタイルに合わせて要所要所が強化されたナックルガード付きの黒いグローブ、腰に巻かれたベルトには一応持つておくと渡された拳銃・ベレッタF92Sの収納されたホルスターと、片手で扱える長さの片刃の銃剣。それに加えて特殊強化アクリル樹脂で造られたフェイスガード。装着者の顔が見えないように外側から見

れば黒いアクリル板にしか見えないが、マジックミラー状になっているらしく視界は澄んでいる。

遠近どの距離でも、どんな相手でも基本的な対処が可能な公安機動隊の基本装備に、装着者の戦闘スタイルや対象に合わせて零課独自の改良を加えた、公安零課では壱式装備と呼ばれる格好。硬質プラスチックや緩衝材を多用している割には身体の動きを阻害せず、むしろ下手な運動着よりも動きやすいとすら感じる。正に、戦うために生み出された衣装。

まさか俺が、こんな格好のできる日が来るとは思わなかった。

この装備が自分の身を守るためのものであると同時に、危険なものだということは分かっている。だがそれ以上に、俺が戦いの場に赴くことができるということ。この一点が、俺の心を高揚させていた。

まだ見ぬ敵と、命を賭けた本気の勝負。

今か今かと戦いを求める俺自身に『ああ、やっぱり俺は人として大切なものが欠けているんだな』と心の中で苦笑する。

……今さらだけどな。

だからこそ俺は今、ここにいるんだ。

「戦人君。状況説明をしようと思うんだけど、準備はいいかな」
フリーファイニング

梢も俺と似たような装備をしている。違いは、両腰には二丁の拳銃・SIG226とナイフを装備し、肩にスリングの付いたショツ

トガンを掛けている。俺のような接近格闘ではなく、射撃戦を主体とした正統派の装備。その装備ならフェイスガードを付けるのが良いと思うのだが、本人曰く『ただでさえ弱い能力が阻害されるから嫌なの』とのことで装備していない。

そして、その正統派揃いの装備の中で異彩を放つのは、腰の後ろに横向きに装備された簞えびらだろう。その中に収められているのは矢羽の付いていない、金属製だと思われる矢が十数本。

弓も持っていないのに、そんなものを一体なにに使用するつもりなのか。俺には皆目見当もつかない。

「ああ……了解した」

戦場戦人、芹沢梢。

他の職員達もいるものの、現場に突入するのは俺達二人だけ。

俺のイメージでは、公安の人間が現場に突入するときはもっと大所帯だと思っていたんだが。

それだけ、今回の任務は簡単だというのだろうか。

それとも……それができないくらいに、公安零課は人手不足だと言うのか？

まあ、それはそれで好都合だけだな。

人数が少なければそれだけ、俺が戦う機会が増えるってことだし。

「では、今回のミッションを説明します」

いつものそれと違い、丁寧な言葉使いで状況説明を始める梢。^{フリーファイニング}

本人は至って真面目だというのに、見た目以上の幼声のせいでいまいち緊張感が生まれないのは、芹沢梢という少女の仕様なんだろうな、きっと。

「今回の作戦内容は、こつくりさんにあてられた学生の保護なの」

おいおい、早速こつくりさんの事件かよ。

ついさっき祀に聞いたばかりだったのに。

いざなみ市で流行っている話を適当に選んだだけだったのに……自分自身のチョイスに驚くしかないな、これは。

「ん、戦人君。その様子だと、宿題はちゃんとやっただけだね。だったら、知ってるよね？ こつくりさんをした子供達が辿った末路」

「……原因は分からないが、集団ヒステリーを起こしたんだろ？」

「その通りなの。こつくりさんは元々降霊術の一種だから……たまたま条件が合致した場合、本当に低級霊を召喚しちゃって、素人に抵抗力なんて当然あるハズないから、為す術もなく取り憑かれた……ってというのが、集団ヒステリーの正体なの」

悪条件が重なることで、子供の遊びが本物とはまた違う紛い物になってしまったってことか。

祀がこの話を聞いたら、なんて言うんだろうな。

その原因が本当にオカルトなものだなんて。

祀はむしろそういうオカルトが好きだから、案外嬉々としてその説を指示するかもしれない。

「今回もそれと同じなの。……実は、これと同じ案件が、今月だけで五件、いざなみ市で発生しているの。これで六件目なの」

「六件目……その割には、騒ぎになってないな」

オカルトな内容や噂話程度の規模ならともかく、それだけ件数が重なれば、ニュースで取り上げられそうなものだが。

「それはもちろん、私達公安零課課報部の人達が頑張って情報統制をしているからなの。……でも、人の口に戸は立てられないって言うのに、奇妙なくらいに、こっくりさんをした後の話は聞かないの。まるで私達以外の誰かが、こっくりさんをした子達に対して意図的に情報を統制するようにしている、みたいに」

そう言えば、祀の話にもこっくりさんをした後の話はなかったな。どこそこの誰の願いが叶ったとか、こっくりさんのをすれば霊障にあうとか、そういうの。

話す時間がなかっただけ、なのだろうか。

それとも、まさか梢が言う通り、本当に誰かが口止めしているのだろうか。

……まさかな。

こっくりさんをしているのは、噂話が大好きな女学生が中心なんだ。それが願い事が叶ったというポジティブな話であれ、こっくりさんの後で取り憑かれるというネガティブな話であれ。そんな彼女達の口を完全に止めるなんてできないだろう。

それだけ、公安零課の人間は優秀ってことか。

「……まあ、そういう難しい話は後で考えるの。今は、目の前の仕事のことを考えるの。一般生徒や職員の避難と敷地の封鎖は完了してるから、外から邪魔が入ることも、保護対象者が外部に逃げ出すこともないの。名簿から推察するに、校舎にいと予想されるのは私達を除いて一〇人前後。このうち何人が保護対象者かは分からないけど、ひょっとしたら逃げ遅れた生徒がいるかもしれないの。だから戦人君も、注意深く校舎内を探してほしいの」

言い、梢は目の前にある校舎を見上げる。

俺もそれにつられて、すでに見慣れた校舎を見上げる。

俺の初任務の場所。

それはよりにもよって、俺達が通う学校の校舎だった。

日常を過ごす場所で起こった事件。

相手が人間、それも同じ学校に通う生徒だということを聞いたとき、俺は少しかかりした。

それが、俺が初任務に対して真つ先に覚えた正直な感想だ。人外との戦いを期待していた俺にとって、相手が同じ学校の生徒であるというのは、残念なことに他ならなかった。学校で戦うことにも、同じ高校に通う学生と戦うことになるかも知っても、心は痛まなかった。

あるのはただただ、戦えることへの喜びと期待。

幸いなことに俺には同じ学校に友達がほとんどいない。例えクラスメートでも、向かってくるのであれば容赦なく殴り飛ばせると思う。……むしろ、そうであってほしいと思う。それなら、正当防衛が通用するから。

腐れた考えだよな、ホント。

それを平然と考えつく自分自身に、ゾツとさせられる。

『私達には、人命保護は義務付けられてないの』

梢が言った言葉であり、その後の研修でもはつきりと言われた公安零課の基本方針。

それは、公安特に零課では、通常の警察機構のように被害者や被疑者の安全が第一目標ではないということ。被疑者を取り押さえるためなら多少の怪我は多めに見るし、最悪倒してしまっても構わない。容疑者の安全も最悪無視していい。

無論、理由もなく相手を攻撃することが許されているわけではない。被害者の安全は優先されるべきだし、被疑者であろうと無傷で保護するのが望ましい。だが、それはあくまでも努力目標であり義

務ではない。

そのような気を使っていられるほど公安が扱う相手は甘くはない、ということらしい。だから、相手がこちらに向かってくるのであれば、身の安全のために手加減せず容赦なく戦っている、ということだ。これは梢に言質を取っているから間違いない。最悪、相手を殺すことすら許される。そこから先は本人次第……とも言っていたが、どう言う意味なのかいまいわからなかった。

とにかく、戦うということに対して制限はない。

……だからと言って、流石に殺してしまうことは躊躇われるけどな。

俺だって、無闇矢鱈に相手を殺したわけではない。

俺はただ、戦いたいだけなんだ。

願わくば再び、骸骨侍のような相手と。

互いの命と魂を賭けた、尋常の勝負を。

それが俺の心を蝕む、呪いのような暗い願い。

「なにか質問は？ 戦人君」

「いや……特には」

「なら、^{フリーファイニング}状況説明も終わったし……戦人君。私と一緒に、死亡フラグ立てない？」

「……は？」

「だから、一緒に死亡フラグ立てよ？」

死亡フラグ……って言うと、確かアレだよな。

映画とかで、戦地に赴く直前に思わせぶりな台詞を言うと、確実に死んでしまうと言われているやつ。『俺、この戦争が終わったら結婚するんだ』とか、そういう台詞。

梢は梢で『一緒にご飯食べようよ』みたいな軽いノリで言ってるが……死亡フラグって、わざわざ立てるようなものだったのか？

と言うか、俺は死ぬ気はないぞ。

「なんでまた、死亡フラグを……」

「要するに願掛けなの。死亡フラグなんて常識に捕らわれないぞ、私は絶対に生きて帰るんだ！　っていう、決意表示」

「死亡フラグは常識なのか？」

それは違うと思うんだけどな。

少なくとも梢の中では常識のようだが、それは少数派だと思うぞ。

「あとね、戦う前に少し、戦った後のことを考えて欲しいの」

「戦った、後のこと……？」

「うん。戦いの後、どうなるのか。確かに死亡フラグを立てるなんて馬鹿馬鹿しいことかもしれないし……残酷な話だけど、死亡フラグを立ててから実際に死んじゃった人もいるの。だけど、私達は死に行くわけじゃないし、戦うばかりが私達のすべてじゃない。だから、戦う前に死亡フラグを立てて……戦った後のことを考えてほしいの。そうすれば、残酷な現実の中で……私達は、人間でいられるから」

そう語る梢の表情に、いつものような人懐っこい笑顔はなかった。

実感を伴った言葉。

戦うばかりが、私達のすべてじゃない。

私達は、人間でいられるから。

その言葉に込められた意味も、そう語る梢の過去になにがあったのかも、俺は知らない。

それなのに、その言葉が嫌に胸に突き刺さる。

俺に忠告するというよりは、自分に言い聞かせるような言葉だといふのに。

俺に戦い以外のものがあるのだろうか。そう、考えさせられる。

戦いに囚われる俺に、戦い以外のはあるのだろうか。ひたすらに戦いを渴望する俺を、果たしてまともな人間だと言うことはできるのだろうか。そんな人間が、秩序側に……この街にいても、い

いのだろうか。

戦い以外のことにに関して、俺にはなにもない。それは分かっている。

それが分かっているからこそ、俺はそんな俺自身が嫌いなんだ。

……それこそ考えても仕方がないのは、分かっているんだけどな。

ただ、そう語る梢がいつもよりも小さく見えて、邪険な反応をするのは悪い気がした。

だけど……ああ、クソ。やっぱりこういうのは柄じゃないな。

一回だけだからな、梢。

俺は観念し、ため息をついてから右手で梢の頭に触れる。

途端、梢の身体はビクリと一瞬強張ったが、驚きの表情で俺のこ
とを見つめたままその手を拒絶しようとしないので、俺はそのまま
頭を撫でた。

「その、なんだ。この戦いが終わったら、飯でも食いに行こう。
…これでいいか？」

こういうとき、気のきいたことのひとつでも言えればいいんだが、
生憎俺はそういうことには疎いんだな。

精々、こんなことくらいしかできない。

「……………えへへ」

幸いにも俺の言葉選びが正しかったのか梢は頭を撫でられながら嬉しそうに微笑んでいた。

「戦人君、意外とプレイボーイなの。梢ちゃんビックリなの」

「どこがだよ」

梢の反応を適当に流し、適当なところで切り挙げ手を話す。

「あ……………」

俺のことを見つめるその表情がどこか名残惜しそうに見えたのは、気のせいではないだろう。

その表情を見て、不覚にも可愛いと思ってしまった。

フェイスガードをしていて、本当に良かったと思う。

そのときの俺の顔を、梢に見られずに済むから。

「んふふ」

「……………なんだよ、気持ち悪い笑い方なんてして」

「内緒なの。……………じゃあ私は、この戦いが終わったら、戦人君にもう一回頭を撫でてもらおうかな」

「そんなことでいいのか？」

「いいの。そういうもののなの」

そういうもの、なのか。

祀も頭を撫でられると喜ぶが……女という生物はそんなに頭を撫でられるのが好きなのか？

よく分からないな、異性というものは。

4・ごっくりさん 後編

誰もいない校舎には一種異様な雰囲気漂っていると思う。敷地内に俺達以外の生徒がほとんどいないという異常な事態がそれを助長しているのかもしれない。

あまりにも静かで思わず、毎日のように見る生徒に溢れた賑やかな光景を幻視してしまいそうになる。壁に声が染みついていて、耳を澄ませばそれが聞こえてくるような気がする。誰もいないのに、誰かがいるような気がする。誰もいないからだろうか、どこか薄ら寒さすら感じるような気がする。

なるほど、夜の学校が怪談の舞台になるのは、このせいなんだな。

「A棟四階、安全確認。^{クリア}……四階には誰もいないみたいなの」

「そう、みたいだな」

俺達の通う学校は中央部に一番大きい五階建ての校舎があり、それを挟むように四階建てのB棟とC棟が建てられている。職員室や校長室はA棟にあるが、それ以外の専門教室はC棟に集められていて、B棟はすべての部屋が教室になっている。

「……戦人君、五階は気をつけてね。誰がいるから」

四階の教室を一通り確認し、五階へ向かうための階段に足をかけようとしたとき、梢がそう言った。その視線は俺ではなく天井を射抜くように見つめていて、いつの間にかホルスターから二丁の拳銃を抜いていた。

「分かるのか？」

「多分、ほぼ間違いないと思うの。階段の近くに……一人、かな。それとは別の場所に、多分五人と……四人」

「逃げ遅れた奴か」

「そうだと思うけど、両方の可能性もあるから注意した方が良いの」

梢の予想を聞いて、気付く。

そういえば俺は、梢の能力を知らない。聞く機会は何回かあったが、正直それほど興味がなかったから結局聞かずじまいに終わっていたのだ。梢もなにか能力を持っている風なことを言っていたけど、こうして四階にいながら五階の状況を確認できるということは、これが梢の能力なのだろうか。

「ま、とりあえず五階に行ってみるの。相手が逃げ遅れた人にして保護対象にしても、接触してみないことには始まらないの」

梢の言葉に頷き、俺が前、梢が真上を、警戒しながら階段をなるべく足音を立てないように登る。今日五回目になる、かなり神経を使った階段の登り方。その間中、なにがあっても即対処ができるように拳を軽く握り、重心の取り方や足の位置に注意を払い続ける。

そうして神経を張り続けることが、まったく苦にならない。梢が言うには、こうして神経の緊張を保ち続けることは、本人が思っている以上に体力を消費するらしいが……これも戦いに通じるものがあるからだろうか。むしろ心が高揚し、身体から力が漲ってくる。

とんだ戦闘狂だよな、本当に。

こうしている間にも、誰かが苦しんでいるかもしれないというのに……身体の奥底から湧き上がる高揚感を抑えられないでいる。こうして周囲を警戒しながら歩くことすら、俺は愉しいと思ってしまうっている。警戒が叶い、なにかが襲ってくればいいと、本気で思っている。

だが生憎、階段を登り切り、階段から廊下へと繋がる開けた場所に出ても、なにかが襲ってくることはなかった。

そのことに少しばかり落胆し、同時にほんの僅かだけ、安堵する。

だが、本命はこれからだ。

梢の話では、階段の傍に誰かいるらしいからな。

期待と、そんな自分自身に対する嫌悪感を胸に、細心の注意を払いつつも、角から頭を出し先を確認する。

梢は階段の近くに誰かいると言っていたが……廊下には人影はひとつもなかった。

「……誰もいないぞ？」

「……移動したみたいなの。階段の傍の教室」

梢は階段から一番近い教室を顎で差し、それから自分の唇に指をあてる。

静かにしろ、ってことか。

俺は口を閉じ、軽く頷くことで同意を示す。

梢は満足そうに微笑み、両手に拳銃を持ったまま、階段に一番近い扉のすぐ傍の壁に張り付いた。それから拳銃を握ったまま、右手の人差し指だけを一、二、三と立てた後に教室内部を指差す。事前に取り決めていた突入の合図。俺もそれに倣い、壁に張り付く。近接戦闘主体の俺が前衛、射撃戦闘主体の梢が中衛。

スタンバイ
「三、二、一……」

口の動きだけでカウントを行う梢。

アイコンタクトで突入のタイミングを、息を合わせる。

そして。

「突入！」
ゴッ

警戒を保ったまま、梢の合図と同時に俺達は同時に教室に飛び込む。

その教室の、一番奥。

こちらを警戒するかのように視線を向ける男子生徒が一人。真っ先に目に付いたのは、窓から差し込む夕日に煌めく、場違いな金色列ーゼントだった。

「……近藤、修哉？」

「あ？ 俺の名前は斎藤修二だ……って、お前もしかして、戦場戦人か？」

ああ、そうか。俺はフェイスガードを付けているから顔が見えないのか。

いや、そんなことは心底どうでもいい。

どうしてこいつが、こんなところにいるんだ？

「戦人君、知り合いなの？」

「……………」

その問いになんと答えていか分からず、俺は口籠る。

「まあ、その辺はどうでもいいの。えーと、斎藤君……かな？ あなた達は、どうしてここにしているのかな？」

ニコニコと人懐っこい笑顔を浮かべ、相変わらずの幼い声で梢が尋ねる。

「あ？ お前には関係ないだろうが」

一見すると女子中学生にしか見えない梢に対しても容赦なくドスを利かせた声で、斎藤は梢を睨みつける。その見た目も相まって、普通の学生には十分すぎるほどの迫力がある。実際、俺がこいつに絡まれたとき、周囲にいる学生はみんなビビるしな。

だが、相手が悪すぎる。

梢が、そんなことで怖がるか弱い少女なわけがあるか。

「……もう一回聞くの。斎藤君達は、どうしてここににいるのかな？」

「だから、関係ないって言ってるだろうが」

斎藤は普段から突っぱねているから、変なところで強情なのだ。
少なくとも、見た目が中学生の梢の質問に素直に答えるハズが無い。

このままだと堂々巡りで、埒が明きそうにないな。

一発殴って話を聞かせた方が早いな、と俺は梢の前に出ようとして……

「もう一度、聞くの。斎藤君は、どうして、ここににいるのかな？」

妙に幼い声のトーンも、人懐っこそうなニコニコ笑顔もそのままに、梢は斎藤に拳銃を突きつけていた。

その、本当に何気ない仕草のように拳銃を向けたことに俺は言葉を失い、同時に梢との初対面を思いだす。そう言えばあのときも、梢は躊躇うことなく俺達に銃口を向けていた。斎藤も、まさか梢のような少女が自然な動作で自分に拳銃を突きつけるとは思っていなかったのか、間抜けな顔で梢のことを見つめていた。

「……………だから、関係ねえって——」

数秒間動けず、それでも虚勢を張り続ける斎藤がようやく捻り出した言葉。

その言葉への返答は、鉛玉だった。

本当に、ほんの僅かの躊躇いもなく、引き金を引きやがったのだ。

「……最後のチャンスなの、斎藤君。あなた達はどうして、ここにいるの？」

ガラスが割れ、残った破片がパラパラと落ちる音を背景に、それでも変わらない調子で梢は話す。

威嚇射撃……だったのだと思う。

弾丸は誰にも当たらず、斎藤の後ろにあったガラスを砕いただけだったから。

ただ、もし梢が本当に斎藤を撃つ気だったとして、そのときに殺気が放たれていたのかどうかは、俺には分からないが。

例えば飛び回る羽虫を潰すときのように、あるいは道を歩く蟻に気付かずに踏み潰したときのように、殺意を欠片も抱かず何気ない動作で引き金を引くことができる。

これが、梢の人懐っこい笑顔の裏側に見えていたもののなのだと。これまでに幾度か感じていた違和感の正体を、俺はようやく理解した。

梢はなにに対しても、容赦というものを一切持たないのだ。

「……………だ、友達ダチの女スケを捕まえるためだ」

そんな呆氣に取られているのか、それとも梢のことを怖れているのか。

いつもの無駄な凄みも威嚇もなく、掠れた声で斎藤はそう言った。

「友達ダチの女？」

「あ、ああ。そいつが、そいつの友達ダチと一緒にこっくりさんとか言うのをしてたらしいんだが……全員が突然暴れ出してよ。それを止めるために、俺達もここに残ったんだ」

「……………その、友達ダチってのは？」

「暴れる女を止めようとしたが、抵抗されて大怪我だよ。死ぬんじゃないかってくらいに血を流して……だけどそいつは、最後まで自分の女のことを気にしていた。殺されそうになつたてのによ。だから俺が、あいつの女を止めることにしたんだ」

「つまりあなた達は、友達の意志を継ぐためにここに残ったってことなのね。うん、素敵な友情なの。だけど、だからと言ってここに残ることは許されないの。……帰りなさい。後は、私達がなんとかするから」

明確な警告。

それに加えて、今度はキツチリと斎藤の頭に狙いをつけている。

引かなければ撃つ。引き金に指をかけた梢は相変わらずの笑顔で、その声にも表情にも警告の意志は感じられない。だが、その言葉に従わなければ笑顔のままで引き金を引く。それを確信させられる、凄みがあった。

梢がなにを考えているのか俺には良く分からないが、これはさすがにやりすぎなのでは、と思う。

これが本当に……ついさっき、俺に頭を撫でられて無邪気に笑っていた少女と、同一人物なのか？

「…………駄目だ。どれだけ脅されても、それはできねえ」

「理由を聞くの」

「俺の友達^{ダチ}が困っているんだ。そいつは自分の女を見捨てるような男じゃない。そいつの意志を、俺は無下にできねえ。……それによ」

「それに？」

「友達^{ダチ}を放って一人で逃げるような情けない男に、俺はなりたくねえんだよ」

そう、はつきりと告げ、斎藤は強い意志の籠った瞳で梢のことを睨みつけた。

ここから引く気はないと、その瞳が訴えている。

それは、どこまでも愚直で、ある意味で斎藤らしい選択。

現代に馴染めない古い男の、不器用で愚かとも言える選択。

それを、俺は馬鹿にすることができない。

良い悪い、正しいか間違っているかの話ではない。

結局のところ、それが性分なのだ。

おかしいと分かっているけど、絶対に曲げることのできない……その人間の本质。

ああ、クソ。

悔しくて、認めたくもないが、やはりこいつは俺と良く似ている。

どう足掻いても……自分を曲げることができない馬鹿なところが、な。

ただ、その下らない性分はもしかしたら、斎藤の方が上等なのかもしれない。

もし同じ状況に陥ったとき、俺ならきつと、友人を助けるよりも戦いを優先するだろう。暗い感情を制御するどころかそれに身を任せ、心を殺意に塗れさせ、ただただ相手と戦うことを優先する、戦闘戦闘。それが俺なのだ。

その様子が容易に想像できるな。反吐が出る。

この金髪リゼントのように、『友達のために』戦うことが、俺にはできないだろうから。

斎藤修二という男と出会ってからおよそ一ヶ月。

この男のことを凄いと思う日が来ようとは、な。

「本当に大したものなの。斎藤君、見た目以上に良い男なの。だ
けど……だったら、覚悟はできてるよね」

「おい、待——」

満足気に笑い、それでも銃口を下げようとしない梢。

それを制止しようと手を伸ばした瞬間に、梢は引き金を引いた。

教室内に響く、銃弾の音。

放たれた銃弾は寸分のズレもなく——割れた窓から飛び込んできた、女学生の膝を撃ち抜いていた。

「……え？」

銃口を下げ、そこから出ていた紫煙が振り払われると同時に、大きな音を立てて女学生が床に墜落する。何度も立ちあがろうとし、しかし膝が破壊されているため血を撒き散らしながらのた打ち回る。その女学生が浮かべているのは苦悶の表情……と言うには生温い。

獣。

その表情を見て真っ先に思い浮かべたのは、その単語。

おおよそ人間のものだとは思えないその表情を、俺はただただ果然と眺めていた。

「戦人君、ブーツとしてないで。……あなたが望んだ闘争が始まるの」

その言葉で、俺はようやく我に帰ることができた。

俺は慌てて拳を握り、その動作の後ろで梢は戸惑う斎藤を教室の隅に誘導していた。

その間にも、女学生は立ちあがろうともがく。

斎藤を教室の隅に誘導し終わると、梢はその女学生に梢は歩み寄りながら腰に装備した簞から矢を一本抜き取り、それを勢いよく女学生の身体に突き刺した。

「おい、てめえ！」

「心配ないの。この矢は水の加護を付与されてるから、相手を傷つけることは絶対じゃないの。むしろ、霊障にあてられた子達を助けるために必要なことなの。私も戦人君も霊的な才能は皆無だから、こっするのが一番なの」

喚く斎藤を梢が制止し、改めて女学生に視線を移す。

それに釣られて、俺達も視線を女学生に向ける。

梢が突き刺した矢は女学生の胴体を貫通し、床に突き刺さっている。なのに、そこからは血が一切流れ出ていない。加えて、女学生

は未だ暴れているというのに、その矢は不自然なほどに固く、床から抜ける気配が無い。結果として、膝を撃ち抜かれてもなお暴れ回る女学生をその場に縫い付けることに成功している。

突き刺した対象を傷つけず、その場に固定する矢。

どうなってるんだ、おい。

これが、霊能力というやつなのか？

「そう言えば戦人君にはまだ話してなかったの。私達が持つ能力のこと」

話しながら、梢は銃口を廊下側の天井に向ける。丁度、斜め上を狙うように。

なんでまた、そんな方向に？

不意打ち対策なら、せめて水平方向、強引に剣術に例えるなら中段に構えるのが一番無難なんじゃないのか？

「私の能力は――」

その言葉が終わるか終わらないかの瀬戸際に、梢は再び銃を二発撃つた。

「強いて言うなら、透視能力。私を不意打ちしたければ、空間転移能力者でも連れて来るべきなの」

カチンと、真鍮製の薬莢が床を鳴らす。

「……もつとも、私の能力は弱いから、壁一枚、床一枚しか透視できないけどね」

それからワンプテンポ遅れて、天井から両手を撃ち抜かれた女学生が降って来た。

その女学生に向けて梢は再び矢を突き刺し、その胴体を射抜く。

それだけで、暴れていた女学生は自由を封じられる。

四肢を使って身体を穿つ束縛から逃れようとする様は、まるで生きたまま鋏を刺された標本のようで……中々に、奇妙な光景だった。

「……これは、思っていたよりも厄介なの」

不意に零された梢の言葉に、俺は首を傾げる。

「そうなのか？俺には、梢一人でも勝てるように見えるんだが」

それこそ、俺の出番なんて必要ないくらいに。

「そういう問題じゃないの。どうも相手がごっくりさんにありがちな低級霊じゃなさそうなの。もっと上位……これは、本体を叩かないとやっかいなの」

と、そう言われても、俺には良くわからんのだが。

「つまり、どうすりゃいいんだ？」

「そうだね。交霊状態の核……多分、こつくりさんの紙なの。それがこの階のどこかにあるハズだから、それを破壊すれば彼女達は解放されると思うの。戦人君が持つてる銃剣は法化儀式済みだから、それか私が持つてる矢で貫けば破壊は可能だと思うの」

「ああ、なるほど」

要は、こつくりさんの紙を銃剣で破壊すればいいんだな。

それは分かりやすく助かる。

なにせ、俺には心霊現象だの都市伝説だの、そういう知識は皆無だからな。

「斎藤君は……ここに置いておくのもマズイから、私達について来てくれるかな？」

「げ。本気かよ」

こいつを連れていくのかよ……。

つい、げんなりしてしまう。

俺としては、こいつとはなるべく一緒の空間にいたくないんだが、そういうわけにもいかないか。

俺達は一応公安——秩序側の人間なんだし、進んで見殺しにするわけにもいかないだろう。

それにしても……秩序側、か。

「ああ……俺にも異論はねえよ」

「物分かりが良くて助かるの。こういうとき、良い大人がごねたりすることもあるからねー」

俺が知る普段の斎藤からは考えられないくらい素直な返事。

それに満足気に頷く梢を見ながら、思う。

俺は、俺がまともな人間ではないことを自覚している。黒く暗い殺意に犯された、戦いのことしか頭にない人間。道德の欠落した人間。到底まともとは言えない倫理観を持った、イカれ野郎。

俺が通う高校での事件、相手は取り憑かれた同じ学校の女生徒。それを相手にしてなお、俺は戦うことを優先するだろう。それが自分の性分だと、人間としての欠陥だと痛いほどに理解している。

だからこそ思っただ。

俺が公安の仕事をして……秩序側の存在にいてもいいのか、と。

俺は本来、取り締まられる側の存在なのではないかと、そう思っただ。

「戦人君、心配？」

「うおっ」

気付けば梢の顔が至近距離にあった。身長差的に、梢が下から覗

きこむかたちになる。梢の深紫の瞳に、フェイスガード越しにキスされてしまいそうなくらいに、本当に至近距離で……俺は思わず仰け反っていた。

「あ。戦人君、そこまでして逃げなくてもいいじゃない」

「あのなあ……」

俺の反応が気に入らなかったのか、梢は子供っぽく頬を膨らませて非難の視線を浴びせてくるが、冗談じゃない。

俺だって、男なんだ。

背中をポンと押されれば唇さえ触れてしまいそうな距離に梢のような美少女の顔があつて、冷静でいられるかよ。

「……梢。お前はもう少し、自覚した方がいいぞ」

自身が、下手なアイドルよりよほど可愛いということ。

平静を保ちつつ、それとなく梢に伝えてみる。

「？」

だが俺の意図は通じなかったらしく、？マークが浮かびそうな表情で梢は首を傾げた。

梢のことだから、分かってやってるのかと思ったが……無自覚なのかよ。

タチが悪いぞ。これは。

「……で、これからどうするんだよ」

「え？ ……うん、戦人君が前衛、私が後衛。斎藤君を間に挟む形でフォーメーションを組んで、教室をひとつひとつ風潰しに探すことになるかな」

「……いいのか？ 俺が前衛で」

脳裏に過るのは、公安零課に所属するようになってから、戦えることへの喜びと共に生まれた疑問。

俺は、ここにいてもいいのだろうか。

おそらくそれは俺の中に残っている、人間としてまともな部分がそう思わせるのだろう。

いつそすべてが欠落していたら、こんなことを思わずに済んだのかもしれない。

心のすべてが真っ黒に染まっていれば、その方が開き直れるのかもしれない。

中途半端な良心が残っているからこそ、俺は自身を嫌悪しているのだから。

だが俺の疑問に対し、梢は。

「んー……戦人君は今回初任務だね。だから、これは試験だと思

つてくれればいいの。戦人君がこれから公安零課でやっていけるかどうか。それに、戦人君も、戦いたいんだよね？」

なんといいことはない、拳銃を構えたまま笑う。

血と硝煙の臭い漂うこの場に酷く馴染まない、子供のようなあどけなさの覗く……なにかを期待しているかのような、そんな笑顔。

「期待してるの、戦人君」

かつて俺が見とれた紫の双眸が、俺のことを真っ直ぐと見つめる。

その視線に、その言葉に、その笑顔に、心が痛む。

俺はそんな、まともな人間じゃない。

戦いに囚われ、犯され、心すら蝕まれた人間だ。

お前もそれを分かっているんだろう？

なのにどうして、そんな笑顔で、そんなことが言えるんだよ。

戦いのことしか考えられない人間に、どうして人の命を託すことができるんだよ。

なあ、梢よ。

お前は俺に、一体なにを期待しているんだ？

隣の教室から順番に中の様子を窺い、三番目の教室から視線を離すと、梢が視線で合図を送ってきた。それから、拳銃を持った手で次の教室を指し示す。

どうやら、透視能力とやらでなにか異変を見つけたらしい。

その視線に頷き……梢の深紫の瞳を見るたびに思いだし胸に広がるのは自己嫌悪の感情。

それとは反対に、戦いの匂いを嗅ぎ取り否応なしに昂る心臓。

それが余計に自己嫌悪の感情を高め……興奮を覚える心がそれを薄めていく。自分自身を責める感情すら、敵意や殺意、そういった負の感情に塗り潰され、心が黒く黒く染まっていく。

いつそ本当に、完全に狂えてしまえるんなら、楽なんだろうな。

期待と嫌悪。渴望と絶望。

ないまぜになった感情を抑え、俺は次の教室を覗いた。

それまでの整然と机が並んだ教室と違い、その教室はすべての机が教室の端に積み上げるように並べられていた。そうしてできた、教室中央の開けた空洞。その中心にはぽつんとひとつだけ、教卓と……その上には、遠目ではなにが書いてあるのか分からないが、白い紙が一枚。

どうやらこの教室が、当たりのようだな。

そう判断し、教室に足を一步踏み入れた瞬間——他の場所とは明らかに異質なものを感ずる。

空気が変質している……と言うより、まるで空気が塗り替えられたかのような、そんな感覚。まるで鉛のように重く、ヘドロのように肌にへばりつく空気。質の悪い油絵の具を肌に塗りたくられたら、これに近い気分になるかもしれない。ひどく重く、匂いさえ感じず、しまいそうなくらいに不快な空気。

その中でもひしひしと感じられる、その不快感の発信源。

その気配に、心臓が一際大きく鼓動する。

身体のコに血液が集まるのを感じつつ、一步、また一步と教壇に近づく。

そうして、教壇までおよそ二メートルの距離にまで来たところで、ふと、視線を感じて、俺はそちらに視線を向ける。

その先は、天井。

意志よりも先に身体が戦いの気配を感じ取り、臨戦態勢に入る。

「戦人君！」

警戒しろ、という意味の込められた梢の声。

その瞬間に、俺の心にこびりついていた自己嫌悪の感情が、完全に霧散した。

そして——戦端は開かれる。

天井をへばりつくように這う女学生、そのうちの一人と視線が交錯する。

気付けば俺は、三人の女学生に囲まれていた。その三人は一樣に先程の女学生と同じ獣の表情を浮かべ、四つん這いでこちらをねめあげる。ただし女学生達がいるのは天井で、俺が足を付けているのは床。その姿に、俺は付いているハズのない四本の足を幻視する。

四肢を広げ天井を這い回る姿は、獣と言うよりは——蜘蛛。

巢を張らず、八本の足で歩き獲物を捕まえる蜘蛛のようだと、俺はそう思った。

この中の誰かが斎藤の友人の彼女なのかもしれない。

もしかしたら、この中の誰かがクラスメートなのかもしれない。

少し前まで考えていたことが頭の中からかき消える。

そんなことはどうでもいいと、心の底から思った。

心はすでに、黒く暗い感情で埋め尽くされていた。

身体の中から湧き上がる熱量を炸薬にして、俺は最初に天井から飛びかかってきた女学生を殴り飛ばした。

御薙流《撃水・月》。

中国拳法で言う？拳——近代格闘術に例えるとアッパーカット——の動きを起源とし、それよりも更に上に撃ち上げる、対空迎撃の意味を持たせた一撃。振り向き様に腕を横に薙ぎ、背後から奇襲した女学生を弾く。《薙土・嵐》。腕を一本の棒……薙刀に例え、複数の相手を薙ぎ払うことを念頭とした動作。間髪を入れずしゃがみ、三人目の頭上からの奇襲を右手で受け流すのと同時に、バランスを崩し落下途中の胴体に一撃を加える。《守火・流》。

——普段の俺ならば、絶対に反応できなかった。よしんば対応できたとして、前、背後、頭上と三者別々の方向から攻撃してくる相手にカウンターをスムーズに叩き込むのは不可能だった、と思う。やっぱりそうだ。

骸骨侍のときと同じ。本物の鉄火場で、俺の身体能力が向上している。

普段では絶対にできないことができると、そう確信できる。

それを可能にしているのは……おそらく、身体の奥から湧き上がる熱量。全身の血液が身体の芯に集まり、別のモノに創り変えられ、熱を生み出しながら全身へと運搬される。それが連鎖反応的に続き、それまで以上に全身の筋肉を活性化させる。

相手に一撃を叩きこむたびに。

あるいは、身体に痛みが増すことに。

身体は更なる戦いを求め、爆発的にエネルギーを生産する。

全身が焼け、熔けてしまいそうなほどに俺の身体を蹂躪する熱が、心地良い。

このまま戦いに溺れてしまいたいと、敵のすべてを殲滅したいと、頭の片隅にそんな欲望が生まれ、それを俺の意志で否定する。

俺が本当に望んでいるのは尋常の勝負。

見境のない、悪鬼のような戦いではない。

だが、それなのに、俺の身体は反応し、求める。

戦いを。

人間としての欠陥。その後ろに控える、本物の狂気。敵意ではなく、悪意。

それを俺は噛み殺ながら立ち位置を調整し、三人を正面に見据える位置に陣取る。

俺のことを待っていたかのように、女学生達も四本足……いや、八本の足で立ち上がる。人間が持つ四肢と、半透明の四本の細長い足。幻視だと思っていた蜘蛛の足が、いつの間にか本当に生えている。

このまま、糸でも吐くんじゃないだろうな。

……あながち、冗談にならないかもしれない。

相手の実力は未知数。こつくりさんのせいで蜘蛛になった女学生。その四肢……八肢の先に見えるのは、半透明の爪。それが動くたびに床を力チカチと鳴らすことから考えて、半透明な見た目に反して相当硬いのだろう。

これは、見解を改めないといけないな。

がっかりだ、なんてとんでもない。

「戦人君！」

俺の横に、銃を構えた梢が並ぶ。

その声は撃鉄。激情は炸薬。

「——勝負！」

気合い一閃、放たれた弾丸のように、俺は飛び出した。

女学生達もそれに対応し、両腕を振り上げる。

俺は腰に下げていた銃剣を抜き、そのままの勢いで振り上げる。振り下ろされた腕と銃剣が交錯し、ガキンと硬質な音が生まれる。半透明の蜘蛛の脚が形作られた腕、その先にある爪は想像以上に硬く、銃剣と二本の腕で鏝迫り合う。

だが、すぐに俺が力負けた。ぐぐ、と腕を押しこまれ、銃剣が力チカチと小刻みに震えながら押し返される。トランス状態と言うのだろうか、女生徒は想像以上に力が強い。

だから俺は、力をふつと抜き、それと同時に素早く後ろに二歩下がった。

女生徒は鎧迫り合い、俺を力で打ち負かそうとしていた。異常に膨れ上がった全身の力をすべて注いでいて、その状態で、その力を支えていたものがなくなればどうなるのか。

支えを失った両腕は勢いよく振り下ろされ、その硬質な爪と俺を上回る腕力でリノリウムの床を穿つ。

馬鹿正直に力をぶつけ合うことだけが勝負じゃない。

鍛錬の後に積み重ねられた技術、そして知恵と閃きを駆使する戦術。それも含めた総合力を競う、それが戦いなのだ。

だからこの勝負は、俺の勝ちだ。

「ふっ！」

息を吐き、緩から急へ。

相手の体勢を崩すために脱力した身体に力を込める。足首から下半身、腰、上半身と順番に、そしてその動きを連動させる。その動作はほぼ一瞬。静止状態から一瞬でトップスピードに加速する技術……古流武術で言う縮地法の応用技術。極めて短い時間での精密高度な力の運用、それが自分でも驚くほどに上手くいく。いつもよりも研ぎ澄まされた神経が、指先から爪先まで、末端の僅かな感覚までも正確に情報を伝達する。高速回転する頭がそれらの情報を演算し、溶岩のように重く熱を持った血液が必要な場所に必要な量だけ

エネルギーを供給し、肉体に限界以上のパフォーマンスを発揮させる。そしてそれらの情報と生まれたエネルギーが、俺の身体を加速させる。

床を穿った女生徒が爪を引き抜く直前に、俺はその横をすり抜けた。

「戦人君！」

残りの二人の女生徒の動きを、後方から梢が妨害している。

女生徒達が動きを取り戻す前に、俺は教室内を一気に駆け抜け、教室の中央、机の上に置かれたこっくりさんの紙に銃剣を突き立てた。

途端、パキンと、空気を割るような高い音が聞こえ……それまで激しく動いていた女生徒達はその動きを止め、崩れるように床に倒れる。その身体に生えていた脚や爪も消え、獣のような気配もない。彼女達は床に倒れたまま、それまでの形相が嘘のように穏やかな寝息を立てていた。

まるで、酷い悪夢だったと言わんばかりに。

「……終わったの、か？」

「うん。そうみたいなの。こっくりさんの核を破壊したから、彼女達に取り憑いていたモノ達が姿を維持できなくなったの。……お疲れ様、戦人君。お手柄だよ」

こっくりさんの紙ごと貫かれた机から銃剣を向き振り向くと、梢

が俺を笑顔で迎えていた。

警戒心のないその表情を見て、終わったのだということを悟り、身体から熱が抜けていくのを感じる。戦闘態勢の解除。肉体が徐々に平常時のそれに戻っていく感覚。全身の筋肉から力が抜け、灼熱のような血液が冷やされる。それを、名残惜しいと感じる。

戦闘時に活性化する身体を異常だと思いつつも、俺はすでに二回目のものでそれを受け入れていた。

いや。

戦うことに都合の良いこの体質を、俺は好ましいとすら感じていた。

これから戦うことが増えれば、この体質に世話になることも増えるだろう。

そう。今日の戦いは終わり、それはやはり名残惜しい。だが、まだ次がある。それが終わっても、その次が。今回はそこまで大した相手じゃなかったが、もしかしたら次はもっと強い相手かもしれない。

これまでの生活ではありえなかった、戦いの予定。次がいつ訪れるかは分からないが、その日はそう遠くないうちに必ずやってくる。

その事実——次の戦いに思いを馳せ、俺の心は暗い歓喜に打ち震えていた。

「明美！」

教室の入口近くに立っていた梢を半ば押しのけるようにして、それまで後ろに控えていた斎藤が床に眠る女生徒達に駆け寄る。

ああ、そう言えばこいつもいたんだったな。

他でもない、自分の友人の彼女のために。

ほとんど他人と言えるような相手のために、こんな場所に残ったこいつは……ある意味、大物なのかもしれない。少なくとも、俺なんかよりはよっぽど上等な存在だろう。

俺には誰かのために戦うなんて、できそうにもないからな。

……そんな俺が公安零課に存在なんて、本当に許されるのかね？

「梢、この女生徒達は大丈夫なのか？」

「多分眠っているだけだから、問題ないと思うの。重傷の子もいるけど、急所は外してあるし、しばらく放っておいても問題ないくらいなの」

「そうか……」

「……明美、じゃない」

俺が呟いたのと斎藤が呟いたのは、ほとんど同時。

なのにその僅かな言葉に秘められた重大性は、間違いなく俺の耳に届いていた。

そして――

「戦人君、外！」

反射的に教室の外に視線を向けた。

校庭に面した窓、換気のために開けていたのか――気付けばそこから、女生徒が飛び込んでいた。その表情は間違いなく獣の表情、四肢は蜘蛛。位置取り的に窓に近い斎藤に飛びかかろうとしていて、しかしその斎藤の身体が射線上にあり、梢では咄嗟に手が出せそうにない。いや、それ以前に、どうしてまだ取り憑かれた女生徒が残っているのか。まだ戦いは終わっていないのか。まだ、戦う相手が残っているのか。残り僅か二、三秒で斎藤が襲われる。そこに戦う相手がいる。

一秒にも満たない刹那の間に、俺の脳裏を様々な思考が駆け抜ける。

緊急事態だと俺の身体は認識したのか、あのときの……骸骨侍に斬られる直前のように、なにかもが異様に遅く感じる。先程の戦闘時よりも更に高速演算を行う頭が、一瞬の間に生まれた無数の思考と現状判断を同時に処理する。十重二十重と折り重なられた情報と感情が瞬時に分別され。

気付けば俺は斎藤の身体を押しつけ、収めていなかった銃剣を前に突き出していた。

その行動はフル回転した演算機能が俺自身の意志を完全無視し導き出した結論、俺の意志の関与しない、いわば反射行動で。

だから、その結果起こった事態を俺が正しく認識したのは、それが為されてから数秒の時間を要し。そしてその結論を俺が受け入れるために、そこから更に数秒の時間が必要だった。

「あ……」

手にかかる、生温かくてぬるりとした感触。僅かに香る鉄錆に似た匂い。突き出した手から伝わった感触はまるで水の入った袋を針で突き刺したかのようなもの。突き抜けるまでの途中に、なにか硬いものを擦ったような感覚もあった。貫通後、二、三度ビクビクと大きく震えが起こり、それからはずっしりとした重量が押し掛かる。

視界は塞がれていないのに、なにも見えなくて……見たくなくて。

だけど確かに俺の視界に映ったのは、苦悶の表情を浮かべていた女生徒の、残されたモノだった。

——やってやったぞ。ざまあ見る——

「っ!?!」

思わず手を引き、銃剣をそれから引き抜く。肉を再び引き裂く感触と、なにか硬いものを擦り傷つけるような感触。物言わぬそれは俺の視界に映ったそのときの表情を崩さぬまま、糸の切れた操り人形のようにいともたやすく地面に崩れ落ちた。ゴトリと、頭をしたこま床にぶつけたようだったが……そんなことを異に解する者は、この場には誰として存在していなかった。

「……………」

俺がなにをしたのか。僅かになにを思ったのか。

本当は理解している。だがそれを言葉として結論付けることを、心のどこかで拒否している。

だから俺は、かつて人であり、獣であり、蜘蛛でもあったそれを呆然と見つめることしかできず。

「……ここは、敢えておめでとうと言わせてもらっつ」

「……どうして、そうなるんだよ」

だから俺は、この場にそぐわない幼い声に、明らかに異質な言葉を投げかけられたというのに、俺はそんな言葉を捻り出すのが精一杯だった。

「人を殺したことがある人となない人の間には、超えられない壁がある。その壁を超えることは中々に難しく……それが一生できない人もいるの。……だからここは敢えて、おめでとうなの」

梢の言葉に、改めて俺がしでかしたことの重大さを自覚する。

臍腑に鉛でも流し込まれたかのような、嫌な感覚。

「最初に言ったよね。『私達には、人命救助は義務付けられてない』って。私達が相手にしているのはそういう相手で、それってつまり、それができない人間では到底やっていくことはできないってことなの。……戦人君がしたことは咎められない。私達の規範ではそれは正当防衛の範疇で、緊急回避が認められることなの。だから、心配

することは無いの。あなたは、なにも悪いことはしてないのだから」

まるで悪いことをしてしまった子供を安心させるかのような口調。

その言葉に、梢に説明された公安零課の決まりが思い起こされ、梢の説明の中で唯一混じっていた、梢の主観とも言つべき言葉を、俺は思い出した。

「それって……そんなのって……！」

ああ、そういうことだったのか。

残酷なことって——こういうことだったのかよ！

「そして私が期待していた通り。戦人君は必要になれば、相手を躊躇いなく殺すことができる類の人間なの」

「どうして、そんなことが分かるんだよ」

「見て分からないかな？ 斎藤君のこと」

その言葉の意味を掴めず、俺は斎藤に視線を向ける。

俺が押しのけてから少しも動いていないのか、斎藤は尻もちをついたままの姿勢で俺のことを見つめている。問題は、その身体が小刻みに震えていて……その股ぐらの部分に、黄色い水溜りを作っていたことだろうか。

「人が殺されるところを直接見ただけで、普通はこうなるの。ゲロ吐かないだけ、斎藤君は気丈だけどね。分かるかな？ 人を殺すっ

て言うのは、そういうことなの。……で、戦人君。自分で気付いてる？ 他にも方法があっただろうに……戦人君はあるとき真っ先に剣を突き出した。気付いてなかったのかもしれないけど、その行動に、躊躇いは少しも混じってなかったよ？ ねえ、戦人君。当事者である君はどうして——そんなに、平気な顔をしてるの？」

言われてみればそうだ。

あの状況、斎藤を突き飛ばして……それから自分の身を護るにしても、相手の攻撃を往なすにしても、他にも方法があったハズだ。

なにより、梢の言葉の通り、俺は剣を突き出すことに……相手を殺してしまうことに、躊躇いなんて微塵も感じちゃいなかった。

それどころか、俺は……！

「……………」

その事実には、言葉も出ない。

「分かってもらえたようで良かったの。……さて。こっくりさんの核を破壊したのに、まだ取り憑かれている子がいるってことは……多分他の場所でこっくりさんをしていた子達がいるってことなの。迂闊だったの。もしかしたら、相乗効果で、今回の事件が発生したのかもしれないの」

言葉でない俺を気にせず、梢は事態を分析する。

その言葉すら、俺は冷静に聞くことができて。

そして——心のどこかで、まだ戦う相手がいることを、喜んで
いた。

「だから……戦人君。もうひとつのこっくりさんの核を探すの。多
分同じ階の別の教室にあるハズだから、すぐに見つかるとは思っ
け
ど」

「だ、だけど……」

「戦人君なら、大丈夫なの。君は自分が思っている以上に冷静で、
頭もキレるの。だから、任務の遂行は可能なの」

「なにを、根拠に……」

「実のところ、戦人君、そんなにショック受けてないよね？」

その言葉に、脳天を撃ち抜かれたかのような衝撃に見舞われる。

そうだ。確かに俺は女生徒を突き刺して、嫌な気分になった。こ
の世の終わりとは言わないが、それに近い絶望のようなものを覚え
たような気がする。

だが、それだけだ。

斎藤のように腰を抜かしたり、漏らしたりしないし、梢が言うよ
うに吐瀉したりもしない。

ただただ、嫌な気分を味わっているだけ。

人を殺したということに対して、俺は俺が思っていた以上に、大

したショックを受けていなかったのだ。

「行くよ、戦人君。ついてくるの。あなたが望んだ闘争はまだ、終わっていないの」

言い、梢が俺に背を向ける。

俺はその言葉を受け、改めて斎藤と、もうピクリとも動かない女生徒だったものを一瞥し。

それから後はただ、梢についていくことしかできなかった。

5・芹沢梢

吹きさらしの風が、身体を弄る。季節はまだ四月の終わり、昼間は日差しもあり大分温かくなってきたとはいえ、夜間はまだ冷える。それが、風を遮る物のないビルの屋上で、しかもここは東京湾に浮かぶ巨大人工浮島群の上に建造された都市なのだから。身体から容赦なく体温を奪っていく、僅かに潮の香りのする風。それを俺は、ネオンに煌めく街の光景を眺めながら甘受していた。

「……………」

上着を着た上でも寒いが、未だ熱の残る頭と身体を冷やし、考え事をするには丁度いいと思う。

公安零課の部署が存在する公安本部、その二〇階建ての建物の屋上。

手入れが甘いのか、少し錆の浮かんだ手すりにもたれかかり、街の光景を眺め…………そのままの体勢で、おおよそ二〇分が経過していた。

時刻は夜の九時を回ったところ。もう今日の任務やその後処理などは終わっていて、帰っていいとは言われているのだが…………なんとなく、家に帰ることが躊躇われた。

「……………はあ」

ため息を零すのは、ここに来てから何度目になるのだろうか。

「『あなたは、なにも悪いことはしていない』……か」

その言葉を思い返すのは、もう何度目になるのだろうか。

人を殺すということを、覚悟していなかったわけじゃない。俺が望む戦いを求め続ける限り、そういうことはいつか起こり得ると思っていたし、もしそうなってしまった場合、その責任を放棄せず、きちんと背負う覚悟もあった。現代の道徳観に馴染めない、人間としての欠陥を抱えた俺でも、人の命はそれだけ重いものなのだと分かっている、つもりだった。

だが、いざ人を殺してみても、気付いた。

人を殺すということは、自分でも驚くほどに………どうということはないかった。

人を殺すということに、俺は躊躇いも罪悪感も覚えていなかったのだ。

それどころか……いや、止めよう。これ以上は、まだ考えられない。

「まあ、そうなんだろうけどさ……」

俺がしたことは許されることではない。それは分かっている。

だが、それを受け止めて、俺の心はほとんど痛んでいない。

俺が殺してしまった女生徒を悼む気持ちはある。

だが、そのことに俺の心が囚われることはない。

心に残ったのは、ただただ嫌な気分だけ。それも、次の戦いを求める心にほとんど塗り潰されていた。戦いが終わった今でも、嫌な気分は残っているが……そのせいで、斎藤のように腰を抜かして失禁したり、梢が言うようにゲロを吐いたり、人の命を奪ったということに囚われ、うなされることはないだろう。

俺は、俺自身のことを予想外に分かっていなかった。

欠陥を抱えた人間だとは思っていたが……まさか、ここまで狂ってしまっているなんて。

「いつそのこと、誰かが責めてくれればな」

自嘲気味の声が漏れる。

悪いことをしたのに、それを自分で悪いことだと分かっている、そのことで自分自身を諫め、断罪することができない。誰かが俺のことを責めてくれればいいのに、俺のことを責める人間は、公安零課には誰一人としていなかった。

悪いのに、悪くない。

宙ぶらりんの気持ち。

人を殺すことを、なんとも思えない心。

いつから、俺は壊れてしまったのだろうか。

斎藤に絡まれ出したとき？

決闘を申し込み続けて、それを断り続けられ、戦いを諦めたとき？

新しいものの好きの祖父に着いて、このいざなみ市に越してきたとき？

両親が死んで、師匠である祖父の家に転がり込んだとき？

それとも……俺が生まれた、その瞬間から？

「俺は……」

俺はいつから、人を殺して平気な人間になったのだろうか。

「……まあ、言うほど、悲しんじやいないんだけどな」

結局のところ、そこなのだ。

人並みに悲しめないことを、自分を責められないことを、俺は嫌悪している。

戦いを求める妄執と同時に感じていた、現代に到底馴染めないその心を嫌う気持ち。否応なしに暗い感情に支配され、そのまま浸食されてしまいそうな心。人殺しにシヨックを受けず、大したことがないと感じてしまう心が、嫌だった。

自分が、まともな人間ではないのだと思い知らされて。

この街の中で、一人だけ取り残されているような気がして。

こんな人間がこの世界に存在してはいけなのではないかと、
そう思ってしまった。

時代遅れがどうか、最早そういう問題ではない。

俺は、俺のそういうところが、堪らなく嫌いなのだ。

「ああ、やっぱり、ここにいたの」

ひょう、と一際強い風が吹いた。

「早く帰らないと、家の人心配するよ？ 警察署にいるのに家出
人で通報されるのって、なんて言うかすごくアホみたいだよ？」

そう言いながら、彼女——芹沢梢は、手すりに縋ったままの俺の
隣にまで近寄っていた。

「それとも……人殺しだから家に帰れないとか、そういうこと考
えるの？」

「いや、そういうわけじゃないんだけどさ……」

そして、俺の隣で、俺と同じように少し錆びた手すりに縋り、と
もすれば無神経とも取れる言葉を投げかけて来る。

「……悲しんでないから、家に帰り辛いんだよな」

だが今はその無頓さが、どこか心地良かった。

「だけど戦人君の家族は、今の戦人君を拒絶したりはしないと思うよ?。」

「……梢は、俺の家庭環境、知ってるんだよね?。」

「知ってるけど……良くわかったの。」

もしかして、俺のことを試してるのか?

神妙な表情を浮かべてるつもりなんだろうが、口の端が笑ってるぞ。

分かってもらえて嬉しい、みたいなこと考えてるんだろうな、こいつ。

だけど俺は敢えてその表情に気付かないふりをして、話を続けた。

「俺をスカウトする前に、身辺調査くらいしてると思ったんだ。それに……。」

「それに?。」

「俺をスカウトしようと思ったのは、昨日今日じゃないな?。」

それは、八雲さんにスカウトの言葉を投げかけられたときから、なんとなく思っていたこと。

あまりにも手際が良すぎたのだ。

まるで、俺の求めている言葉を知っているかのような、あの日の

応対は。

「あの日戦人君と出会ったのは、完全に偶然だけだね」

一見的外れなような答えが、俺の問いかけを肯定していた。

「だけど、それと戦人君が今悩んでることって、なにか関係があるの？」

身体を手すりに預けたまま、紫水晶のような双眸が真っ直ぐと俺のことを見つめて来る。じっと見ていれば吸い込まれそうだと感じるほどに澄んだ深紫。いつも冗談めかしたような声を放つ梢のその瞳が笑っていなくて。むしろ大切なことを、俺に語りかけているような気がした。

「……………」

お見通し、ってわけか。

多分、この人達の前で自分を偽ったりするのは、意味がないんだろうな。

この深紫の澄んだ瞳に、すべて見透かされてしまうから。

だから、なのだろうか。

いざなぎ市の中でも有名なお嬢様学校に通いながら、容赦のなさ と得体の知れなさを併せ持つこいつに、杞にすら語ったことのない、俺の心の内側をさらけ出す気になったのは。

「良いのか、って思えるんだよ。こんな俺が……戦うために戦うことを求めて……人を殺すことを大したことが無いと感じる俺が、公安なんて言う、真つ当な組織で戦っていいのかってさ」

俺は欠陥を抱えた人間で、人として大切なものが欠落した人間だ。黒く暗い感情を抱え、いつそれに支配され壊れてしまってもおかしくない人間だ。

そんな俺が、秩序側の組織である公安零課で、誰かを助けるためにという建前の下、戦いを求めて戦ってもいいのか、と。

俺はずっと、そう考えていた。

「真面目だねえ、戦人君は。こっちの利害とそっちの利害が一致してるんだから、そんなこと気にせずに、戦いただけ戦えばいいのに」

だが、俺の言葉に対する梢の第一声は、なんともあっけらかんとしたものだった。

「そうなん、だろうけどさ……」

「実際、そういう人もいるよ？ なにか目的や理念があるんじゃないかって、ただただ、戦うために戦う人。だから、戦人君が引け目を感じることもないんだよ？」

「引け目……って言うかさ。……気分が悪いんだ。動機が不純なよな気がして。こんな俺が公安零課に存在していいのかって、そう思えて、な。」

そういう想いが強くなっているのは、あいつの背中を見たからなのだろうか。

愚直で、自分を曲げることができなくて、常に突っ張っていて。その上で、自分とはほとんど関係のない誰かのために戦おうとした、斎藤という人間。その、無謀だと分かっていても最後まで自分を曲げようとしなかった男の背中を見てから、思うようになっていた。

人間として欠落した俺は、この世界に存在していても良いのだろうか。

戦いという害悪を求める人間は、果たしてこの世界に存在することを許されるのだろうか。

「戦人君。できれば、思ったことを正直に答えてほしいの。戦人君は……初めて人を殺してみて、どう思った？」

「……正直、気分の良いものじゃないな。だけど、それと同時に、自分でも驚くくらいに大したことがないとも思った。……それどころか、やった、って、少しだけと思ったよ。敵を斃したことを、喜んだ。……そんな自分が、心底嫌になる」

こいつの前で自分を偽ることは無駄であり、意味が無い。

そう思うからこそ——そしていつの間にか生まれていた、梢への信頼感からか——俺は言われた通り、嘘偽りのない率直な感想を梢に述べていた。

「そっか。……なら、大丈夫なの。戦人君はまだまともな方だし、

きつと公安零課でやっていくことができるの」

「どうして、そう思えるんだよ」

「私達は聖人君子じゃないし、必要とあれば人を殺すことが求められるけど……人を殺すことになにも感じなくなったら、それが楽しむようになったら、それは人間を辞めてしまっているの。躊躇いなく人を殺せる、だけど進んで殺しはせず、なるべく生存させる。それが私達に求められていることなの」

「……………」

「人を殺して罪悪感を覚えない、必要とあれば人を殺すことができる。だけど、気分は悪い。それで十分なの。人間じゃない存在を相手にするからって、私達まで人間を辞めてやることはないの。私達は人間なの。それは譲らなくていいし、絶対に譲ってはいけなかったなの」

「そうか……………」

私達まで人間を辞めてやることはない、か。

梢の言わんとしていることは分かるし、共感もできる。

だが、それで納得できるかというと……それはまた、別の話だ。

どう取り繕おうと、俺が人を殺しても悲しめないことに変わりはないのだから。

「…………戦人君。底抜けのお人好しの話をしてあげるの」

「は？」

唐突な梢の申し出に、俺はつい頓狂な声を出してしまった。

いきなり何を言いだすんだ、こいつは？

「昔々あるところに、爆弾の大好きな一人の男の人がいました。その人は爆発が大好きで、大好きで、好きすぎて願いました。『ああ、神様。どうか、好きな場所に好きなように爆弾を設置する能力をください』……強い想いがそうさせたのでしょうか。皮肉なことに、その願いは叶えられ、彼は人間を辞めて、妖精さんに生まれ変わりました」

俺の疑問を余所に、梢は話を続ける。

その声は枕詞にあるように、昔話を語るときのような、ゆっくりとした口調だった。

ただ、その内容はなんと云うか、かなりぶっ飛んだ内容のようだ。爆弾なだけに。

「爆弾大好きな妖精さんとなった彼は、嬉々として日本中に爆弾をばら撒きました。ただばら撒くだけならともかく、仕掛けて一年以上放置してから爆破……なんてこともあったせいで、被害を未然に防ぐことは困難で……いつしか彼は、その手口と仕掛け方、そして何より犯行声明にされていた署名から『踊る爆弾妖精』なんて呼ばれ、都市伝説として語られるようになりました」

……ん？

似たような話を、どこかで聞いたことがある気がする。

確かアレは……俺がこのいざなぎ市に越してくる前、何年か前に流行った、連続爆弾魔、通称『踊る妖精』……だったかな。高度な時限爆弾、無数のトラップ、それに場所を選ばない残忍さから、当時から話題になっていたハズだ。今でもたまに語り草になるくらいだからな。

でも確かそいつは、何年か前に捕まってなかったか？

「だけど、悪いことは長続きしません。その悪い妖精さんは正義の味方に捕まりましたが……その時点ですでに、被害者の数は四桁に到達していました」

梢の話を聞きたびに、脳裏の底に眠っていた記憶が呼び起こされる。

被害人数もそうだが……それよりも、生存人数がヤバいんじゃないかったか？

そう、その『踊る爆弾妖精』に狙われた現場で、未だ生き残っているのは、僅か一人だとか。

「さて。ここからが、この話の肝なの。……世間には認知されていませんが、実はその悪い妖精さんには、一人の娘がいました。その娘には生まれつき不思議な能力があつて、いろんなものを『見通す』ことができました。そして、本人に悪気はなかったのですが……結果として、その子は悪い妖精さんの片棒を担ぐことになりました」

「……………」

「悪い妖精さんが捕まり、すべてが終わった後で……その娘さんは、悪い妖精さんの手にかかって唯一生き残った子の下へ謝りに行きました。その子は生き残ってはいますが、悪い妖精さんのせいで家族も、大切なものも人も、将来も夢も何もかもを失い、死んだ方がマシって言えるような状態でした。……その状態で、その子は、謝りに来た妖精の娘に、なんて言ったと思う？」

その問いかけに、俺は答えることができない。

答える内容も分からなかったし、声を出すこともできなかった。

俺が口を挟んではいけない。そんな気がしたのだ。

「『あなたのせいじゃない。だから、そんなに悲しまないで。自分を責めないで』……って、言ったの。なんと、聖母の如き慈愛をもったその子は、悪き妖精の娘の懺悔を受け入れ、そのすべてを許したのです」

めでたしめでたしなの、と梢は物語を締めくくった。

子供に昔話を語るときのような、丁寧で穏やかで、ゆったりとした口調。それを語る梢の表情も穏やかなもので、その内容に反して本当に昔話を聞いているかのような気分にさせられた。

「……冗談じゃないの」

そして、その雰囲気を作り出したのが梢ならば、それを壊したの

もまた、梢だった。

「そんな簡単に許されてたまるかっての。私は、断罪して欲しかったの。あなたが悪い、あなたのせいだ、そう責めて欲しかったの。知らないうちにいろんなものを奪った私に罰を与えて欲しかったの。けど現実はそのようじゃなかった。事情を知る数少ない人は私に同情したし、罪を責めるべき被害者の人達もみんな死んで……唯一の生き残りの子にまで許されたら……私は、誰に罰してもらえばいいの？ 誰に責められればいいの？ 誰のために、罪を償えばいいの？」

それまでの口調とは一転、悲痛な面持ちで語る梢。

「信じられないくらい、底抜けにお人好しだったの、その子は。まったく、私の命を好きにする権利すらあるのにね。けどね……それと同時に私は、すごいと思ったの。そうまでされたのに、相手を許すことができる……本物の聖母みたいなその子に。その心を、魂を、在り方を、羨ましいと……私もそう在りたいと。私はその子に憧れたの」

感情の吐露。

「私は、私の罪が許されることに納得がいかなかった。それなのに、あまつさえ私が絶対に許されたくない子に、それほどまでに悲しませてしまった子に、憧れたの。その魂の在り方を羨ましいと、そう思ってしまったの」

それはおそらく、俺が初めて見た梢の本心。

「だから私は戦うの。私は許されてはいけない人間だから、私が憧れてしまった輝きに近づかないために、戦い続ける。他でもない、

誰にも許されないために」

笑顔の仮面の裏側に隠していた、本当の姿。

「……これが、私が戦う理由なの。どう？ 正義のためでもなんでもない。ただただ、自分のために、私は戦っているんだよ」

誰かに許されるための、罪を償うための戦いではなく、憧れた人間に近づかないための、誰にも許されないための戦い。それが、梢が笑顔で見せる苛烈さの理由。誰にも容赦しないのは、誰にも許されないため。その笑顔の裏に感じる異質さは、自分という存在を押し殺しているから。戦いという欲望を満たすための……自分という存在を前面に押し出すために戦う俺とは対極の位置にある。

それは、一体どれだけの贖罪なのだろう。

梢自身は今、なんということはないと、そういう風を装って語っていたが、その表情も、声も、とても痛々しくて……見ていられなかった。俺のことを見つめる紫水晶のような澄んだ双眸が、泣いているような気がした。

それと同時に、理解した。

こいつも、俺と同じだ。

歪んでいるんだ。人として、大切な何かを失くした人間なんだ。

「戦人君は、自分のことを人間として欠落があると思ってるみたいだけ。それは私も一緒なの。ううん、私だけじゃないの。私達は信念主義信条を持つ過程からソレを実行する過程に至るまで、自己

完結することは不可能なの。みんなみんな、不完全な存在なの」

思う。

梢は本当は、とてつもなく優しいのだと。

どこまでも優しく、だからこそ自分が許せず、それ故に歪んでしまった。人間として、大切ななにかが欠けてしまった。自分が許されることに納得がいかなかった。だからこそ、罪を償うのだ。他でもない、自分自身を許されないがために。

なにが、『戦人君は真面目だね』だよ。

なにが、『底抜けのお人好しの話をしてあげる』だよ。

お前の方がよっぽど真面目で、馬鹿みたいにお人好しで、そしてどこまでも人間くさい善人じゃないか。

「だから、戦人君。そんなに自分を責める必要はないの。私達はみんな、人間として欠陥を抱えている。私達はみんな、極めて自分本位な、戦人君の言う不純な動機で戦っている。むしろ戦人君のそれなんて、可愛いくらいなの」

ああ、そうだな。お前の言う通りだよ。

お前の背負っているものに比べたら、俺の悩みなんて可愛いものだ。

それなのに、こんな俺のことを励まそうと、そんな話をしてくれる。

あまりにも重すぎるものを背負っているのに、それを感じさせない強さを持っている。

きっとその強さは、潔さは、俺には到底持てないものだろう。いや、俺だけじゃない。自分が許されなかったために戦うなんて、こいつ以外にできる人間がいるのか？ 俺には甚だ疑問だね。

人間ってのは普通、自分が許されることを求めるからな。自分で自分を許すことができないからって、そんなこと……そうできることではないと思う。

本当に、大した奴だよ、お前は。

「……急にどうしたの？ 戦人君」

自然と、手が動いていた。

俺を励ますために、懸命に話しかける梢の頭をワシワシと、努めて無造作に撫で回した。

「まあ……約束したからな。この戦いが終わったら、お前の頭を撫でてやるって」

「約束したけど……こういうのは違うの」

「と、言っと？」

「戦人君、女の子の扱いが分かっていないの。女の子の頭を撫でるなら、もっと優しく撫でないと駄目なの」

「へいへい」

仕方が無いな、とため息をついてから、今度はなるべく優しく梢の頭を撫でる。

こうして、改めて頭を撫でてみて気付いたのだが、梢は年齢の割にとっても小さいから、手頃な位置に頭があって祀のそれより撫でやすい。それに見た目が幼い分、周囲から変な目で見られる可能性も低いかもしれない。うん、なんとというか楽でいい。

「……今、なにか失礼なこと考えなかった？」

「……気のせいだ」

頭を撫でられながら、上目遣いで睨まれた。

やっぱり鋭いな、こいつ。

梢の前で下手なことは考えない方がいいかもしれないな。

「……ふふ」

「なにがおかしいんだ？」

「んー。なんて言うか戦人君って、お人好しって言うか、優しいよね」

「は？」

なんというか、デジャビュを感じるな。

少し前に、似たような状況で似たようなことを梢に言われたことを思い出す。

ただ頭を撫でているだけなのに、どうしてもそういう結論が出てくるんだ？

「どこかだよ」

もし俺が本当にお人好しで優しい人間なら、そもそもこんなことで悩む必要がないだろうよ。

だけど、梢と話をしていて、なぜかは分からないが——いくらか、心が楽になったと思う。

なにも、根本的な問題は解決してないんだけどな。

俺は相変わらず狂っていて、人間として大切なものが欠落したまま。まともな道德など未だ身についていないし、人を進んで殺めたとは思わないが、かといって人を殺すことにさしたる罪悪感を覚えることもないだろう。そして俺は、自分がそうであることが嫌なのだ。

その想いは、きっとこれからも変わらない。

俺の歪んだ心が戦いを求め続ける限り、きっとまた人と命をやり取りする機会があり、そして誰かの命を奪う選択に迫られることだろう。そのたびに俺の心は暗く黒い感情に塗り潰され、戦いの中で相手を躊躇うことなく殺して、罪悪感を覚えない自分に嫌悪するの

だ。

そんな自分が、俺は堪らなく大嫌いで。

だけど、梢と話をして。

「俺みたいな戦闘狂が、お人好しで、優しいわけがないだろ」

胸に刺さっていた棘が少しだけ取れたような、そんな気がしたんだ。

6・夜刀祀

「戦人。その表情を見ると……どうやら、悩みは少し解決したみたいだね?」

その日の朝の会話は、俺の顔を見るなり発せられた祀の言葉から始まった。

「ん……まあ、な」

その言葉に、俺は苦笑を浮かべるしかない。

しかも、『少し』解決した、ときたもんだ。

梢に隠し事は通用しないと思ったが、祀は祀で昔から、俺のことを良く見てるんだよな。

それとも、俺はそんなに分かりやすい表情をしているのか?

「なにがあつたのか……は、聞かない方がいいのかな?」

「そうしてくれると、助かる」

公安零課は公式には存在していない組織であるため、その任務内容だけでなく存在そのものに緘口令が敷かれている。その任務すべてが、書類上ではなかったことになっているのだ。だから、俺も祀にその内容を話すことはできない。

祀は昔から頭が良いからな。

俺がなにか話す前になにも聞かないことを申し出てくれたのもまた、俺の表情からなにかを読みとってくれたのかもしれない。

正直な話、俺の身に起こったことを詳しく聞かれないことはありがたい。誰かに話すことが許されない内容だし、元来俺は説明が得意な方じゃない。それにこのことは、すべてが解決したわけではなく、俺自身の中でも未だ整理がついてないからな。

そうして気を利かせてくれる辺りがまた、祀の良さでもあると思う。

しかし、そう言う祀はその言葉とは裏腹に、どこか寂しそうな表情を浮かべていた。

「……………」

その表情を見て、胸が締め付けられるような、なんとも言えない気分になる。

事情があるとはいえ、幼馴染に公然と隠し事をしているわけだからな。

祀も俺のことを心配してくれていたのに、それを話さないと言うのは不誠実なことだと俺も思う。どちらにしろ、まだ俺の中でもまとっていないのだけれど。

それに、例え不完全な言葉でも、いつか祀に話を聞いてもらいたいと、俺はそう思っていた。

「すまん、祀。だが、このことはまだ解決したわけじゃないし…

…俺の中でもまだ、結論が出てなくてな。だから、まだ話せそうにないんだ」

だから俺は、詫びというわけじゃないが、いつもよりも丁寧に心掛けて頭を撫でた。

「……もちろん、戦人が聞かれたくないなら、無理に聞いたりはないよ。ただ、いつか……戦人の心の整理がついたら、ボクにも話してくれると、嬉しいかな」

いつもよりも何故か穏やかな声で話しながら、祀は頭に触れている俺の手を両手で包みこむように握り、自身の胸の前にまで持ってきた。加えて、祀よりも俺の方が背が高いから、頭を撫でているときに会話しようとする、祀は必然的に上目遣いになる。

結果として、右手を握られたまま、上目遣いで見つめられるかたちになる。

その仕草に……唯一の親友だと言えるこいつの仕草に、ドキリとさせられる。

いつも何気なく会話しているから忘れがちになるが、こいつもまた梢とは別方向にかなり可愛い。本人がユニセクシャルな格好を好むから中性的な顔立ちに見えるだけで、実際に女の子らしい恰好をすればかなり映える。

だからこそ、たまにこうしてそのことを思い知らされると、予想以上に強力な不意打ちになるのだ。

「……お前には、世話になってばかりだな」

そのたびに、なんでもない風を装ってはいるが……内心の動揺は、バレてないよな？

こつちとしては動揺を気取られていないかどうか、気が気じゃないんだよ。

「そうかな。ボクとしては、ボクの方が戦人にお世話になっていると思うのだけど」

「……そうか？」

「そうだよ。戦人が気付いてないだけで」

俺が、祀のためになるようなことなんかしたことがあったか？

祀は頭が良いからな。なにか起こっても、俺がなにか手伝う前に自分で解決してしまうだけの力量がある。日常生活に関しても、祀は友達や助けてくれるような仲間も多いし、そもそも誰かの助けが必要な事態に陥ることがない。

俺程度では、祀の助けになることすらできないのだ。

……自分で改めて考えてみて、悲しくなってきた。

「だから、まあ……お礼ってわけじゃないけど、コレ」

心当たりのない内容に頭を捻る俺に対し、祀は鞆から取り出した二枚の紙切れを差し出した。

それを受け取って、そこに印字されている単語に目を通す。

「……映画のチケット？」

「ああ。先日、ちょっとしたことで手に入れたんだ。けど……見てくれ。期限が今週末までになってるだろ？」

祀が指差した部分に示された有効期限の表示。

それは祀が言う通り、今週末までとなっていた。

「確かに」

「こんなもので悪いのだけれど、もし戦人の予定が会うなら、有効活用してくれないか？」

「む……」

映画か。

正直、俺はこういう娯楽には詳しくないんだけどな。

今まで映画を観た回数も、両手の指の数で収まるくらいしかない。その内容も、三国志だったり戦国時代だったり、人と人が直接ぶつかり合っていた時代の戦争関連のものばかりだ。あとは、幼少期に観た子供向けアニメが少々。

古代戦争関連は一応チェックしているが、今はそういう類の映画は放映されていないハズだ。

けれど、祀の好意を無下にするのも悪い気がする。

さて、どうしたものか……。

「……そうだ。せっかくだから、祀。俺と一緒に行くか？」

思いつきを言葉にしたものだが、意外と悪くない提案な気がする。

祀はいろいろなことを知っているが、それは世間の流行り廃りなんかにも精通している。それにセンスも良い。だから、祀ならきつと、面白い映画を知っているだろう。

それに、他に誘う相手もないしな。

「ボクは構わないが……他の友達を誘った方が良いんじゃないのかい？」

「……お前、俺に映画に誘うような友達がいると思うのか？」

「……すまない」

「真顔で謝るな」

俺が悲しくなる。

「だけど……本当にいいのかい？」

「だから、俺がお前に着いて来て欲しいんだよ。それとも、俺と一緒に映画は観れませんか？」

「いや、そういうわけじゃないんだ。……ただ、ボクがチケットを

あげたのに、結果としてボクもチケットを使用してしまつのも、どうかと思つたんだ」

「俺が良いって言うんだから、良いんだよ」

相変わらず真面目と言うか、なんと言うか。

流行に聡い割に義理堅いんだよな、こいつは。

「そう思ふことなら、喜んで。……ただし、自分から誘つたからには、ボクのことをエスコートしてくれよ？」

「……善処する」

「ふふ。期待しているよ、戦人」

なにか面白い悪戯を思いついた子供のような笑顔を浮かべる祀。

その頬が、いつもよりも朱に染まっているように見えるのは……俺の見間違いだつたのだろうか。

そして、約束の日。

待ち合わせ場所兼目的地である、映画館の前で。

「……………はあ」

俺は携帯電話のディスプレイから目を離し、盛大なため息をついた。その声を聞いてか、俺のすぐ傍を通りすぎた男女が微妙に顔をしかめる。

その、手にした携帯電話のディスプレイに映し出されているのは、ほんの一分前に祀から送られて来たもの。

『件名：すまない』

おはよう、戦人。急な話で申し訳ないのだが、どうしても外せない用事が入ってしまった。

だから、今日は映画館に行けそうにない。この埋め合わせは後日必ずする』

女学生が好むらしい絵文字や顔文字の類が見受けられない、祀らしい簡素な文章。

その文章に倣って現状を簡潔にまとめるなら、祀に貰った映画のチケットが無駄になってしまったということだ。チケットを無駄にしたくないのなら俺一人でも映画を観ればいいのだが、上映案内を見る限り、俺の食指の伸びるようなものはない。例え無料で観れたとしても、貴重な休日の時間を潰してまで観る価値があるかどうかは疑問だった。

かと言って、このままなにもせず家に帰ることも躊躇われる。

さて、これからどうしたものか。

特にしたいことがあるわけでもない。

幸いなのは、ここが第三区であるということだ。

第三区は商業区として建造され、映画館の他にもアミューズメントパークや大型ショッピングモール等、休日を通すには最適な施設が軒を連ねている。この街らしく、最先端かつ多種多様の娯楽施設や商業施設が集結しているため、今では新宿や原宿と並ぶほどの繁華街となっている。

適当に歩いていれば、なにかあるだろう。

なにもなくても、そういう街を適当に散歩してみるのも、たまには悪くないか。

そう結論付けて、適当に歩き出しそうとした、ところで。

人ごみの中に、今日という休日には絶対に顔を合わせたくない男の顔を目撃してしまった。

あの事件の日に別れて以来、因縁を吹っ掛けられることがなくなつたため、面倒事が減つたと安心していただけだが……まさか、こんなところで出会ってしまうとは。

いきなり幸先が悪い。最悪の気分だ。

できれば見なかったことにしたかったが、向こうもすでに俺の存在に気付いてしまっているようで、俺のことを見つめ、ポカンと口を開けている。奴と一緒に歩いてきたガラの悪い数人の仲間達も、

親の仇でも見つけたように俺のことを睨みつけている。

こんなことなら、奴の顔を見た瞬間にすぐこの場を立ち去るべきだった。

「伊藤、三次……」

「斎藤修二だ！」

名前の間違いを修正されるが、そこは問題ではない。と言っか、心底どうでもいい。

問題なのは、こいつ達と出会ってしまったということ。

それはつまり、また、因縁を付けられて喧嘩を売られる可能性が極めて高いということ。

あの、決闘とも言えない下らないことのために拳を振るわなければならぬということ。

「……戦場戦人」

「なんだよ」

「ちょっと面、貸せや」

言い、斎藤は人気の無い路地裏を指し示す。

ああ、やっぱりそうなるのかよ。ちくしょうめ。

こいつ達と顔を合わせるたびに行われてきた、お約束とも言える極めて不愉快な展開。

だが……今日は、少し違っていた。

「そう、警戒すんなよ。ただ、一対一^{サシ}で話がしたいだけだ」

「……どういう風の吹き回しだ？」

その真意を尋ねずにはいらなかった。

これまで俺の顔を見ると喧嘩しか売ってこず、こちらの言葉に耳を傾けようとしなかったこいつが、俺と話がしたいだと？ しかも、一対一で？

その真意が分からず……威圧の意味も込めて、斎藤のことを睨みつける。

「どうもこうも、ねえよ。言葉通りだ」

だが、斎藤はその言葉にも視線にも怯みもせず、その割にはどこか齒切れが悪い。

ただ、その視線や声からは、これまで俺に向けられていた害意のようなものは感じられない。

俺のことが気に入らない。

これまで、たったひとつのシンプルな意志だけを向けてきたこいつから、初めて、それ以外のものが向けられていた。

敵対する意志はない、のだろうか。

「……分かった。話を聞こう」

仮に悪意があったところで、返り討ちにすればいいだけのこと。それが、俺とこいつの関係。今までずっとそうしてきたのだ。

そう考え、斎藤の後を着いて路地裏に向かった。

華やかで騒がしい商業区。文字通りその後ろにある路地裏。まだ午前中だと言うのに薄暗く、ゴミが散乱しており妙な匂いがする。人気のない路地裏だが、微かに喧騒が聞こえてくる。

ある程度路地に入り、人気がないことを改めて確認した後で、斎藤は立ち止まった。

「……それで、一対一^{サン}で話したいことって、何なんだ？」

まともに相對することすら馬鹿馬鹿しく、俺は早く要件を済ませるように言葉を急かす。

予定はないとはいえ、休日の貴重な時間を潰されたことに、俺は多少苛立っていた。

これから斎藤はなにをするのだろうか。

これまでの経験やこいつの性格から鑑みて、今になって一対一の決闘を求めることはないだろう。面子を重視する、オールドタイプの不良だからな。妥当なところで、狭い路地での不意打ちや挟み撃

ちの類か。実際、入り組んだ路地は誰かが隠れられそうな場所は多く、それも不可能ではなさそうだ。俺としても、この狭い場所で前後から責められると苦しいかもしれない。

なにが起こってもいいように、身構える。

対面に立つ斎藤の一挙一動に神経を払い、状況をシュミレーションする。

そんな俺の視線の先で、斎藤は躊躇いがちに口を開き、

「……ありがとう、戦場戦人！」

俺の中で、時間が止まった。

なにを言っているんだ、こいつは。

ありがとう、だと？

それはひょっとして、なにかの暗号なのか？

それとも、襲撃の合図なのか？

だが、それにしては周囲に動きが無い。

「……………どういう意味だ、それは？」

「礼だよ。俺ができなかった……俺の友達^{タチ}の女を助けてくれたことへの、な」

「……なんの、話だ？」

なにを言っているんだ、こいつは？

その意味が理解ができない。

顔を赤く染め、照れ臭そうに頬をかく斎藤の考えが、分からない。

「俺一人じゃ、あいつのことは助けられなかった。そうなれば、俺の友達^{ダチ}は悲しんでただろう。それだけじゃない。お前が助けてくれなければ……その、俺も死んでいた。……お前がいたから、俺達は助かったんだ」

俺の戸惑いを余所に、斎藤は話を続ける。

「俺は、人を一人、殺したんだぞ！」

その言葉に、俺は反論せずにはいられなかった。

確かに俺は結果として、斎藤の友人の女を助けたのかもしれない。だがそれと同時に、俺は女生徒を一人殺している。第一、俺は誰かを助けるために戦ったのではない。

俺は、誰かと戦うために、戦ったんだ。

そう、俺は……！

「ああ。だが、それでも、お前が助けたんだ。……お前が俺達のことを、救ってくれたんだよ」

っ……………！

視界が歪み、思わずたたらを踏んだ。目の前が真っ暗になる。

その言葉に、視線に、思い知らされる。

俺は、こいつには襲われることばかり考えていて……それ以外のことを完全に失念していた。こいつが礼を言うなんて、思いつきもしないほどに……俺は、戦うということに囚われているのだと、俺は戦いしかない人間なのだと、思い知らされる。

「礼なんて言うんじゃない！俺は、俺は……！」

気付けば、叫んでいた。

声を張り上げることで、斎藤の言葉を否定しようとしていた。

俺は、誰かを助けるために戦ったんじゃない。

戦いたいから、戦っただけだ。

殺意。敵意。害意。悪意。誰かに危害を加えるための、ありつたけの負の感情。ねつとりと心に纏わりつく、黒いタールのようなそれに身を任せ、ただただ自分の快樂のためだけに、俺は戦ったんだ。そこに善意もなにもない。

そんな俺が、結果として人を助けたからといって、礼を言われてはいけない。そんなおこがましいことがあつてはならない。

一歩間違えれば、俺は斎藤の友人の女を殺し……そのことに、罪

悪感を欠片も抱かないのだから。

人間として、俺はあまりにも大きな欠陥を抱えているのだから。

この世界には、いてはいけない存在なのだから。

「なに、怒ってるんだよ？　俺は感謝してるんだから、素直に受け取れよ」

ああ、クソが！

いつもいつも、俺の話を聞かない奴だとは思っていたが……それは、こういうときでも有効なんだな！

斎藤の視線に耐えられなくて、つい視線を下げてしまう。

そのことに気付き、苛立ち紛れに拳を握るが、その拳の行き先はなく。

俺はその拳を壁に叩きつけた。

痛い。だがその痛みは快感を伴わず……ただただ、不快なものでふつつつと湧き上がる、どす黒く、重く、どろりとした、自分自身に対する嫌悪感、それは最早憎悪と呼ぶべきほどのもの。

本当に……本当に、自分が嫌になる。

斎藤のように、誰かのために戦うのでもなく。梢のように、自分のために戦うのでもなく。ただただ、戦うために戦いを求めるこの性質が。人を殺すことを躊躇わない、悲しみを覚えない、人間として大切なものが欠落した自分自身が。戦うことに暗い歓びを覚える、この心が。

……怖いんだ。

このまま、心が求めるままに戦いを求め続けたら、俺が俺でなくなってしまうようで。

人を人とも思わない、最低最悪の外道に、変わり果ててしまうような気がして。

この世界から、存在を否定されているような気がして。

口の中に広がる苦いものを感じながら、俺は顔を上げた。

「……おい、どうしたんだ？」

俺の顔を見て、訝しげな表情を浮かべる斎藤。

だが、俺の視線はその後ろにいた存在に釘付けになっていた。

「な……」

思わず、間拔けな声が漏れる。

おいおい、今日はどうなってるんだ？

なにかが起こる前兆なのか？

斎藤の後ろ、路地の出口にあたる場所。

その場所に……古びた鎧を着た骸骨が、あの日と変わらない姿で

立っているなんて。

その姿を見た瞬間、身体中の血液が沸騰したような感覚に襲われた。

心臓が高鳴り、気付けば心の中に渦巻いていた負の感情が払拭されていた。

残ったのは、ただひとつの感情。

戦いたい。

俺の心を容易く支配する、唾棄すべき願望。

そう思ってから行動は、分かり切っていた。

「お、おい！ 戦場！」

呼び止められるが、知ったことか。

俺は、身体の芯から湧き上がる激情に身を任せ、斎藤の身体を押しつけるようにして、骸骨侍の下へと向かっていた。

膝に手を乗せ、乱れた息を整える。

ある程度息が整ったところで、額に滲んだ汗を服の袖で拭う。

それから、頭だけを動かして周囲を確認する。

視界の端に入ったどこかの学校の時計によると、時刻は十一時過ぎ……映画館の前で斎藤と出会ってから、およそ一時間が経過したことになる。

つまり、俺は骸骨侍を追いかけて一時間近く走ったということか。それも、商業区のある第三区から、中央の0区を挟んで反対側にある、第六区のミチザネ学園都市まで。

火照る身体から熱を逃がすために上着を脱いでから、改めて周囲を確認するが、俺の視界にはつい先程まで追跡していたハズの骸骨侍の姿はない。体力には自信があったのだが、一時間も全力疾走はさすがに堪えた。息が乱れ、肺が痛い。

「チッ」

苛立ち紛れに舌打ちをしたところで、骸骨侍は姿を現さない。

折角骸骨侍を見つけたのに、逃げられるばかりでなにもできず、最後には息が切れて見失ってしまった。

悔しいし、惜しい。

あいつを捕まえていれば、俺は……。

「……………」

追いかけて、俺はなにをするつもりだったんだ？

立ち止まり、改めて考える。

戦うつもりだった？

ああ、確かにその通りだろう。俺は骸骨侍を目にして、戦いたい
と思っていた。

それまでの悩みを、自己嫌悪の感情を、完全に忘れてまで。

戦いに囚われている。

人を殺すことを躊躇わず、罪悪感を覚えない、そんな自分を嫌う
感情よりも、斎藤に感謝され自分はそんな人間ではないという感情
よりも、一度敗北を帰した、次に戦えば殺されるかもしれない骸骨
侍と戦いたいという感情が勝り、それに俺の心は一瞬で呑み込まれ
た。

俺は一瞬とはいえ、戦いたいという想い以外の感情を、完全に捨
て去っていた。

どう黒い、俺が唾棄すべきだと思っている感情に、完全に呑みこ
まれていたのだ。

「……はは」

つい、自虐の混じった乾いた笑いが零れる。

これは、人間として大切なものの欠落という程度のことです。

ていいことなのか？

俺は、俺自身のことを、人間だと定義してもいいのか？

こんな心を持つ俺は、本当に、人間を辞めていないと言いきれるのか？

「俺は……」

出るハズのない答えを求め、空を仰ぐ。

雲ひとつない快晴。目が痛くなりそうなくらいに蒼い空。春の陽気は街を照らし、未だ冷たい春風を和らげている。それは長い冬を超えたすべてのものに対する光の祝福。

その祝福の光にすら、俺の存在を否定されているような、そんな気がした。

「……ちくしょう」

自分でも、自分がどうすればいいのか、どうしたいのか、分からない。

悪態をつき、俺は視線を戻した。

「……ん？」

その視線の先、視界にたまたま収まったもの。

そこにあったのは、学園都市区画にいくつか点在している多目的

ホールのうちのひとつ。基本的に三階建てになっていて、様々なイベントに活用できるようになっている。

俺の目に止まったのは、その多目的ホールの入口に立ててある看板だった。

『こつくりさんの会 第一会場』

「……………」

その文面を見た瞬間、俺の中の時間が確実に停止した。

と言うか、いや、流石にそれはないだろう？

胡散臭さ爆発のその文面を、これまでの俺なら一笑の下にし、関心を抱くことはなかっただろう。だが、こつくりさんという存在は、今の俺には到底無視できないものだ。

本当はあまり関わり合いになりたくないんだが……仕方ないよな。

詳しい情報を得るため、看板に近づき細かい文字を読む。

そこに書いてあった文字はある意味予想通りで、こつくりさんを行う集会を今日、この多目的ホールで行うというものだった。第一会場ということは、おそらくこの会場だけでは収まりきらず、他にもいくつか会場を用意しているのだろう。

正直、信じたくはなかったけどな。

「これは、また……………」

言葉が出ないというのは、こういうことを言つのだろうか。

前に祀にこつくりさんのことを聞いたとき、『新興宗教みたいだな』とは言ったが……まさか本当に、宗教的な密会が行われているとは思わなかった。

ここまでこつくりさんは学生達に浸透し、指示されているとは。

「……………はあ」

つい、ため息が漏れてしまう。

こつくりさんの危険性を知っているということを別にしても、そういうおまじないの類を心底馬鹿馬鹿しいと考える俺にとっては、こういった集会に参加する人間のことが信じられなかった。

そこまでして叶えたい願いがあるのだろうか。

それとも、楽をして願いを叶えただけなのか。

……………おそらく後者なんだろうな。

阿呆か。

そんなことで願いが叶うなら、俺はこんなに苦しまなくて済むんだよ。

……こんなイライラする企画、できることなら無視してしまいたいが……そういうわけにもいかないよな。

一応、中を覗いてみるか。

そう思い、俺は会場内に足を踏み入れた。

中に入った途端、異様な雰囲気をするのか、こつくりさん召喚の妙な呪文に気分が悪くなるのか……と覚悟していたが、そういうことはなかった。むしろ、しんと静まり返り、拍子抜けするくらいに人の気配がしない。少なくとも、入口ホールには誰もいないようだ。

誰もいない……と言うよりは、参加者が思ったよりも少ないのか？

しかし、会場を複数借りているからには、それだけの人数が参加するってことなんだろう？

どうして……？

「あれ？ 戦人君？」

自問の声を遮り、背後から聞こえる声。

振り向かずとも分かる。一体、どうということなのだろうか。

会う予定だった祀とは会えず、会う予定のなかった斎藤、骸骨侍と立て続けに出会い……最後には、こんな場所で梢と会うことになるとは。

苦笑を浮かべたまま俺は振り返り、それと同時に梢が言葉を紡ぐ。

「緊急招集があったのはついさっきなのに……もしかして、近くに

いたの？」

「緊急招集？」

視界に入る梢の格好。よく見ればそれは、あの日学校に突入したときと同じような戦闘着。異なるのは、散弾銃やえびら箆を携帯せず、最低限の装備と防具の上からコートを羽織っていることだろうか。おそらく、カモフラージュ用の衣装。服の上からは見えないが、腰にはきちんとホルスターを提げているのだろう。

「……もしかして、連絡をまだ確認してないの？」

非難するような梢の視線に押され、慌てて携帯を確認する。開いた携帯のディスプレイに表示されているのは、公安零課と梢から着信があったことを示す表示。時刻はおよそ三〇分前。どうやら、骸骨侍を追っていたため、着信に気付かなかったらしい。いつの間に

しかし、梢とは合流できたから、結果オーライだろう。

そう思うが、梢には睨まれた。

「駄目だよ、戦人君。私達の任務は、一分一秒を争うこともあるの。緊急招集ってことは特に、ね。今日はたまたま、現地で合流できたからいいけど……これからは気を付けてね？」

「あ、ああ、すまん」

ぷりぷりと怒る梢は正直怖くないが、一応頭を下げておく。

「で、どうして緊急招集なんてかかったんだ？」

それで一応の溜飲は降りたのか、俺の問いかけに対して、梢は答えてくれた。

「公安零課の『予知公安捜査』の人が、予知したの。第六区でなにかが起こるって。だから、手の空いてる人員が緊急招集されたの」

公安零課には色々な人間がいるとは聞いていたが、その簡潔な説明には、突っ込みどころが多すぎた。

なんだよ、『公安予知捜査』って。

いや、多分予知能力者が詰めてる部署だってのは分かるんだが、そんな能力者までいるのか。

他にも霊能力者がいるって言うし、梢自身も透視能力者だし。

しかし、それにしても内容が曖昧すぎないか？

「なにかってなんだよ？」

「細かいことはもう少し詳しい予知をしないと分からないけど、予知捜査の人達の予知は大体当たるの。それで、緊急招集があったのが大体三〇分前、私はたまたま公安本部にいたのと、その場にいた中で学園都市区画に一番詳しいってことで、先遣隊としてここまで来たの」

「それで、妙な看板を見かけて中に入ったら俺がいた、ってことか」

「うん。そんな感じなの」

順次、応援部隊や武装を積んだ特殊車両が到着する予定だよ、と梢は説明を続けた。

俺から見れば、予知なんて言う情報元はかなり胡散臭いのだが、公安零課の人間はそうは考えていないらしい。その情報を元に、まずは梢を先遣隊として寄こし、順次部隊を展開させる。

なるほど、その迅速な判断と行動力は大したものだ。

ということは、この会場に人気がないのは、もう避難が終わったからなのか。今になって思い返してみれば、この会場どころか、学園都市区画自体に人気が無かったからな。きっと、俺が骸骨侍を追いかけている間に、閉鎖や一般人の避難は完了したのだろう。そうでないと、休日とはいえこの学園都市区画全体の人気の無さは説明がつかない。

「……なら、俺達の任務は、これから起こるであろうなにかに對することか？」

「そうなの。だけど、私達は非公式組織だし、まだ避難誘導は終わってないから、一般の人達に見られないように注意してね」

「は？」

「え？」

二人の声が重なる。

なんでそうなるんだよ。

「避難はもう完了してるんだろ？」

「終わってないよ？　だって、ここに来たの、私が一番最初なんだよ。これから避難と閉鎖が始まるところで、まだ避難勧告のひの字も出てない段階なの」

おいおい、どういうことだ？

「それならどうして、この会場も外も、こんなに人の気配がないんだよ？」

「それは……」

俺に問いかけられ、梢は口籠る。

どうやら俺に話しかけた時点で、梢もここにきたばかりであり、また急いでいたためか、周囲の異変に気付いていなかった。そして俺も、避難がとうに終わったものだと考えて、異変を異変だと気付けなかった。

お互いの話を総合してようやく、俺達は現状を取り巻く事態の異常性に気付いた——その瞬間。異様な雰囲気、俺達を包みこんだ。

これは……！

「戦人君！」

俺の名前を呼ぶと共に二丁の拳銃を取り出す梢。

その梢と背中合わせになるように移動し、俺も構える。

いきなり氷水を頭からかけられたような、肌が底冷えするような感覚。

この気配には、覚えがある。

学校に突入し、取り憑かれた女学生と相対したときと同じだ。

単純な感覚から導き出した答えは、幸か不幸か間違いではなかったらしく。

俺達はいつの間にか、あのとときと同じ姿の女学生達に取り囲まれていた。

「……どこから出たんだ、こいつら」

思わず言葉に零れてしまうほどに、その数は多かった。目に見えるだけでも十体以上。ほとんどが女生徒だが、年齢は中学生、高校生……大学生くらいの女性や、男子生徒も混じっている。そして彼女達が浮かべるのは、例外なく獣の表情。蜘蛛のそれに近い四肢は半透明ではあるが、腹部から伸びる四本の四肢も加えて、先日のものよりもはつきりと認識できる。

「余計なことを考えてる暇はないよ、戦人君」

「そうだな」

緊張感の滲む声に、注意は女学生達に向けたまま俺は頷く。

圧倒的な人数差で囲まれ、武器も心許ない。しかも、現状なにが

起こっているのかまったく分からない。先の経験を活かすなら、どこかに存在するであろう降霊の要、こつくりさんの核を破壊するべきなのだろうが……これだけの人数が同じこつくりさんの紙を使っ取り憑かれたとは考えにくい。霊関係については素人の俺でも、そのくらいは分かる。ということは、複数の核が存在するか……さもなければ、俺の知らない方法でこうなってしまうているか、だ。

状況は圧倒的に俺達に不利。

複数のこつくりさんの核が存在するにしても、他のなにかが原因でこうなっているにしても、たった二人で、取り憑かれた多くの女生徒達を相手にしながら対処するのは、いくらなんでも無理がある。

そんな状況なのに、俺の心臓は歓喜に打ち震え、激しく鼓動を刻む。ポンプの役割を過分に果たし、全身の筋肉に血液を送り出す。身体の芯に感じるのは、そこに全身の血液が集められ、熱を持ったなにかに創り変えられるような感覚。激しく脈打つ血液は全身に心臓がいくつもできたかのような勢いで身体中を駆け巡る。

求めて止まない闘争の場の空気にてられ、僅かな空気の動きにも身体は敏感に反応する。

そんな身体に対し、違うと、心の中でなにかが告げ、戦うことを今か今かと待ち構える。矛盾した反応。暗く黒い願望に覆われた心と、心にこびりついて残っている理性とが衝突し、せめぎ合う。

そんなことおかまいなしに女生徒達は俺達に牙を向いた。

俺を攻撃するために近づいてきた女学生を、俺は問答無用で殴り飛ばす。直接打撃ではトランス状態の女学生相手には時間を稼ぐく

らいにしかないかと思っていたが、どうやら打撃でも思っていたより効果はあるらしく、直撃を受けた女学生の動きは明らかに鈍っていた。

耳に届くのは、一定のリズムを刻む発砲音と薬莢が落ちる高い音、そして女生徒達が上げる、妙に音の高い勝鬨かちどきの声。背中ですれらの音を受けながら、俺は襲いかかる女生徒達の爪を避け、嬉々として殴り飛ばす。返り血が拳を染め、僅かに攻撃を受けそこない、服が所々裂け、血が滲む。その痛みすらも心地良い。

一歩間違えれば死ぬ、命と命を賭けた本物の戦い。

俺はその事実にも、間違いなく暗い興奮を覚えていて。

目の前にいる敵すべてを斃ころしたいと、毀こわしたいと、確かにそう思っていた。

「戦人君、このままじゃ、キリがない！」

俺と同じように女生徒達の攻撃を捌きながら、梢が声を上げる。

すでに俺達の周りには、一〇を超える女生徒達が倒れていた。取り憑かれたものを抜つたのではなく、ただ動きを封じただけの対処であり、根本的な解決にはなっていない。それなのに、俺達を襲う女生徒達の数は減るところが増す一方だった。

「ああ。だが……」

このまま永遠に戦い続けたい。

殺意に身を任せ、思うがままに戦いたい。

——すべてを、コワシタイ——

そうとすら考える欲望をなんとか抑え、梢に答えるように打開策を模索する。

このまま戦っていても埒があかない。それは明白なことで、しかし女生徒達の包囲網から抜け出したところでまた、この状況を打破する決定打にはなり得ない。梢が言っていた本隊を待つのも手なのかもしれないが、この状況でいつ来るか分からない味方を頼るのは下策であり最終手段だ。

はつきり言つて、俺達ならばこの包囲網を抜けるだけならどうと
いうことはない。

だが、そこから先の計画プランが立たない。

今はまだ余裕があるが、このままではジリ貧だ。

さて、どうしたものかね。

打開策を求め、意識は女学生達に向けたまま、視界を彼女達から
外す。

その、視線の先。距離にしておよそ二〇メートルほど離れた、多
目的ホールの入口。

気付けば、俺達に襲いかかる女生徒達の向こう側に、骸骨侍がい
た。

「な……」

予想外の存在に手元が狂い、女生徒の攻撃を許してしまう。伸ばした右腕に走るのは鋭い痛み。その痛みを無視し、横薙ぎに俺の腕を切り裂いた女生徒を薙ぎ払う。その動きに合わせ、腕から零れた血液が撒き散らされる。

それなのに、ほとんど痛くない。

極度の興奮状態で、脳内麻薬が放出されているせいだ。

……とうとう、痛みすら感じなくなったのか。

は。ますます、人間離れしてきたな。

「戦人君!？」

「……大丈夫だ」

俺は梢にそう答え、改めて骸骨侍に視線を向ける。

俺が睨むように見つめる中……骸骨侍は俺達に向かってこず、それどころかこちらに背を向けて歩き出した。

なんだ、一体？

奴も、俺と同じように戦いたいんじゃないのか？

目の前で繰り広げられる戦いの場において、敵なのか味方なのか

すら分らない。

だが、物言わぬその背中に、なにかがある気がした。

……着いて来いと、言っているのか？

だが、他に手がかりもない。

ここは、賭けてみるか。

「梢！ こつちだ！」

そう思ふなり、俺は前方の女生徒を蹴散らし、駆け出した。

「え、ちょ、戦人君！？」

戸惑いながらも、梢も俺の後ろに着いて走り出す。

それを確認し、俺達は追撃を加える女生徒達を往なしながら、再び逃げる骸骨侍を追いかけたのだった。

時折襲い来る女生徒達を往なしながら俺達は骸骨侍を追って走り続け。

女生徒達をまくことには成功したが、俺達は骸骨侍を見失ってい

た。

「いつ……てえ……」

「もう！ 男の子だから、少しくらい我慢するの！」

壁にもたれかかるように座ったまま、右腕に走る鈍痛に顔をしかめると、梢から叱責された。

その声が、薄暗い整備用通路に反響する。

「……ほら、応急処置は終わったの。あくまでも応急だから、この仕事が終わったら、きちんと消毒と治療をしてもらうこと」

約束だからね、と俺にしっかりと念を押してから、梢は立ちあがりしまっていた拳銃を抜いた。俺はその姿を尻目に、右手に服の上から巻かれた包帯を確認する。傷自体は深くないとはいえ、肉が浅く抉られた傷口は未だ出血が収まらず、傷口に当てている真新しいガーゼはすでに赤く染まり始めていた。

「……つつ……」

軽く指を動かしてみると、思ったよりも痛みが大きい。戦闘に支障が出るほどではないが、さっきまでは興奮状態にあって、痛みに対する感覚が麻痺していた分、落ち着いた今となっては痛みがより鮮明に感じられる。

痛みを苦痛だと思えることに、少しばかりホツとした。

「できれば、右腕はあんまり使わない方が良いの。挟り傷はただで

さえ血が止まりにくいんだから、傷口に負担をかけないに越したことはないの」

「まあ、そうだろうな」

頷きはするが、その忠告を聞けるかどうかは別問題だ。

必要とあれば、俺は傷を抱えてでも戦うつもりだ。

まあ、それはそれとして……。

「ここは、どこなんだ？」

腕を押さえながら立ちあがり、周囲を確認する。

俺達が今いるのは、薄暗い通路。数メートルおきに設置された、足元を照らす最低限の電灯の光と非常灯の明かりのみの世界。壁伝いには良く分からない配管やケーブルがあるが、下手に触れない方が良さそうだ、というのは素人の俺にもなんとなく分かる。あとは、さつきから唸るような低い音が止まらないことと、通路の壁全体が底冷えしそうな冷たさだということか。

その薄暗さと耳に残る重低音から、海の底にいるような、そんな感覚を覚える。

「戦人君、覚えてないの？」

「……すまん」

骸骨侍を追いかけるのに夢中で、自分がどこをどういう道を通っ

たのか、覚えてないのだ。

冷静になった今になって考えてみると、来た道を覚えてないなんて、明らかな失策である。

梢は梢で、呆れたようにため息ついてるし。

「ここは学園都市区画の地下……今私達がいるのは整備用の通路なの」

梢の説明によると、人工浮島群であるイザナギ市は、例えるなら大型船のような多層構造をしていて、電線や電話線、上下水道の配管など、ありとあらゆるライフラインを地下に通し、その間隙を縫うようにして地下鉄の路線が配置されているらしい。言われてみれば、イザナギ市で電柱を見たことがないな。確かにその方が面積も有効活用できるし、一局管理できれば整備点検も簡単になるだろう。また、もしなんらかの原因で底面に穴が開いたときの対策も兼ねているのかもしれない。

「多層構造とは言っけど、一定以上の面積を有する開けた空間はごく一部で、大体はこんな感じに配管むき出しの通路状の構造をしているの」

つまり、いざなぎ市の地下はこんな感じの通路や、一部開けた場所が広がっているということなのだろう。と言うことは、さっきから鳴りやまない低く重い、海の底を連想させる音は、実際に今俺達がいる場所が海に浸かっているから聞こえる音か。

なんと言っか、さすがに海の中にいるという実感が湧きにくいな。

「で……問題は、これからどうするかなんだけど……」

今度は、俺のことを非難するかのような視線で射竦められる。俺を見つめる深紫の双眸は、威圧感や恐怖は感じられないが、なんとなく罪悪感を覚えてしまう。

「戦人君がああの現場で骸骨侍を見つけて、ここまで追いかけてきたのは分かったの。そのおかげで、こっくりさんの会場から大分離れちゃったけどね」

「……ごめんなさい」

非難がましい視線を向けて来る梢に、俺は情けなく頭を下げるしかなかった。

「だけど、そのおかげで視えたものがあるの」

しかし、次の瞬間には、梢の表情は真剣なものへと変化していた。

「こんな場所に潜り込んで、しかも上の方で騒ぎを起こして……かなり手の込んだ偽装をしてるけど、私の眼は誤魔化せないの」

言いながら梢が見つけているのは、俺達がいる通路の更に奥。

ここからでは先を窺い知ることのできない、深い闇の先。

「この先にある開けた場所に、一人。こんな場所にいるなんて、明らかにおかしいの。私には霊的な力の流れは読めないけど、分かるの」

「つまり、この先に黒幕がいるってことなのか？」

俺の言葉に、力強く頷く梢。

「だけど、状況は最悪なの。武器は心許ないし、上の混乱からして応援は望めそうにない。黒幕の正体も実力も目的すらも分かっていない。……それでも、戦人君。戦うことはできるの？」

「当然だ」

迷わず即答する。

黒幕の存在に、否応なしに心臓の鼓動が高鳴る。

戦いの予感に、全身が喜びの産声を上げ、唸る。

迷いも、悩みも、そのたったひとつの黒い願望に打ち消されそうになる。

戦いたい。

たったそれだけの意志が、渴望が、俺のことを突き動かす。

なにひとつとして、答えなんて出せていないのに。

このまま戦えば必ず後悔すると、分かっているのに。

戦いを求める心を、俺は抑えることができなかった。

海拔ゼロメートル以下、心許ない光源を頼りに、俺達は慎重に通路を進んでいった。明かりの当てはあるのだが、この先にいるであろう黒幕に奇襲をかけるために敢えて使用しない。

そんな中でも、警戒をしつつひよいひよいと躊躇うことなく進んでいく梢はさすがだと思う。

やがて、突き当り……『立ち入り禁止』と書かれた扉の前に到達し、俺達は足を止めた。

緊急時に隔壁としての働きをするように、扉は堅牢な造りをしている。その役割上、そして立ち入り禁止の表記が示す通り、普段は閉鎖されているのだろう。だが、今は鍵が破壊され、その役割を果たせなくなっていた。

「本格的に、当たりなの。中に一人」

声を潜め、梢が呟く。俺はそれに頷き、扉を挟んで梢の反対側に陣取る。

突入の準備。扉を開けると同時に俺が突入し、続いて突入した梢の援護を受けながら対象を征圧する、二人一組でのフォーメーションのうちのひとつ。

スタンバイ
「三、二、一……」

以前に見たものを真似、口の動きだけでカウントを行う。

アイコンタクトで突入のタイミングを、息を合わせる。

そして。

「突入！」

一息に扉を開けて、同時に踏み込む。

視界に一気に広がったのは、薄暗くも開けた空間。所々に資材が置かれている。

その、ほとんど中央にいる人物。

——人は、あまりにも想定外の事態に陥った際、すべての行動を停止してしまうらしい。

「……祀、か？」

その後ろ姿を、俺が見間違えるハズが無い。

「い、戦人……どうして君が、ここに……！？」

いくら驚愕に染まっていようとも、その声を聞き間違えるハズが無い。

どれだけ戸惑いが混じろうとも、その顔を見間違えるハズが無い。
なぜなら彼女は俺の幼馴染で。こんな俺のことを許容し、受け入

れてくれる、俺が唯一親友と呼べる存在なのだから。

襦袢に緋袴……いわゆる巫女装束に身を包んだ夜刀祀が、そこにいた。

「戦人君、知り合いなの？」

「知り合いもなにも……」

足を止め、俺の横に並んだ梢を一瞥し、再び祀に視線を戻す。

祀と俺の関係は確かに幼馴染同士で、親友だと思う。

だが、今この状況で、俺はなんて言えばいい？

祀がこんなところにいる理由も、見慣れない巫女装束を着ている理由も分からないのに？

「まあ、戦人君とどういう関係でも、関係ないの」

と、梢はそう前置きし。

「警視庁公安零課、芹沢梢です。貴女がこつくりさんを広めた黒幕で、上の学生達を操っているのなら……即刻、止めるの。さもないと、容赦しないの」

問答無用。

以前、骸骨侍と俺を制止したときよりも更に直接的な表現で制止を要求する。

この状態で両手に持った拳銃を祀に向けていないのは、梢なりの
気遣いなのだろうか。

「……悪いが、それはできない」

「理由を聞くの」

最初こそ動揺を浮かべていたが、もう落ち着いたので、冷静に答
える祀。

「……ボクは、彼の本懐を遂げないといけないんだ」

言い、どこからともなく取り出した剣を抜く祀。

その造形はとても古い時代のもので、いわゆる十束剣……天羽々
斬あめのはささけや布都御魂剣のように日本神話に出てくるような両刃の剣で、相
当に古いものであるにも関わらず、刀身は鈍い金属光沢を維持して
いる。構えは意外にも堂に入っていて、そして不思議なことに、祀
が手にした剣が、相手の表情を読むのがやっとの薄暗闇の中で、淡
く光を放っていた。

その剣を構え、こちらを睨みつける祀。その視線に込められてい
るのは、明らかな敵意。

その表情を見て、俺は気付いた。

そもそも、土台からしておかしいのだ。

長年祀のことを見てきた俺だから分かる違和感。

だが、その想いは、あるひとつの感情によって圧迫され、塗り潰される。

祀の実力は、どの程度のものなのか。

試してみたい。

まるで舌なめずりをする蛇のような、薄暗い感情。

「梢。ここは、俺にまかせてくれないか？」

「……分かったの。弾も少ないしね。ここは、戦人君に任せるの」

俺の申し出に素直に従い、後ろに下がる梢。

それを確認し、祀と対峙する。

「戦人。君を満足させることができるか、分からないけど」

少し不安そうにそう言い、しかしその表情はすぐに引き締まったものへと変えられる。

祀の表情の変化に合わせ、俺も改めて構える。

どうして祀がこんなところにいるのか。

どうして祀が俺と対峙しているのか。

どうして祀がそんなことを言うのか。

そんなことは最早どうでも良くなっていた。

ただただ、目の前に存在する未知の実力者との戦いを求めている。

——こんなところに、戦いの相手がいたなんて！

歓喜が極上の着火剤となり、心をより激しく震わせ。

俺は躊躇わずに、脚を踏み出した。

攻撃は最大の防御なり、だ！

中段に構えていた祀は、俺の接近を確認すると眉を僅かにひそめ、俺が間合いに入ると同時に最小限の動きで剣を振り上げ、振り下ろした。祀らしい、堅実な動き。だが、つまらない。

それを受けて、俺は左足を後ろに下げ、右足を軸にして左半身を後ろに捻ることで躲す。次の瞬間、ほとんど間髪を入れずに俺を襲う横薙ぎの刃。おそらく、振り下ろしではなく横薙ぎが攻撃の本命。初撃が回避されることを前提とした「」字を描く刃の軌跡。

堅実なんてとんでもない。

引いた左足に咄嗟に力を込め、後ろに飛ぶ。身体に負荷を強いる動きに右足と左足、両方から軋む音が聞こえたが、そんなことを気にしている場合ではない。切っ先が服の腹を横一文字に切り裂くが、身体には当たっていない。祀の二撃目も回避できた。今度はこちらの番だ、と思ったところで、ゾワリと、嫌な予感が全身を襲った。

回避から攻撃に動きを切り変えようとした身体を無理矢理に捻り、半ば横に転ぶようにして身体を動かす。転がる俺の視界に映ったのは、横薙ぎに振り払った剣をすぐさま右腰ために構え、二段突きを繰り出す祀の姿。

あのまま攻撃に移っていたら腹を貫かれていた。

だが、その緊張感が、堪らない。

生きているということに僅かな安堵、そして命を削る戦いであるという事実に大きな興奮。

受け身を取りながら床を転がり、追撃に合わないように祀から距離を置く。

すぐには立ちあがれない俺に対し、追撃が来るかと思っていたが……結論から言えば、祀は俺が立ちあがるまで、剣を構えたまま待っていた。

「……追撃はいいのか？」

再び拳を握りながら、俺は祀に問いかける。

「……………！」

その問いに対する祀の答えは、言葉ではなく戦う意志。

俺の準備が完了するや否や、祀は刃を振り上げ、俺に斬りかかってきた。

睨みあいから接敵まで僅か一秒。言葉を交わす暇はないし、そもそも祀は口を開いていない。

その代わりに、振るわれた刃が雄弁にモノを語っていた。

正々堂々、尋常の勝負。

まるで恋に焦がれる少女のように、俺が心の底から望んでいたモノ。

「……はは」

祀の意図を確信した瞬間、無意識に笑みが零れていた。

左肩口から右脇腹、斜めに振るわれた刃を躲すと、次は逆袈裟の刃が俺を襲う。それを回避すると、今度は斬り下ろしからの突き、続けて逆胴、斬り上げ。一閃、二閃、三閃、四閃。反撃の余地のない、刃の閃き。

「あははははははははははは！」

哄笑。

薄暗い空間に声が反響し、脳を揺さぶるほどにガンガンと響く。

それだけの強い声を出しているというのに、息は切れず、身体は激しく熱を持つ。刃を躲すごとに、躲ききれず皮が切られることに力が漲る。心臓の鼓動はますます激しくなり、身体の内底から歓喜が湧きあがる。気分が軽くなり、戦いのことしか考えられなくなる。どうして俺はこんなところにいるのか、誰と戦っているのか、分か

らなくなる。

楽しい、楽しい、タノシイ。

心の底から愉快だと思う。

だけど――まだ、足りない。足りない。足りない。足りない。

もっと敵を。もっと傷を。もっと血を。もっと戦いを！

滾る血液の流れは抑えられない。

神経が研ぎ澄まされ、身体は通常ではできないほどの動きを可能とする。

幾度目になるのか、振り下ろされた刃。その刃の腹を左から右へと右手で弾き、それと同時に左足を敵左足の内側へと踏み込み、左拳を叩き入れる。《火生土・十字》。敵の身体がくの字に折れ、剣を取り落とす。カラン、という乾いた音。それから敵が吹き飛び、背中から地面に倒れる音。立ちあがる様子はない。俺は警戒を続けながら、剣を拾い上げた。

期待していたよりも呆気なく終わってしまった戦いに、幾分の失望を感じながら。

一撃で沈んでほしくなかった。もっと抵抗してほしかった。

俺のことを斬ってほしかった。腕の一本くらい持って行ってくれても構わなかった。

もっともつと、俺と戦い続けてほしかった。

……なんだ、こんなものか。

光を失った剣を握り、未だ倒れたままの敵の横に立つ。

倒れた敵に、止めを刺す。

難しいことはない。ただ、首に剣を突き立てるだけ。

作業のような行為。戦いと呼べない攻撃に辟易しながら、切っ先を首に宛がう。

だけどもあ、それなりには楽しめたしな。

餞^{はなむけ}として、最高の一撃で葬ってやるか。

「……ごめんよ、戦人」

……あれ？

俺は誰と、戦っていたんだ？

「君を、満足させられなくて」

剣を振り上げる。

風を切る鋭い音と共に剣は振り下ろされ——甲高い金属音と共に、その動きは停止した。

「あ……？」

俺の首ほどの高さで制止する刃。それを支えているのは、最小限の明かりしかないこの閉鎖空間の中ですら、眩いほどの銀光を放つほどに研ぎ澄まされた、日本刀。古ぼけた鎧。壊れた面具からのぞく骸骨。

骸骨侍が、そこにいた。

7・土蜘蛛

今日三度目の邂逅になる乱入者。

咄嗟に剣を引き距離を取る俺に対し、骸骨侍は祀を護るように立ち塞がる。

……どうして、祀が倒れている？

決まっている。倒したからだ。

誰が？

俺だ。俺自身が祀を倒して……止めを刺そうとしたところに、邪魔が入ったんだ。

どうしてそんなことに、気付かなかったんだ？

そこまで考えて、ゾツとする。

俺は、祀と戦っているということが分からなくなるほどに、戦いに魅入られていた。

骸骨侍が間に入らなければ、俺は、祀を殺していただろう。

それが、俺なのだ。

親友を殺そうとするほどの戦闘狂。自分がそうであるという事実
に、愕然とする。

祀のことですらどうでもいいと感じていた。

殺したかもしれない、という恐怖や罪悪感すらも、完全に忘れていた。

霞みがかったいた思考が晴れ、先の戦いについて思い出すことに、自身に対する嫌悪感が膨れ上がる。

俺は、祀を殺そうとしていた！

そんな自分自身が、堪らなく嫌で、嫌い……だけど、俺の身体は止まらない。

ドロドロと、ズルズルと、心に染みついた殺意が離れず、酷く気分が悪い。

だが、それなのに——俺の心は、未だ満足できないでいる。

目の前に佇む骸骨侍。その姿を見て、再び心臓が高鳴るのが分かる。

目の前の骸骨侍が何者なのか。なにを目的としていて、どうして俺をここまで導き、今俺の前に立ちはだかるのか。理由不明の行動、未だ分からぬその正体……そんなことはどうでもいいと叫ぶ、俺の心。

戦いたい。

心にこびりついて離れない、黒く重い、ヘドロのような感情。

その重さに負け、闇の中に引き込まれる。

物言わぬ骸骨が俺になにを訴えかけているのか。

それを聞こうともせず、俺は剣を構える。いや、それは構えとも呼べないもの。ただ剣をぶら下げ、感情のままに走り出す。接近。対し、骸骨侍は構えようとしない。俺と同じように刀を降ろしたまま、視線だけは俺の方に向けている。

その状態でも、俺に勝てるってのか？

……上等だ！

胸から噴き出した、どす黒い殺意に、顔が綻ぶ。

骸骨侍まで残り一步、左足を踏み出すのと同時に身体を右に捻る。右腕は完全に脱力し、身体の勢いに為されるがままにしておく。その状態で最後の一步、右足を、震脚。強く踏み込み、その反動を全身の関節を連動させることで利用し、右腕を突き出す。脱力状態から鞭のようにしならせ、捻りと共に体重の乗った突きを繰り出す。

その切っ先のトップスピードは、弾丸に比類すると自負している。

だが……骸骨侍はそれを、刀一本で受け止めていた。

それも、刃と切っ先、刀を立てたままの状態で。

「……はっ」

暗い歓喜が心に生まれる。

腕に響く衝撃に、鳴り響く金属音に、止められたという事実に、心が震えた。

真剣勝負を求め、様々な流派の道場に他流試合を申し込みまくった時期が俺にもあった。そのほとんどは、俺と戦うことを――死合^{しあ}うことを厭んだ。だが、果たして彼らが本気になったところで、この骸骨侍の技量に到達している人間は、一体何人いたのだろうか。

沸き上がるのは、墨色の狂喜。

全力で戦えるという愉悦。

素早く剣を引き、半歩踏み出すのと同時に骸骨侍を斬りつける。

その刃も、通らない。刀を引き、身体を僅かに逸らすことで回避され、即座に反撃に移られる。逆風。下方向から迫る刃を、俺は咄嗟に大きく身体を逸らすことで回避し、そのまま地面を蹴ることで身体を一回転させ後方に跳ぶ。次の瞬間、俺が半秒前までいた場所を、骸骨侍の刀が切り裂く。

もし、跳んでいなければ斬られていた。

死んでいた。

その事実が、狂おしいほどに嬉しい。

破顔一笑。今の俺は、相当酷い笑顔を浮かべているのだらう。

心にあるのは闇夜よりも黒く、負の感情が濃縮された邪悪な情動。

暗い激情に身を任せ、俺は笑顔のまま骸骨侍に斬りかかる。

弾き、逸らし、受け流し、受け、避け、躲す。おおそ剣と剣で打ち合うときに起こり得る現象を幾度となく繰り返す。だが、技量は骸骨侍の方が上。俺の攻撃はほとんど当たらないのに、骸骨侍の攻撃は的確に俺を捉えている。

額が切れ、左の視界が赤く染まる。右手から右肘にかけて無数の切り傷が刻まれ、すでにその体をなさなくなった包帯は赤く染まり、腕を振るたびに血飛沫があがる。左肩、左脇腹の傷は深く、血が流れすぎたのか痺れ始めている。

だけど、止まらない。

いや、むしろ傷を受けるたびに、黒い歓びを覚えている。

もっと、もっと、もっと！

そう、心が訴えている。戦いを求めている。

心が、塗り潰される。

俺が俺でなくなる。

戦いは、楽しい。

心が黒く染められるのは、気分が良い。

ああ、気分が良い。最高だ。

「あははははははは！」

斬撃音と笑い声が交差する。

到底人間とは思えない笑みと笑い声。

人間が浮かべてはならない類の嗤い。

この世界にいてはいけない者同士の戦い。

だけど、まだだ。まだ、足りない。

戦いが。

一際大きな金属音を響かせ、お互いの得物が弾かれる。

それに合わせて俺は後方に跳び、間合いを取る。骸骨侍も同じ判断を下したのか、俺達の間合いは至近から一気に離され、一足飛びでは辿りつけない距離となる。

ここから、どう攻めるべきか。

お互いの得物の間合いに無くても、切っ先を相手に向けたまま、睨みあい。

次の瞬間、巨大な蜘蛛の脚が、古びた鎧を貫いていた。

「……は？」

思考が止まる。

なにが起こったのか、咄嗟に理解ができない。

だが、気付けば、先程まで倒れていたはずの祀が立ちあがり、俺のことを悲しそうな表情で見つめていた。

「戦人。土蜘蛛って知ってるかい？」

そして、抑揚のない声で俺に問いかける。

その背に見えるのは、蜘蛛。それもただの蜘蛛ではない。身体は虎のような黄色と黒の縞模様で、顔は鬼のような形相、八本の脚を持つ巨大ないでたち。大きさにして三メートルは下らないだろう。

「今でこそ妖怪の一種に考えられているけど、その起源は、古代日本における、天皇に恭順をしなかった土着の豪傑……つまり、祀られなかった神様だ」

その語り口調は、俺に自身の知識を披露するときのもので、しかしその言葉を紡ぐ祀自身は、これ以上ないくらいに悲痛な表情をしている。まるで、言葉を発することそのものが苦痛であるとも言わんばかりに。

「ボクは、ボクの一族は、かつて時の朝廷に迫害され、追いやられたモノ達の末裔だ。だから、夜刀祀。やこのまつりボクの一族は、時の朝廷によって悪であるという一方的に決められた神々を祀る一族で……そしてボクは、彼らを祀る巫女なんだ」

一方的に声を発する祀の背後で、顔鬼胴虎の蜘蛛が唸る。口から

涎を垂らし、口角からのぞく鋭い牙をガチガチと鳴らし、文字通り鬼の形相で俺達のことを睨みつける。その形相は、怒りを堪えているように見えた。その姿から、視線から、そして何よりも放たれる強烈な殺気から、俺にでも察知できた。

秩序側の人間……つまり、かつて自分達を迫害した朝廷側の人間の末裔である人間達に対する、千年を超えて醸成された怒りと怨嗟。それが、俺の肌を焼く。チリチリと、首筋の神経が痛む。人間を遥かに超えた存在の、掛け値無し、本気の殺意。気を抜けば、それだけで気が狂ってしまいそうなほどの圧力。

それすらも、心地良いと思う。

俺は躊躇うことなく、構えていた剣の切っ先を向け直す。

祀の更に後ろ、怨嗟の念に燃える、異形の怪物に。

それまでの過程は気にならなかった。

ただ、目の前に戦う相手がいる。それだけで、満足できた。

「『土蜘蛛』。それが、祀られなかった神の名前だ」

それが、そいつの名前か。

……ああ、なるほど。だから、蜘蛛。

頭の中に自然とこれまでのことが思い返され、それらの事象が一本線で繋がっていたことを理解する。

一人納得する俺の前で、土蜘蛛という名の異形は、脚に突き刺さった骸骨侍を、俺の前に投げ飛ばした。自らが貫き、脚に刺さったままの骸骨侍が邪魔だったのだろう。

当たり前とも思えるその動作が、何故だか、癪に障った。

「迫害され続け、だけどチャンスを探いながら一五〇〇年の刻を過ごした。そこに湧いて出た、この街だ。だからこそ僕達は探したんだ。この街に来て、都市伝説を調べ、信仰を得る方法を。そして利用した。こつくりさんという新しい都市伝説を利用して、信仰を集めた。……だけど、それを邪魔する人間がいる。ボク達は信仰を集めるために、こつくりさんを妨害されるわけにはいかない。」

脚に刺さっていた錘を外され、土蜘蛛が前脚を振り上げる。

その瞬間、俺に向けられていた殺意が増し……再び、俺の身体の中の血液が沸騰した。

「だから……戦人、ごめん。ボクは、君を倒さないといけないんだ」

「……上等だよ、祀」

ゾワリと、黒いなにかが俺の身体を駆け巡る。

いいね、第二回戦。

今度の相手は異形の怪物。それも、三メートルを超える偉丈夫。相手にとって不足はない。

その巨体と、それから発せられる圧力に呼应し、身体の奥底から

湧き上がるエネルギー。相手が強ければ強いほどに生まれるエネルギーが増大し、怪我をしているのに、更なる力を発揮しているように思える。

その熱量に、心に、俺は呑み込まれそうになる。

黒。

ただただひたすらに黒い、殺意。

闇。

どこまでも深く、底の見えない闇のような、渴望。

それを、俺は躊躇うことなく祀に向けている。

幼馴染であり、親友であり、俺の数少ない理解者である、祀に。

また俺は祀を殺そうとしている。

なのに、止まらない。止められない。

戦いたい。

祀を殺したくなんてないのに、俺は――

嫌だ。

嫌なんだ。

だれか、教えてくれよ。

どうすれば俺は、止まることができるんだ？

「……戦人、二回戦だ。いざ、尋常に——」

祀の言葉を遮る、銃声。

二発の銃弾が、振り上げられた土蜘蛛の二本の前脚を穿つ。

「人が静かに様子見してるからって……私を無視して話を進めるなの」

巨体に対して小さすぎるのか、その銃弾が土蜘蛛にダメージを与えた様子はない。

だが、梢はそれを気にする素振りを見せる様子もない。

「大分言葉を選んだみたいだけど、おおよそ、『こつくりさん』という既存の都市伝説を利用して、新しい信仰を集めようとしたんだと思うの。いざなぎ市は霊的な空白地帯で、この辺りを治める土着の神様なんていないから、信仰が広めやすいと思ったのかな」

ただ、静かに……普段の梢からは考えられないほど静かに。

「……だけど、そんなこと、どうでもいいの」

そう、断言した。

祀が掲げた大義名分。一五〇〇年という重みの上に積み重ねられ

たそれを、たったの一言で切り捨てる。

その容赦の無さが、何故だか心地良かった。

「私の仕事は、その腐れた神様を斃すことなの。だから、貴女がどんな想いで色々と言ったのか……なんて、心底どうでもいいの」

「……ふふ」

「なにがおかしいの？」

「いや。どうでもいいと言う割には、きちんと聞いて……その意味も理解してくれているんだな、と思ってね」

「あれだけベラベラと喋って、分からないとでも思っているの？」

「どうやら君も、戦人と同じくらい優しくて、お人好しのようだね」

「戦人君には負けるの。……そういう、あなたこそ」

「そうでもないよ。ボクは、夜刀の巫女だから」

「うっん。あなたはとうしようもないくらいお人好しなの。わざわざ負け馬に乗るなんて」

「それは、やってみないと分からないよ」

「でも、貴女自身は……成功すると、思っていないよね？」

「……………」

「……………やっぱりやーめた、の」

梢の気の抜けた声と共に、空気が弛緩する。

それと同時に、梢は拳銃を下げ、踵を返した。

それから、俺の肩に手を置いて、一言。

「後は任せたの、戦人君」

「は？」

「あの大きさだと、手持ちの銃じゃ全然ダメージが与えられないの。武器が頼りなかったら、私はただのか弱い女の子に過ぎないから、後は戦人君に任せるの」

言いたいことは、色々ある。

だが、そのあまりの突拍子の無さに毒気が抜かれ、咄嗟に言葉が出せない。

ただ、ひとつだけ、思ったことがある。

か弱い、だと？

そう思った瞬間、梢に睨まれた。

「なにか、失礼なこと考えなかったの？」

「き、気のせいだ」

「ま、それはいいの。……私が思うにね。あの子は、そしてそこに倒れてる英傑は、戦人君しか救うことはできないの。だから、戦人君が救ってあげるの」

「俺が……？」

俺にしか救えない、だって？

巨大な蜘蛛を背後に背負い、腹に穴を開けたまま動こうとしない骸骨侍を一瞥し、思う。

馬鹿な。そんなことがあるか。

俺は戦闘戦闘、戦いのことしか考えられない人間だ。人間として欠落を抱えた人間だ。

暗い感情に吞まれるしかない、そんな俺が、誰かを救うことができるだって？

俺は、戦うことしか……毀すことしか、できない人間だぞ？

そんな人間の振るう剣に、誰かを救う資格なんて、あるわけがない。

「俺は、人間として欠陥のある人間だぞ。戦いのことしか考えられない人間だ。そんな俺に誰かを救う資格なんて、あるわけがないだろ！」

「……自惚れるな、なの。この世界中で、戦人君が剣を振るう理由に興味がある人間なんて、精々戦人君一人くらいなの。そんなの、誰も歯牙にもかけたりしないの。そもそも、救われた側にとっては、救った側の心情なんてどうでもいいの。『誰かを救う資格』なんて、誰も持っていないの。『結果として救われた』。それで十分なの」

「だが、俺の剣は祀を殺そうとした！」

「それが嫌なら、一本筋を通すの。なんのために剣を振るうのか、考えるの。自分が戦いだけの存在じゃない。それを、他でもない戦いの中で証明してみせるの」

「戦いの中で、証明……」

その言葉は、ハンマーで殴るよりも強い衝撃を俺に与えていた。

戦うということにばかり気を取られて、そんなこと、考えたこともなかった。

戦いに囚われる自分自身を嫌悪してばかりで、そのことに思い至らなかった。

なんてことだ。

梢の言葉で、俺はようやく気付かされたのだ。

俺が戦いだけの存在じゃないと、戦いの中で証明するなんて！

「それと、もうひとつ。私は……そして間違いなく、そっちの子も。例えば誰がなんと言おうとも、私達は、戦人君の存在を、認めるの。」

あなたが、あなたで在るために戦うことを、否定しないの」

その言葉に反応し、ほとんど反射的に祀に視線を向ける。

祀は、ただただそこに佇んでいるだけ。頷くことも、言葉で肯定することもしない。

だけど、分かる。

祀は俺にとって、幼馴染で親友で、大切な人で、だから。

祀が言わんとしていることを、あの日、バスから叫んでくれたことの本当の意味を、俺はようやく理解できた。

「それにもし、戦人君が本当に狂ったとして……その戦いが終わったら、私が一発、ぶつとばしてあげるの。だから戦人君は安心して狂えばいいの」

そう言い、朗らかに笑う梢。

目をやれば、祀も俺を穏やかな笑顔で見つめている。

その笑顔が眩しくて、温かい。

暗く黒い、闇の中。

俺の心を捉え蝕む、狂喜にして狂気。漆黒の殺意。戦いに囚われ、戦うために戦う。

なにも生まない、タールのようにドロドロとした俺の世界。

だけどその中に、一筋の光が見えたような、そんな気がした。

「……………」

「戦人君。改めて、聞くの。戦人君はなんのために、戦うの？」

「……今はまだ、分からない、だけど」

きつと俺はこれから、戦いに囚われていくのだろう。何故なら、俺自身の中にある、戦いを渴望する心が消えたわけではないし、俺の人間としての欠陥が埋められたわけではないからな。

俺は、戦いに囚われている自分が嫌いだった。戦いに溺れることが嫌だった。それでも、戦いを前にすると心も身体も反応して、真っ黒な感情に覆われて、それしか考えられなくなっていた。

そんな危険な思考を持つ俺は、この世界にいてはいけないと思っていた。人間として欠落を抱える俺はこの世界に相応しくないと思っていた。俺の居場所なんて、この世界のどこにもないんじゃないかと思っていた。俺のような存在は許されないかと思っていた。いずれ、この世界のどこかに取り残されるんじゃないかと思っていた。

だけど、二人の言葉を聞いて、笑顔を見て、ようやく気付くことができた。

「俺は、俺が俺であることの証明のために、剣を振りたいんだ」

その言葉を聞いてか、梢は満足げに微笑んでいた。

「良かったの。それが分ければ、あんな干乾びた神様、戦人君一人でも十分斃せるの」

『ホウ……我ヲ斃スノニ、一人デ十分トイウカ、人間ヨ』

空気が唸るような、重くて低い声。

その言葉の端々から感じられる、有無を言わせぬ存在感。

その声が土蜘蛛のものだということが、頭ではなく心で感じられた。

「思いつきもいい加減にするの、土蜘蛛。一五〇〇年以上生きてきて、なにも学んでないの。時勢が読めないのは昔から変わらないみたいだし。それとも、読みたくないの？ は、現実を正しく直視もできない、そんな腰抜けが戦人君に勝とうなんて、ちゃんちゃらおかしいの」

それに対してすらも、梢はぶれなかった。

臆することなく、正直な感想を述べる姿は本当に清々しいものだと思う。

さすがだよ、本当に。

『小娘ガ……！』

怒気を強める土蜘蛛。

飄々とした表情を崩さない梢。

土蜘蛛の前に控える祀。

そして、剣を構える俺。

視線が拮抗し、張りつめた糸のような、危うい緊張感が生み出される。

数秒、十数秒、数十秒、一体どれだけの時間、睨みあい続けたのかは、分らないが。

その緊張を崩したのは、俺だった。

戦いへ赴くために。

けどそこに、暗い願望はない。

祀と俺の間の距離はおよそ一〇メートル弱。その距離を、未だ動く気配の無い骸骨侍を飛び越え、四歩で剣の間合いに詰める。御薙流の縮地法《疾歩》。要した時間は半秒、祀も土蜘蛛も反応できず。狙いは、迷うことなく土蜘蛛。梢を押しつけ、その後ろで足を止める。

戦いを求める。祀を殺したくない。だから、土蜘蛛を直接攻撃する。

簡単な話だ。間違えようもない。

剣を右上から左下へと振り下ろし、右の前脚を袈裟に斬り付ける。硬い外殻を削り、剣が脚から離れた瞬間に、土蜘蛛は前脚を振り上

げた。

接敵し、攻撃してみて、顔鬼胴虎の化物は硬い身体を有していることに気付いた。考えて見れば、梢の銃弾も通用していなかったしな。だが、問題はない。確かに硬いが、手ごたえはある。破壊できないほどではない。一撃で駄目なら、同じ個所に二撃目を叩き込む。それで駄目なら三撃目を、四撃目を。そう、身体が吼える。その攻撃を叩き込むために、身体は熱を生産し始める。

戦いたいという感情が湧きあがる。

だが、熱を孕む身体とは裏腹に、頭は妙に冷えていた。

「梢！ 祀を頼む！」

「はいはい、了解なの」

「え……！？」

俺に言われなくても初めからそのつもりだったのか、よろけ、俺から僅かに離れた祀の身柄を梢が拘束し、即座に俺達から距離を離す。自身は戦えないと言っておきながらその動きは迅速で、それどころか俺が一瞥した際にウイंकをかますくらいに余裕を持っていた。「戦人君、頑張るの」そう言いたげに、微笑んでいた。

それが分かるくらいに、今の俺は戦いに対して余裕を持っていた。

もし俺が狂ってしまっても、二人が助けてくれる。

だから俺は、安心して狂うことができる。

……安心して狂えるってのも、妙な話だけだな。

だけど今なら、断言できる。

例えば世界が俺の存在を否定しようとも。例えば世界に取り残されようとも。

暗く黒い感情に吞み込まれ、俺が俺でなくなってしまったとしても。

二人が俺のことを認めてくれるなら、それだけで十分だ。

「……行くぞ、土蜘蛛！」

全身全霊を込めて、俺は吼えた。

それに対抗してか、土蜘蛛も啼いた。

ビリビリと空気が震える。

次の瞬間、俺目がけて脚が振り下ろされた。それも一度ではない。何度も、何度も、何度も、前四本の脚が、執拗に襲いかかる。その先にある爪が床に打ちつけられるたびに壁が震え、音と共に金属製の床材が穿たれる。

掠るだけでも致命傷。

俺はそれを、時に身体を捻り、時に跳ぶことで躲す。

そうして紙一重で躲すごとに、血液が変質するのが分かる。身体
の芯に一度集約された血液が、熱を得て血液ではない別のなにかに
昇華する。それだけじゃない。生まれた熱量が、身体の要所要所に
的確に分配され、筋肉をこれまで以上に活性化させる。その生成に
も運用にも一切の無駄が見られない。必要なときに必要な分だけ熱
を生産し消費する。

そして何より、囚われていない。無論、戦いたいという気持ちは
ある。だが、それに思考を支配されることはない。黒く暗い感情に、
心を覆い尽くされない。むしろそれは適度に神経を昂らせ、一步引
いた位置から瞬時に的確に思考することを可能としている。目の前
の事象を正確に捉え、戦いそのものに囚われることなく集中力を持
続できる。

これまでもとは明らかに違う、身体の反応。

驚くほどに身体が軽い。信じられないほどに思考が早い。

ただ戦うために戦うのではなく——戦いのために戦う。そのため
の神経回路と運動神経が構築されていることを実感する。

だが、足りない。

幾度となく踏み降ろされる脚を躲し、時折反撃を加える。だがそ
れは、致命傷どころか決定打の一端にすらなり得ない。流石は、腐
っても神ということか。しかし、かと言ってこの紙一重の均衡を崩
すのはあまりにも危険すぎる。だが、このままでは勝てないとい
うことも分かっている。

あと、一手。

それだけが、足りないのだ。

「クソッ」

思わず、悪態を着く。

その、ほんの僅か、刹那にも満たない注意力の散漫。

一瞬だけ集中が途切れ——その瞬間、左足から力が抜け、そのまま膝から崩れ落ちた。

「しまっ——」

元より出血が酷く、いつ限界が来てもおかしくはなかった。

すでに下半身の感覚はほとんどなく、手足の末端も痺れてきていた。

だけど、まさか心どころか苦痛すらも覆い隠す漆黒の感情から解放された、この瞬間に限界が来るなんて！

左足に力を込めるも、動く気配がない。ガクガクと震え、立ちあがれない。

クソ！ 動けよ！

震える足を叩くも、反応はない。

迫る蜘蛛の脚。

ふざけるな。

俺はようやく、暗い感情に支配されず戦うことができるようになったんだ。祀と梢から、存在を許してもらったことができたんだ。

それなのに……こんなところで、死んでたまるかよ！

四本の脚を睨みつける。

その動きが、酷く遅いものに見える。ゆっくり、ゆっくり、鋭い爪が迫る。

黒ではなく、白い世界。

——遅い。

動くものがほとんど制止しているように見える。

息が詰まりそうなほどに、時間の遅い世界。

そして——俺と土蜘蛛の間に割り込むその姿も、鮮明に見えていた。

「お前……」

世界が戻り、白い世界から解放される。

世界の動きが急に早くなり、時間が戻って来たのだと感じられる。

一瞬の接触を見切り、攻撃を逸らす技量。研ぎ澄まされた刀の牙え。

骸骨侍。

その下半身が、身体が、四本の蜘蛛の脚によって同時に貫かれている。足が千切れ、手が千切れ、貫かれた脚に支えられてようやく立っていられるような、酷い状態。

「どうして……!？」

その意図が分からなかった。

何故、自分を犠牲にしてまで俺を助けるのか。

どうして、俺に構うのか。

問いかける俺に対し、骸骨侍はなにも言わず、俺に向かってただ刀を差しだしていた。

「……使えと、言うのか？」

骸骨侍は頷かない。肯定の言葉も発しない。

だが、それ故に誰よりも雄弁に語っていた。

『邪魔ヲスルノカ、フツヌシヨ……!』

土蜘蛛の声が聞こえる。骸骨侍——フツヌシというらしい——に脚を突き刺したまま、動こうともせず、声を発するその姿は、骸骨

侍の行動に対し土蜘蛛が動揺しているように見えた。

骸骨侍がどうして自ら突き刺されたのか、理解できないのだろう。

だが俺は、その理由がなんとなく分かるような気がした。

一度剣を交えたからこそ、分かる。それだけじゃない。

誰かに剣を託すという意味。その意味を、重さを、俺は痛いほどに理解できる。

それを理解できるからこそ……俺は、彼の手から刀を受け取った。

「――」

刀の柄を握ったその瞬間、頭に映像が流れ込んできた。

それは、骸骨侍が歩んできた時代の流れ。

誇り高い魂が、自身の命とも言える剣を託すに至った、その過程。

「そうか、お前も……」

俺も、土蜘蛛も、骸骨侍も、同じなのだ。

現代に馴染めない、時代遅れの遺物。ちっぽけなプライドのようなもののために自分を変えることができず、時代に取り残される。

俺達の違いはただ、その対処法が違っただけ。

土蜘蛛は、時代そのものを変え、自分の居場所を創ろうとし。

俺は、狂気に呑み込まれそうになりながら戦いの場を求め。

骸骨侍は自身の剣を託す人間を探し、彷徨った。

時代に反発しようとしたか、迎合しようとしたか。ただ、それだけの違い。

そして俺は、託されたんだ。

骸骨侍……フツヌシという存在の、魂を。

『ナゼダ……ナゼ、諦メラレルノダ……！？ ナゼ、自身の神性ヲ、人ニ託スコトガデキルノダ……！』

「……誰も、完全じゃいられないからだよ」

『又……』

「俺は確かに、人間として欠陥を抱えている。一人じゃ生きていけない人間だ。……だけどな、それはお前達も同じなんだよ。神様だけじゃ、駄目なんだ」

そう。

俺は、骸骨侍の魂を受け継いだんだ。

だから。

「時代に取り残された神様よ。いい加減、幕を引こうぜ……土蜘蛛」

『ナメルナヨ、ニンゲンフゼイガ!』

「おおおおおおっ!」

『オオオオオオオッ!』

ふたつの雄叫びが重なる。

一気に四本の脚を振り上げる土蜘蛛。その衝撃で骸骨侍を支えていたものが外れ、ボロボロだった身体が崩れ、塵となって消え去っていく。

最後の瞬間、物言わぬ骸骨が微笑んだような、そんな気がした。

無闇矢鱈に振り下ろされる足を、俺は両手の剣と刀で裁く。逸らし、躲し、反撃の機会を窺う。

限界が近い?

はっ。そんなの、関係ないね。

俺は戦うんだ。

こんな俺のことを信じてくれた奴らのために、そしてなにより自分のためにな!

迫る四本の脚。そのうちの一本を、右足を後ろに下げ半身を切ることで躲す。二本目は、半歩右に跳んで躲す。三本目を、左手に持った祀の剣で弾き飛ばす。激突の瞬間、全身の筋肉が連動し、血液

が燃え、心臓が激しく鼓動を刻み、普段の俺では絶対に出せない力が生み出される。それができると、頭でなく心で予測できた。そして四本目を、逸らす。

『ナ……！？』

右手だけで持った刀を寝かせ、柄を左頭上に掲げるように持ち上げる。その状態で土蜘蛛の脚を受け、爪の先端が刀の腹に触れた瞬間、切っ先を下げ、刀の腹を滑らすようにして軌道を逸らす。キイン、と、金属を擦る澄んだ音が聞こえ、土蜘蛛の爪が地面を穿つ。

最後の最後で骸骨侍から受け継いだ剣と技術、その片手版。

俺が託された彼の魂を、俺が俺なりに再現したもの。

「はっ！」

間髪入れず左手の剣を手放し、俺は跳んだ。跳躍の瞬間に両足に体内で生成された熱が集約され、爆発する。跳び上がり、眼下に映るのは、土蜘蛛の鬼の表情。

その瞬間、身体のコに集められた血液の変換が完了する。血液ではない別の何かが全身を駆け巡り、心臓ははち切れんばかりに暴れ狂う。戦いを求める闘争本能は健在、だがそれが意志を阻害することはない。精神と肉体。双方が、まるで別のものに生まれ変わったような気がする。

俺の中で、なにかが弾けた。

「おおおおっ！」

全身全霊の力を込めて刀を振り下ろす。

御薙流奥義《迅雷》。ただただ迅さを求めて振り下ろされる、至高の一撃。

「あなたの敗因は、一人でもできると思ったことなの。この世に完璧な存在なんていない。たとえ神様であっても、それは例外じゃないの。人間は誰しもが欠陥を抱えていて、それを補うために仲間がいるの。何でも一人でできるなんて、思い上がるな、なの」

刀が、土蜘蛛の頭を一切の抵抗なく通過する。額を抜け、口を抜け、顎を抜く。

「神様如きが、想いの力で人間に敵うと思うな、なの」

危うげなく着地し、俺は土蜘蛛に背を向けた。

「……ありがとう。時代に取り残された神」
（じちぐも）

俺と土蜘蛛と骸骨侍は、同じ存在だった。

俺は彼らを馬鹿にすることはできない。

彼らは……俺達は、どうしても曲げることができなかったのだ。自分が信じることを。

例え愚直だと分かっているとしても、そのせいで身を滅ぼすと分かっているとしても、それを変えてしまえば自分が自分でなくなってしまうような、ちっぽけで傍から見れば意味の無いプライドのようなもの。

だが、俺はもう、奴らとは同じではない。

そのおかげで戦いに囚われていた俺は……そのおかげで、戦いから解放されたのだ。

「おかげで俺はひとつ、強くなれた」

次の瞬間、土蜘蛛の身体がふたつに割れる。両断された身体は塵のような粒子となり、骸骨侍のように、塵となって消えていく。

「……………」

俺はそれを無言で見つめ、最後の粒子が消え去るのを確認してから、後ろに視線を向ける。

梢と祀。二人は驚きの表情を浮かべていたが、俺と視線が合うと、花のような笑みを浮かべてくれた。

その笑顔に、俺は笑顔を返しながら。

まるで電源の切れたテレビのように、俺の意識はそこで途切れたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4884y/>

戦闘狂の存在理由《レゾンデトール》

2011年11月19日06時45分発行